

KARASAWA

B Site

A transitional lithic industry
of the Late Palaeolithic
to the Incipient Jomon

閲覧用

唐沢B遺跡

後期旧石器時代末から縄文時代草創期
にかけての移行期の石器群

The site

The prehistoric site of Karasawa B is situated in Osa,
Samada-machi, Chisagata-gun, the Nagano prefecture, the
central Japan. It is located on a flat terrace of the right
bank of the Karasawa river, running through the east edge of
the Sugadaira Plateau, about 1280 m above the sea level. The
longitude of the site is 138° 20' east, and the latitude is 36°
31' north. The site represents one of the major Late
Palaeolithic to Incipient Jomon occupations densely
distributed on the plateau. The excavation at Karasawa B was
carried out on 15 to 18 August 1968 by the late Minoru
Morishima under the auspices of the Karasawa B Excavation
team, and an area of 140 m² was wholly uncovered to the
bedrock.

1998 November
千曲川水系古代文化研究所

Institute for Cultural Studies of Ancient Chikuma Valley



唐沢B遺跡は、長野県小県郡真田町大字長に所在する。遺跡周辺は菅平高原と通称される高冷地で、唐沢B遺跡は高原の東端を流れる唐沢川右岸の平坦面の微高地に立地し、標高1260mを測る。

唐沢B遺跡の発掘調査は、森嶋稔を調査担当者とする唐沢B遺跡発掘調査団によって、1968年8月15日から8月18日の4日間にわたり実施された。遺跡は140mの面積の調査によって完掘された。

唐沢B遺跡からは、尖頭器・搔器・削器・石刃・剥片・局部磨製石斧・打製石斧・砥石など36点の石器が出土した。このような内容の石器群は、後期旧石器時代末から縄文時代草創期にみられ「神子柴系石器群」と通称されている。出土した神子柴型石斧は、精巧に仕上げられた優品として、唐沢B遺跡を特徴付ける存在である。



唐沢B遺跡の石器 (2/3)
Lithic artifacts from Karasawa B

撮影 小川 忠博



唐沢B遺跡の石斧 (1/2)
Axes from Karasawa B

撮影 小川 忠博

序 文

森鷗 稔先生が志半ばで急逝されて、早二年が経ちました。

森鷗先生の研究活動は、専門としておられた旧石器時代をはじめとした考古学は言うにおよばず、民俗学などの関連諸学問、さらに文化財保護など多岐にわたって多くの論文を発表されております。また、研究活動の中には未発表資料も多くあります。このことについて、森鷗先生は生前に常々「考古学資料は私すべきでない」と考えられ、多忙であった教師生活を定年を待たずにやめられ、研究活動に入られたのも、そうした森鷗先生の信念を実践することにありました。しかしながら、森鷗先生の意図とは別に長野県考古学会会長をはじめ、幾多の要職に以前にもまして就かれることとなり、多忙の日々をおくられておられましたことは衆知のことであります。そして、森鷗先生の急逝は、これらから解放され、まさにこれからという矢先のことでした。

このたび、森鷗先生の研究活動の一端を引き継ぎ、『唐沢B遺跡』を先生が主幹された「千曲川水系古代文化研究所」から発行する運びとなりました。森鷗先生に教えを受けた私たち一同は微力ではあり、森鷗先生のお考えと異なる部分もあることをあえて承知の上であります。本書が、考古学の研究活動に有用にご利用いただければ幸いです。なお、今後も引き続き整理できたものから発行してまいる予定です。

発行にあたり、膨大な未発表原稿や資料の整理と発表については、森鷗和子夫人をはじめご遺族の方々の深いご理解と協力がありました。あわせて唐沢B遺跡の調査・報告にご配意いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

1998年11月26日

『唐沢B遺跡』刊行会
代表 笹 澤 浩

例　言　・　凡　例

例　言

- 1 本書は長野県小県郡真田町大字長の菅平地区に所在する唐沢B遺跡の学術調査報告書である。
- 2 本調査は、森嶋稔を調査担当者とし、真田町教育委員会の協力を得て、千曲川水系古代文化研究所が実施した。調査概要是、第Ⅰ章に記してある。
- 3 本調査にかかわるデータについては、調査担当者の森嶋が1996年に故人となってしまったため、僅かに不明個所が出ている。ご容赦願いたい。
- 4 本報告書作成の作業分担は以下のとおりである。
- ◎ 石器実測 森嶋 稔・堤 隆
- ◎ 石器トレース 堤 隆
- ◎ 分布図作成 川上 元・矢口忠良
矢島洋子・堤 隆
- ◎ 遺構写真 森嶋 稔
- 5 出土石器の石材同定については、東京都立青山高校柴田徹氏、野尻湖ナウマンゾウ博物館中村由克氏にご教示いただいた。
- 6 表紙・巻頭カラーの石器写真・巻末の石器写真（モノクロ）は、小川忠博氏に撮影いただいた。
- 7 英文要旨については、堤隆が作成した和文要旨を西秋良宏氏（東京大学総合研究博物館助教授）に翻訳いただいた。
- 9 本書の編集は、森嶋稔が主としておこない、森嶋没後は、川上元・矢口忠良・矢島宏雄・佐藤信之・堤隆が編集を引き継ぎ、笹澤浩がこれを校閲した。
- 10 本書の執筆分担は、目次に記した。
- 11 本遺跡の石器は、真田町教育委員会に保管されている。
- 12 本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々から貴重な御助言・御配意を得た。
御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。
(順不同・敬称略)
- 小川忠博、柴田徹、中村由克、岡本東三、田中英司、安斎正人、白石浩之、神野恵、栗島義明、小林達雄、林茂樹、土肥孝、佐藤宏之、須藤隆司、竹岡俊樹、小原等、小宮山茂樹、朴英哲、小野昭、西秋良宏、和根崎剛、黒岩正次、源訪間順、大竹憲昭、大沼克彦

凡　例

- 1 遺構の略称
ピット→P 土坑→D
- 2 掘団の縮尺
遺構分布図 1／60
土坑=1／40 焼跡炉=1／40
石器分布図=縮尺任意
石器実測図=4／5
- 3 図版の縮尺
遺構写真の縮尺については統一されていない。
遺物写真的縮尺については以下のとおりである。
剝片石器=2／3、石斧・砾石・礫=1／2
- 4 出土石器属性表の計測単位は、mm・g である。
- 5 石器の破損については、古い折れは墨化したが、新欠=ガジリや風化による剥落はその部分を墨化せず、空白としてある。

目 次

序文	2 石器石材	24
例言		
凡例	6 唐沢B遺跡の様相	—— 堤 隆 —— 57
目次	1 石器群の様相	57
	2 遺構	65
	3 編年的位置付け	66
	4 唐沢B遺跡の技術的組織	67
第1編 唐沢B遺跡の調査	—— 1	
1 発掘調査の経緯	3	
1 調査に至るまで	川上 元	3
2 調査体制	森嶋 稔	3
3 発掘調査日誌	森嶋 稔	4
2 遺跡の環境	5	
1 自然環境	矢口忠良	5
2 歴史的環境	川上 元	7
3 発掘区と層序	川上 元	14
1 発掘区		14
2 層序		14
4 遺構	堤 隆	15
1 遺構		15
2 石器分布		15
3 焼窯炉		16
4 土坑・ピット		16
5 石器と石材	堤 隆	22
1 石器		22
第2編 神子柴系文化をめぐる諸問題		
	森嶋 稔	73
神子柴型石斧をめぐっての試論		75
神子柴型石斧をめぐっての再論		84
使用破壊痕のある神子柴型石斧		
III b型をめぐって		97
長野県長野市信田町		
上和沢出土の尖頭器		102
神子柴型尖頭器とその周辺の		
二、三の課題		104
系列編年の試み		107
要旨		109
和文要旨	堤 隆	111
英文要旨	翻訳／西秋良宏	113
写真図版		PLATE 1~18
後記		
抄録		
Abstract		

第1編 唐沢B遺跡の調査



Edge-ground axe from Karasawa B (2/3)

1 発掘調査の経緯

1 調査に至るまで

昭和41年度、長野県教育委員会が主体となって行った「新産都市等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査」は、当時開発の進行していた地域の遺跡の現状を把握するため県内一円にわたって実施されたものである。

この分布調査の一環として、菅平高原一帯（真田町北部地区）の調査が、森嶋稔団長以下8名の地元研究者によって実施されたのは、昭和41年11月19日から同月27日までであった。この調査は、菅平地域の以前から確認されていた考古遺跡周辺の開発の進行状況を確認し、遺跡がどの程度開発の影響を受けているか等を調査することが主体であったが、あわせて各遺跡の規模や内容を再確認する調査ともなった。

菅平において本格的な考古学調査が実施されたのは戦後の昭和20年代後半のことと、特に昭和28年からの『信濃史料』編纂のための県下全域の考古遺跡・遺物の調査は菅平一帯にも及び、約44か所の遺跡・遺物採集地点が確認されるに至り、うち4地点では旧石器とみられる大形先刃器や石刀・石核が採集された。

その後の昭和41年の分布調査では、菅平一帯で49か所の遺跡を確認、うち7地点で旧石器が確認された。菅平1223の31の畠地にある唐沢B遺跡からは、地主の黒岩正次氏によって耕作の際に、見事な神子柴型石斧が1点採集されており、注目を集めた。これは菅平地域では初見の石器であるため、分布調査では、既出資料に神子柴型石器が含まれているかどうかの再確認や、唐沢Bの遺物包含層等の細部にわたる調査を行った。その結果、神子柴型石斧や尖頭器などが、すでに表採されていたことがわかった。遺跡の層位では表土層・褐色土層・ローム層の層序を検出し、このローム層中からも石器1点を確認、遺物包含層は、ローム層上面と認定することができた。さらにその立地は唐沢川にのぞむ舌状丘陵上に位置し、独立丘的であり、神

子柴遺跡の立地との類似も注意された。

この分布調査の時点では、すでに遺跡に隣接する山林を別荘地として開発する計画があががっていたため、近い将来、遺跡の破壊が目に見えていたので、早急に発掘調査が必要であるとの要望をしておいた。

今回の発掘調査は、その全貌が明らかでない神子柴系文化の追求と、開発による遺跡破壊以前に、遺構の全容を明らかにする意図で実施された。

2 調査体制

唐沢B遺跡の発掘調査は、森嶋稔が主体となり、学術調査として申請し、昭和43年8月15日から同月18日までの4日間、地元真田町教育委員会の後援を受けて実施した。調査の組織等は以下の通りである。

(1) 調査の組織 (所属は当時)

- ①調査主体者 森嶋 稔 (戸倉町五加小学校教諭)
- ②発掘担当者 同 上
- ③発掘調査員 早川正一 (南山大学)
- 横田義章 (奈良国立文化財研究所)
- 川上 元 (上田市立博物館)
- 矢口忠良 (信大教育学部学生)
- 小宮山茂樹 (地元研究者)
- 小原 等 (菅平小学校教諭)
- 小林 卑 (上水内北部高校教諭)
- 金井正彦 (立正大学生)
- 五味正親 (長野西高校教諭)
- 林 茂樹 (県教育委員会)
- ④発掘協力者 黒岩正次・盛泰 (土地所有者)
- 小宮山茂樹、小原 等
- ⑤発掘参加者 安藤 裕 (東京教育大助教授)
- 大熊 融 (真田町教育委員会教育長)
- 柳沢孝雄 (同教育委員会)
- ⑥調査の後援 真田町教育委員会

3 発掘調査日誌

◆ 昭和43(1968)年8月14日(水) 晴(発掘前日)

午後4時、真田町教育委員会に教育長を訪問しあいさつ。覚書を交換する。

川上元君の車で、上田駅で合流した早川正一君と一路青平へ。現地では、地主黒岩正次氏・協力者小原等先生・小宮山茂樹先生を訪問し、調査にあたってのあいさつ。

小原先生の表面採集資料を見ておどろく。神子柴そのものの丸のみ、キュウリ型磨石には、ものも言えない程であった。

小原先生宅でビールをいただき、遺物をおかりして宿舎丸山荘に帰る。丸山荘には最終バスで横田義章氏、矢口忠良君がくる。

成功を祈り大いに語り飲む。

◆ 8月15日(木) 晴のち曇

午前8時半 器材運搬

9時半 グリッド設定(第7図参照)

10時 発掘開始

発掘参加 森鶴・早川・横田・川上・矢口・小原
小宮山・黒岩正次・盛泰

A-12の漸移層下に火床を認め、それを掘るとpitになる。その面が生活面と考えられ地床炉であろうと思ふ。

A-11には漸移層土がつまるpitが2つ認められた。なおA-11の南のpitわきに黒耀石の剝片が1点検出された。(A-11には1.5×1.5mの試掘pitがかかり検出された。)

C-14の黒土層には局部磨製の石斧(第25図26)が黒土層につきしさつて発見された。耕作の為に移動していることは確実である。

それを追って午後1時半より、B-15、C-15、E-15、F-15を発掘する。26の神子柴型石斧と同様にして、第28図29の石斧が出土する(C-15)。黒土層下面、漸移層上面である。統いて、第23図24玄武岩製の局部磨製石斧が漸移層から検出された。

午後5時50分調査終了。明日を期す。

◆ 8月16日(金) 曇のち晴

参加者 森鶴・早川・横田・川上・矢口

金井正彦(立正大学生)

午 後 小林学・五味正親(長野西高校)

協 力 小原・小宮山・黒岩氏子息盛泰氏・自由参加者など数名

参観者 安藤裕教育大助教授

真田町教育委員会大熊教育長及び柳沢書記

午前9時作業開始

昨夜来的雨で現場の状態を心配したが、思ったよりひどくなく水はけのよい所でかえってしめあって掘りよい。

C-15、D-15を追うように、B-14、C-14、D-14、E-14、F-14を追求する。

C-14に集中して石器が出土する。まったく神子柴と同様にして、完成品のみでこまかい剝片は存在しない。

C-13、D-13の境に円形の扁平な礫、D-12に安山岩のBladeが1点検出された。C-12及びD-12と、D-11・C-11の境に礫群が検出されはじめた。包含層は漸移層下部である。

五味氏は午前、A-17で深掘、柱状図、及びサンプリングをしてくれる。横田と矢口は午前に地形測量を行ふ。

◆ 8月17日(土) 時々雨のち晴

参加者 森鶴・早川(午前中のみ)・横田・川上・小林・矢口・金井・小宮山・林茂樹(午前)

雨のため午前9時に宿を出発。作業開始。降ったり止んだりの天気の中を遺跡と小原先生宅を往復して進める。

C-16、D-16を川上君、B-11、C-11を小林、矢口、林、D-11、E-11グリッドの調査を金井、早川を中心に行う。森鶴、横田は平面プランを追う。調査はE-14、D-14、E-13、D-13に及ぶ。ピット3などの確認する。

◆ 8月18日(日)

調査最終日。詳細な日誌残らず。

(以上は森鶴による調査日誌。所見不明瞭な部分もあるが、原本に忠実に収録した。)

2 遺跡の環境

1 自然環境

唐沢B遺跡の所在する菅平地域は、上信火山帯のはば中央部に位置し、根子岳（2195m）と四阿山（2333m）火山の形成した広大な高原地帯をなしている。地形的には唐沢（ダボス川）を境として、西側の標高約1250m前後の湿原を囲む平坦部の小盆地と、東側の四阿山火山の溶岩流によって形成された、南北向きの緩やかな傾斜をもつ裾野面とに、大きく二分できる。

西側地域は、現在の菅平高原の中心地域で、西北から東南の方向に幅約1km、長さ約4kmの平坦部を有す。かつて「沼平」と呼称された地域で、ここも四阿山火山の溶岩流によってせき止められ、菅平湖が形成されたところである。今も中継地区に所在する菅平小学校南側にある湿地帯として、名残りをとどめる。

唐沢B遺跡は、この平坦地の東端で唐沢川に臨む微高地の頂部手前に立地し、標高1260mを測る。

一方、南面する広大な裾野面は十ノ原と呼ばれ、この裾野面を東北から南西方向に走る唐沢・大明神沢・中之沢などの各沢は、すでに開析が進行して田切地形をつくっている。この沢水の末端は平坦部の湿原に源を発する大川と合流して南に流れ、神川となり、さらに上田市神川地域で千曲川に注ぎ込んでいる。

四阿山の烏帽子火山群は、およそ70万年前位から35万年位までの時期に火山活動が盛んとなった。菅平地域一帯の土壤は、四阿火山の普通輝石紫蘇輝石安山岩を母岩とし、その上に火山碎屑物、火山灰などが堆積している。四阿山・根子岳・唐沢・大明神沢には、それぞれ溶岩の露頭がある。また、西側の平坦部も厚い堆積層に覆われ、その上部は黒色の腐植土が30~50cmほど堆積しており、その下部に黄褐色の火山灰質ローム層が続く。その中央部は泥炭層と湖沼堆積の砂粘土層からなり、今なお湿地を形成している。泥炭層はおよそ1260mの等高線以下にあり、ここがかつての

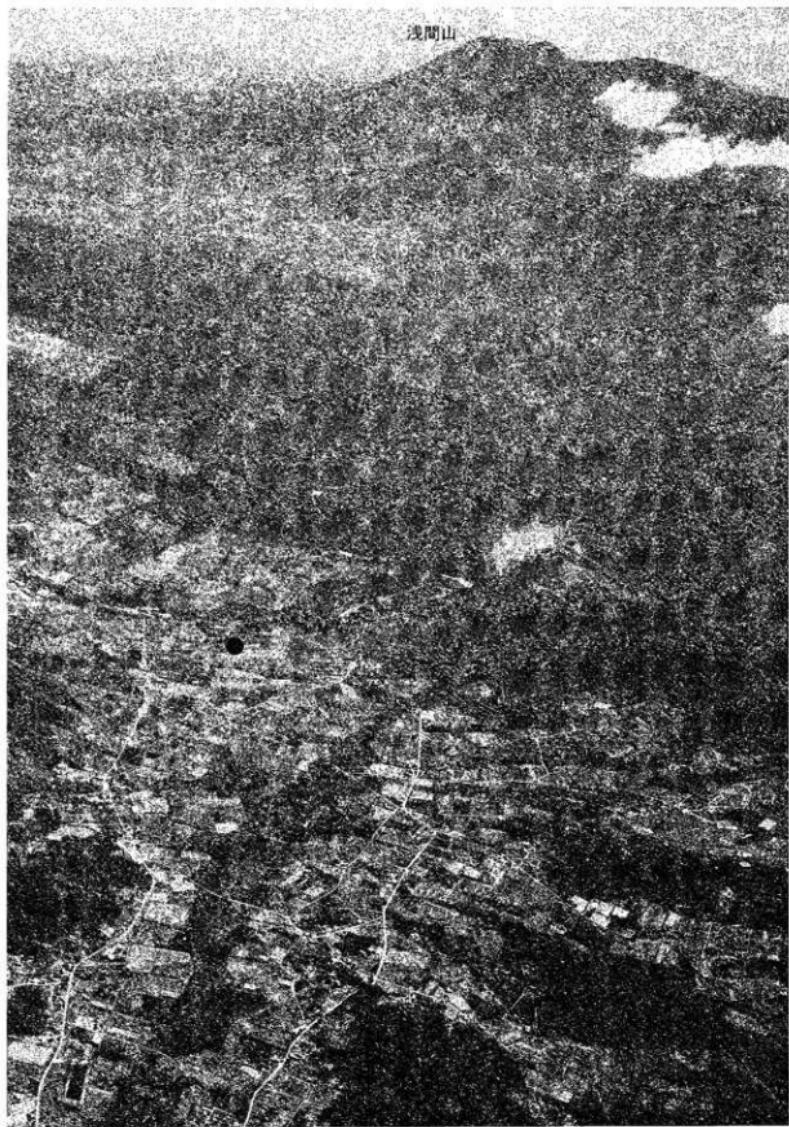
湖岸であったことを暗示している。現在、この線付近には湧水が多く、遺跡立地の要因ともなっている。

菅平の気象は温帯山地気候と呼ばれるもので、夏は冷涼であるが冬の寒さは意外に厳しく、さらに年間の昼夜の気温の差も著しいのが特徴である。今までの記録によると、菅平の最高気温は30.9°C（昭和22年8月13日）で、最低気温は-24.0°C（昭和45年1月27日）であった。また、100年間（明治22~昭和27年）の平均的気温を見ると、菅平の約7°Cに対して上田盆地は約12°Cであり、およそ5°Cもの温度差がある。年間の降水量は1100mm前後で、わが国では比較的雨の少ない地域である。かつて唐沢B遺跡に入りが訪れたのは、最終氷期最終末期（晩水期）にあたる約15000年前のことと、現在よりさらに4~5°C平均気温の低い厳しい気候下であったものと推定される。

菅平地域は植物の宝庫である。根子岳・四阿山頂付近の亜高山帯には、トウヒ・シラビソ・ハイマツ・イワカガミなどが生育し、さらに下って、ダケカンバの樹林帯を過ぎるとシラカバ林に入る。この地区では、クマイザサの草原が目立つようになり、春にはタカネザクラやムラサキヤシオツツジが美しく咲く。

さらに下って人家の多い高原地区の、比較的自然が残る場所では、アカマツ林・ミズナラ林・ススキ草原がみられ、県天然記念物のツキヌキソウも自生している。湿原周辺には、ハナヒヨウタンボク・オニヒヨウタンボク・シバタカエデ・クロミサンザシ・ヤマハマナスなどの、全国的に見ても貴重な植物が自生する。また、かつて菅平に人が住み着く以前は、一帯は深いブナの森で覆われていたと考えられるが、このブナ自然林が菅平への登り口にあたる大洞地区にわずかに残り、貴重である（『真田町誌』自然編等参照）。

標高1200mの高原地域で、湿地を中心とした平坦地に旧石器時代から縄文草創期の遺跡群が形成される状況は、同じ千曲川水系の野辺山高原と類似している。



写真は西方より(『菅平高原誌』より転載)

第1図 菅平高原と唐沢B遺跡(●)
Fig. 1 Areal view of Karasawa B site (●) in Sugadaira plateau (facing west)

2 歴史的環境

(1) 菅平高原の考古学的環境

上田市の東北部に位置する菅平高原は、浅間高原や志賀草津高原とともに上信越高原国立公園に含まれている。今ではホテルや旅館が建ち並び、冬はスキー、夏はラグビーなどの合宿地として賑わいをみせ、また、高原野菜の産地としても知られている。この平坦部は、かつて「沼平」と呼称されていたところである。江戸期の『宝永の差出帳』によると「中央に沼があり、ヨシや菅の密集している所」と記されており、こうした植物が平坦部の沼を中心に多く茂っていたことから、いつからか「菅平」とも呼ばれるようになつたとみられる。

遺跡・遺物の分布は、この沼の周辺に集中しているが、とくに湿地帯の北側の日当たりのよい南斜面に多くの遺跡が発見されている。この地区はまた、早くからの開拓による耕作地拡大のために、遺物の検出率も多いことは言うまでもない。

今までに確認された遺跡・遺物は、旧石器時代に属するものから奈良・平安期に至るものまである。このうち縄文文化期がその最盛期となり、とりわけ、早期の押型文系文化に属す遺跡が数多く、この高原全域に分布している。また、縄文前期の遺跡も多くみられ、さらに中期の遺跡・遺物もいくつか検出されている。しかし、縄文後晩期に所属する資料は極端に少なくなってしまう。

弥生期の遺物も比較的多く発見されている。また、奈良・平安期の遺物も検出される遺跡もわずかに確認されている。

もう一方の十ノ原地区は、まだ山林や原野となっており、人為的な開発が平坦部の菅平地区と比べると少ないため、遺跡の検出も比較的少ない。数少ない検出された遺跡の立地をみると、湧水や沢川にのぞむ台地上に立地するものが多いことが注意される。また、弥生期の遺物を豊富に包含する岩陰や洞穴遺跡の存在も、この地区的特徴としてあげられる。

ところで、この菅平地域における考古学的調査は、すでに大正時代から行われているが、高原一帯の遺跡・遺物の全体的確認とその研究は、昭和20年代後半

から本格的に開始されたとみてよい。すなわち、昭和26年（1951）8月に小県誌資料編纂委員会による、縄文早期の遺物をだす菅平東組遺跡の発掘調査を皮切りに、昭和28年から『信濃史料』第一巻刊行に伴う調査が全県的に開始され、これに伴って菅平地域にも調査の手が入った。それ以後多くの研究者が、足しげく菅平を訪れるようになり、地元の人々が開墾や耕作の際に採集され保管していた遺物に眼が向けられ、これらの資料が学界に発表されるようになった。この調査では、この高原一帯から約44か所の遺跡・遺物の採集地点が確認された。

昭和37年夏の十ノ原の陣ノ岩岩陰遺跡と、その翌年夏実施した十ノ原唐沢岩陰遺跡の発掘調査は注目される。前者は、約2.5mの厚さの包含層の最下層に縄文早期から始まり上層になるにしたがって、前期・中期・後期・弥生・古墳時代と各時代の遺物が層位的に確認された。このうち、縄文土器は各時期いずれも数個体の破片にすぎないのに対して、弥生土器は中期・後期ともかなりの量が検出された。とくに弥生後期の箱清水期は多く、銅鏡の出土と共に興味深い問題を内蔵している。また、後者も下層より縄文早期・前期・後期・晩期・弥生中期・後期の土器が出土し、他に石錘・石匙・石鍬などの石器類、さらには豊富な骨角器と自然遺物が検出された。唐沢岩陰遺跡からも、陣ノ岩岩陰遺跡と同様、弥生中・後期の豊富な遺物群を確認することができた。

昭和56年3月に刊行された『長野県史』考古資料編の遺跡地名表では、真田町全城で194か所の遺跡が登載されているが、このうち菅平地域では84か所の遺跡が報告されている。この内訳は菅平地区68か所で、十ノ原地区16か所である。また、旧石器時代にかかる遺跡及び石器出土地点は、菅平全城でおよそ16か所が確認されるに至った。

なお、平成8年3月に真田町教育委員会の実施した町内遺跡の現況確認調査では、菅平地域に89遺跡を確認しているが、このうち十ノ原地区で21か所と遺跡数が増加した。これは、開発が菅平地区から十ノ原地区に拡大してきたことを示している。

(2) 旧石器時代から縄文草創期の遺跡

菅平高原においては、旧石器時代の可能性のある遺跡と縄文草創期の遺跡18か所が確認されている（第2図・第1表）。水期区分でいえば、2万年前の最終氷期最寒冷期以降で晚氷期までの遺跡である。

旧石器時代の可能性のある遺跡としては、三日城遺跡・学校敷地遺跡・原谷地A・Bなどがあげられる。三日城遺跡の第3図1・2の石器は、ティビカルではないがナイフ形石器としての認識も可能である（一方で周縁加工の尖頭器の可能性もある）。これ以外の遺跡には、ナイフ形石器や細石器など典型的な旧石器が含まれず、草創期にもある石刀や尖頭器がみられるのみで、その位置付けは微妙である。原谷地Bの11の尖頭器も細石器の前段階の旧石器というより、草創期のものなのかもしれない。学校敷地遺跡の8は両設打面の石刃石核、5は上下両方向からの剥離痕を残す石刃。

縄文草創期の遺跡は、10か所以上確認されている。なかでも小島沖遺跡では充実した資料がみられている。石器は、局部磨製石斧2点・打製石斧2点・削器2点・尖頭器1点・有茎尖頭器2点などが採集されている（第4・5図）。20は両刃で扁平、21は片刃で甲高な局部磨製石斧で、双方とも頁岩製で先端刃部のみ

背面に研磨がなされた神子柴型石斧である。22・23は頁岩製の打製石斧であるが、草創期のものかどうかははっきりとしない。15はチャートの尖頭器、16・17は黒曜石の有茎尖頭器で、16は鋸歯状の側縁をみせている。18は削器、19は石刃である。

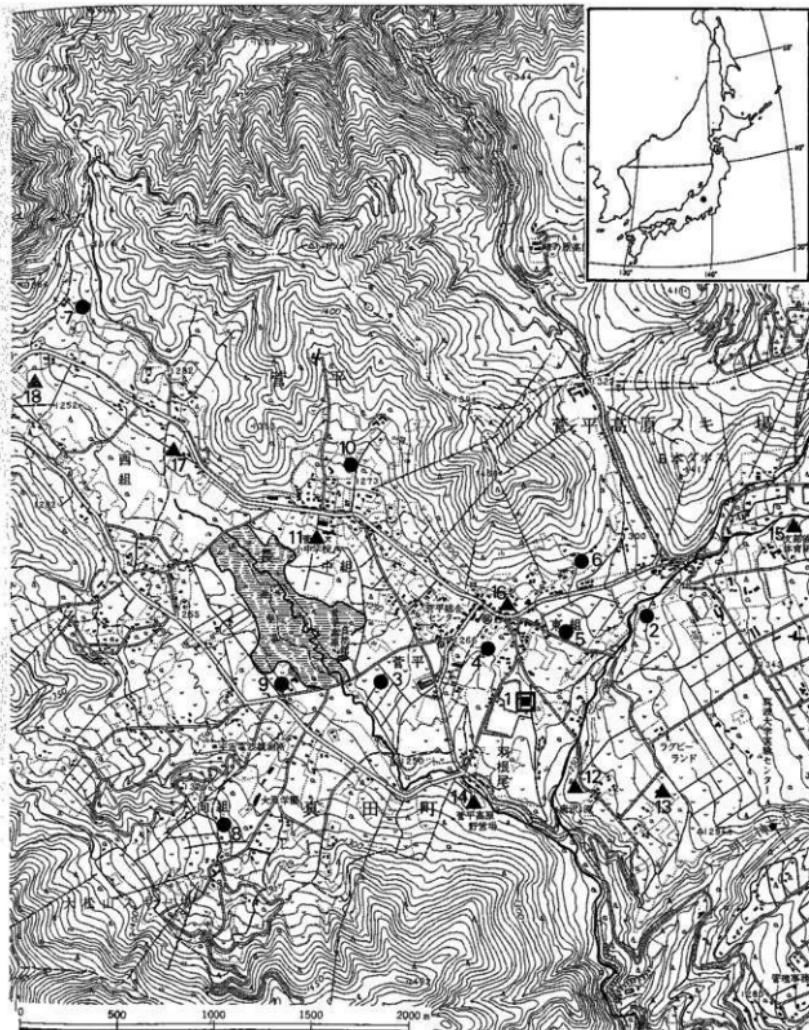
星敷畠遺跡（第5図）では、局部磨製石斧1点・打製石斧1点・削器1点・石刃2点・有茎尖頭器2点などが採集されている。24は頁岩の局部磨製石斧で、その先端部の剥離面は再生刃部というより折面であろうか。石戸山A遺跡（第6図）では石刃素材の彫刻刀形石器（27・28）、削器（29・30）が出土した。これは旧石器の可能性もある。この他、木葉形尖頭器（第6図31）と尖頭器未成品（32）は大松山遺跡で、有茎尖頭器は向組A遺跡（35）や矢追別莊裏遺跡（36）・唐沢D遺跡（37）で採集されている。また、詳細な出土地はわからないが第3図14の局部磨製石斧が菅平にある。東組E遺跡では、凝灰岩の石刃を素材とした削器2点（第6図33・34）が採集されている。これは、旧石器である可能性もある。

このように菅平高原地域に旧石器時代から縄文草創期の遺跡が数多く形成された理由のひとつとしては、湿地を取り巻く高原の生態系に適応した豊富な動物相がみられたことが考えられる。

第1表 菅平高原の旧石器～縄文草創期の遺跡と出土遺物

Table 1 Sites and artifacts of the Late Palaeolithic to Incipient Jomon period in Sugadaira plateau

番号	器種	ナイフ形石器	尖頭器	有茎尖頭器	局部磨製石斧	打製石斧	彫刻刀形石器	搔器	削器	石刃	剥離面	石刃石核	細片石核	砥石	その他	計	時代	
遺跡																		
1	唐沢B		5		5	6		1	4	1	11				2	1	36	縄文草創期
2	唐沢D			1													1	縄文草創期
3	小島沖		1	2	2	2				1							8	縄文草創期
4	屋敷畠			2	1	1				1	2						7	縄文草創期
5	十二塚原		1			2				1							4	縄文草創期
6	東組E									2							2	縄文草創期
7	石戸山A					1	2			2							5	縄文草創期
8	大松山		2							1							3	縄文草創期
9	向組A			1													1	縄文草創期
10	矢追別莊裏			1													1	縄文草創期
11	学校敷地									1	1	1	1				4	旧石器？
12	原谷地A									2							2	旧石器？
13	原谷地B			1			1			1							3	旧石器？
14	三日城		2							2							4	旧石器
	計		2	10	7	8	12	3	1	14	7	12	1	1	2	1	81	

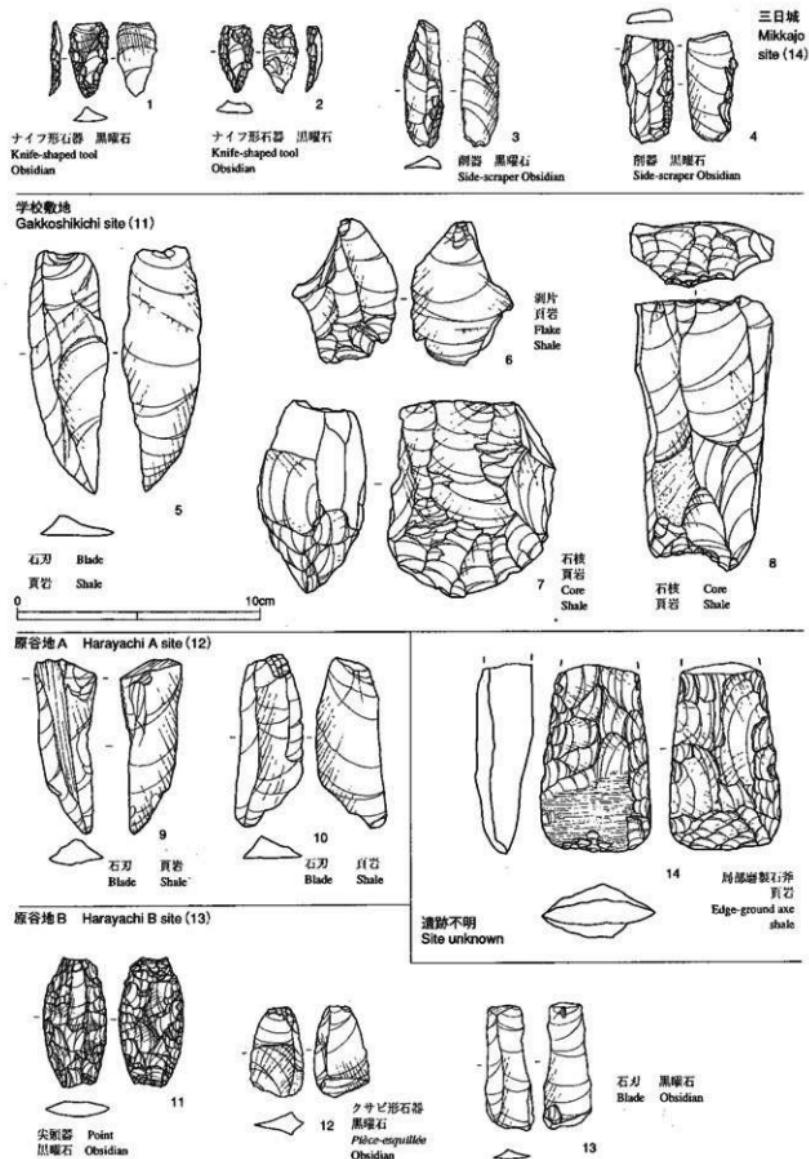


第2図 菩平高原の遺跡分布 (1/25000)

- 縄文草創期 唐沢B(1)、唐沢D(2)、小島沖(3)、星敷畑(4)、十二塚原(5)、東組E(6)、石戸山A(7)、大松山(8)、向組A(9)、矢追別花崗(10)、学校敷地(11)。
- ▲後期旧石器～縄文草創期 原谷地A(12)、原谷地B(13)、三日城(14)、IIT試験場西口(15)、東組G(16)、西組A(17)、西組D(18)

Fig2. Distribution of sites of the palaeolithic to Incipient Jomon period in Sugadaira plateau (1/25000)

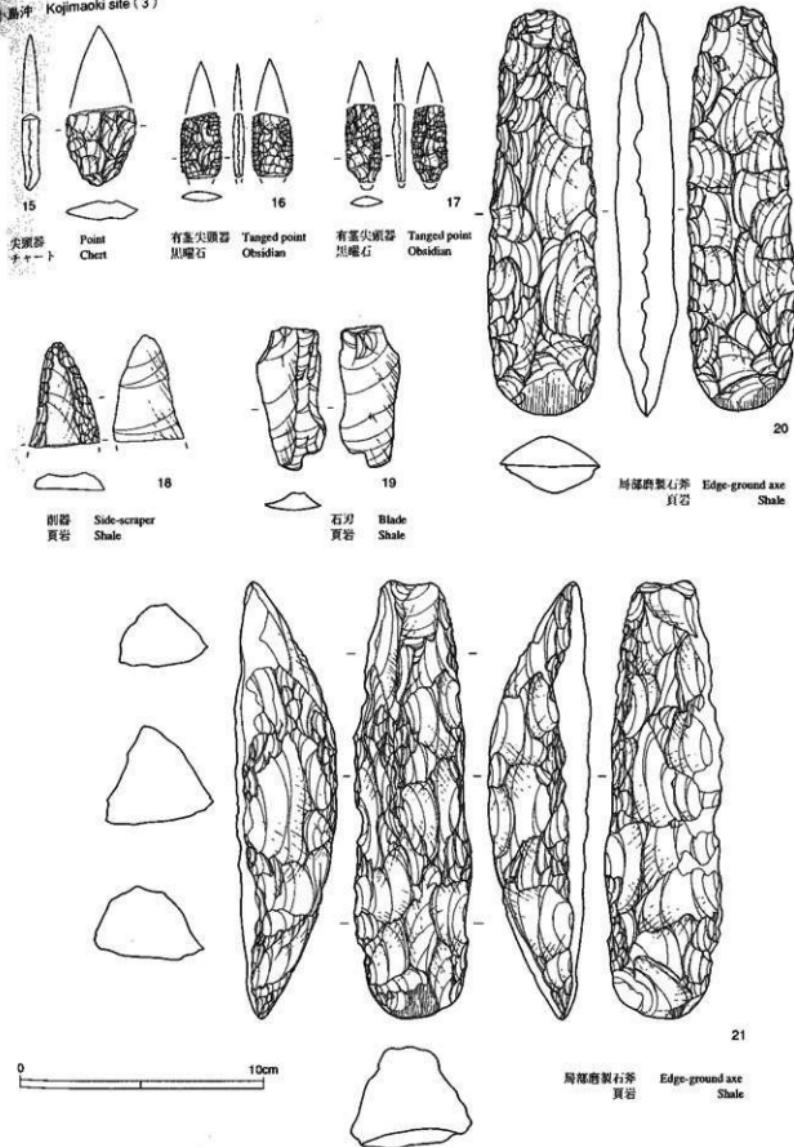
- Incipient Jomon sites Karasawa B(1), Karasawa D(2), Kojimaokita(3), Yashikihata(4), Junitsukahara(5), Higashigumi E(6), Ishidoyama A(7), Omatsuyama(8), Mukaiyama A(9), Yasoibessoura(10), Gakkoshikichi(11).
- ▲ Palaeolithic to Incipient Jomon sites Harayachi A(12), Harayachi B(13), Mikkajo(14), Kyushikenjo nishiguchi(15), Higashigumi G(16), Nishigumi A(17), Nishigumi D(18)



第3図 菅平高原の後期旧石器～縄文草創期の石器 (1/2)

Fig.3 Stone artifacts of the palaeolithic to Incipient Jomon period in Sugadaira plateau (1/2)

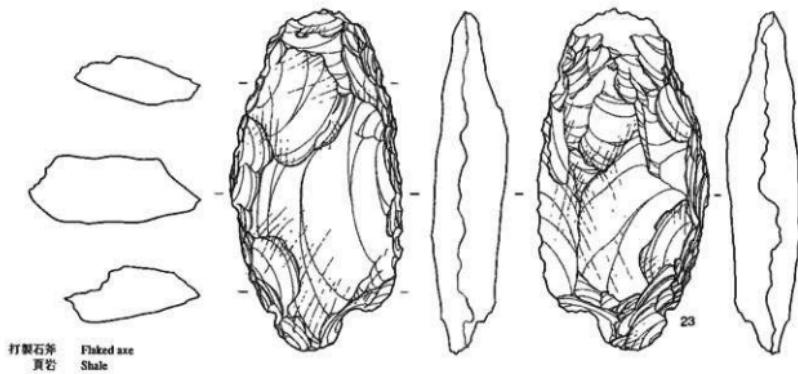
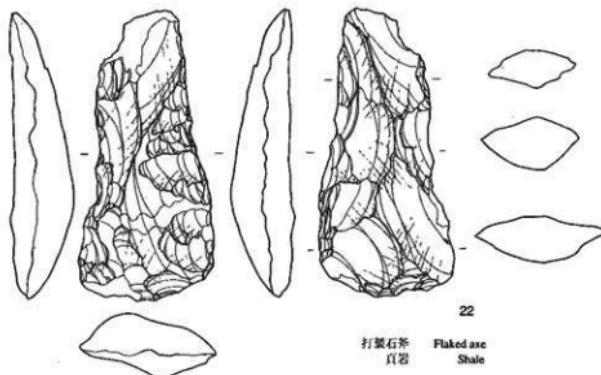
高島沖 Kojimaoki site (3)



第4図 蒼平高原の後期旧石器～縄文草創期の石器 (1/2)

Fig.4 Stone artifacts of the palaeolithic to Incipient Jomon period in Sugadaira plateau (1/2)

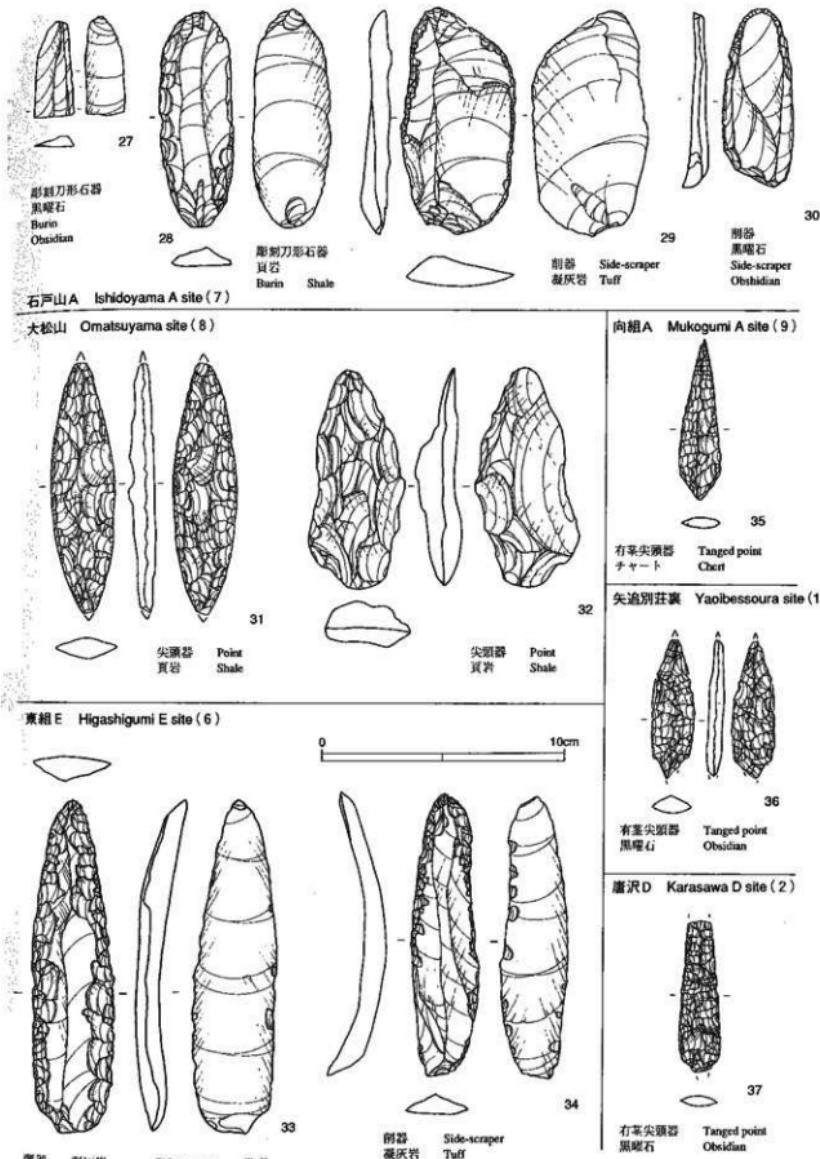
小島沖
Kojimaoki site
(3)



屋敷畠
Yashikihata site
(4)



第5図 菅平高原の後期旧石器～縄文草創期の石器 (1/2)
Fig.5 Stone artifacts of the palaeolithic to Incipient Jomon period in Sugadaira plateau (1/2)



第6図 菅平高原の後期旧石器～縄文草創期の石器 (1/2)
Fig.6 Stone artifacts of the palaeolithic to Incipient Jomon period in Sugadaira plateau (1/2)

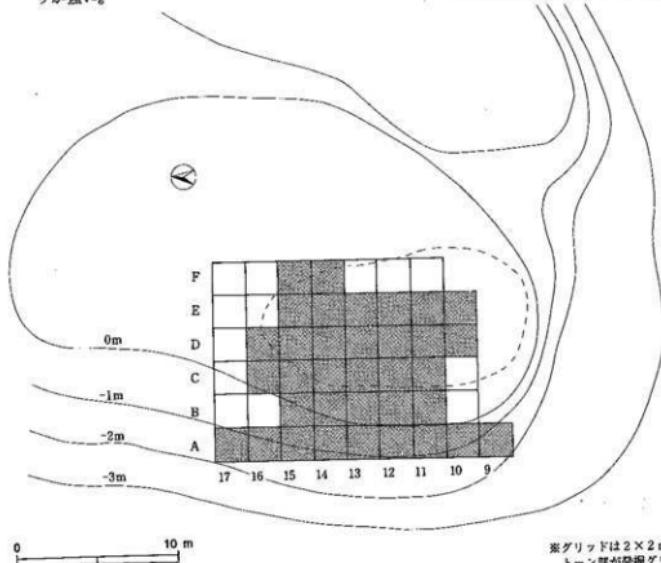
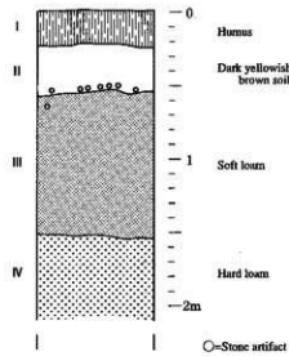
3 発掘区と層序

1 発掘区 (第7図)

唐沢B遺跡の発掘区は、 2×2 mの正方形のグリッドを設け、その片方の軸を磁北に向け設定した。

2 層序 (第8図)

- I層 表土層 黒褐色で、厚さ20~25cm。
- II層 漸移層 暗黄褐色で、厚さ25~30cm。ほとんどの出土石器(○)がこの層に包含される。
- III層 ソフトローム層黄褐色で、厚さ1m前後。その上部に若干の石器が包含される。この層の上面がいわゆる生活面としてとらえられる。
- IV層 ハードローム層 黄褐色で、III層にくらべしまりが強い。



第7図 発掘区 (1/300)
Fig.7 Excavation area (1/300)

4 遺構

1 遺構

唐沢B遺跡を構成する遺構は、石器分布（ブロック1、その他）、焼窯炉1基・土坑6基・ピット4基である。それらの遺構の配置関係については、第9図に示しておく。

2 石器分布

石器は、C-14グリッドを中心としたブロック1（第10図）に集中して分布し、その他ではD-12・A-11グリッドで散発的に検出されている。

各地点での出土石器点数については、表面探集資料の点数も含め第2表に示した。

（1）ブロック1の石器分布

C-14グリッドを中心とした径3m前後の弧状の石器分布をブロック1とした。ブロック1では、22点の石器が検出された（第10図）。

ブロック1の中において、さらに石器ごとに分布の偏在性がみられるため、そのまままとまりを便宜的にスポットa～iと呼称した。

スポットa（第11図）は、ピット1の東で、25の局部磨製石斧が、実測図のA面を表にして、刃部を北北西に向け出土した。

スポットb（第11図）は、ピット1の西で、24の局部磨製石斧が、実測図のB面を表にして、刃部を西南西に向け出土した。

西に向け出土した。

スポットc（第11図）は、29の打製石斧が、実測図のA面を表にして、刃部を北北西に向け出土した。

スポットd（第12図）では、28・30・32の打製石斧と、16・22の剝片の計5点が出土した。28は刃部を南西に向け実測図のB面を表にして、30は刃部を北東に向け実測図A面を表にして、32は刃部を南西に向けA面を表にして出土した。30と32の刃部は互いに接するような状況で出土している。剝片は石斧3本の南西側に接して16がB面を表に、22がA面を表にして出土している。現在22の剝片は紛失しておりはっきりしたことはいえないが、おそらく16と22は同一個体であり、双方の折面で接合するものと考えられる。

スポットe（第11図）では、7の削器がB面を表にして先端を南東に向け出土、26の打製石斧は、側面C面を表にし刃部を南西に向け出土した。

スポットf（第12図）では、1・3の尖頭器、6の搔器、13の石刃、17・21の剝片、34・35の砥石の計8点が出土した。1の尖頭器は先端を西に向け実測図のA面を表にして、3の尖頭器は基部を上にして倒立した状態で出土した。6の搔器はA面を表に先端を北に向け、13の石刃はやや離れた位置からA面を表に先端を西南に向けて出土した。17の剝片はB面を表に向けて出土、21の剝片の出土状態はわからない。34の砥石の上半部は実測図のC面を表にして南北方向に向いて出土（下半部は表探）、35はA面を表にして北東-南西方に主軸を向け出土している。

第2表 唐沢B遺跡の出土石器
Table 2 Stone artifact assemblages from Karasawa B site

	尖頭器	搔 器	削 器	石 刃	剝 片	局部磨製石斧	打製石斧	砥 石	疊	計
ブロック 1	3	1	1	1	6	3	4	2	1	22
1-12グリッド					2					2
1-11グリッド			1		1					2
表面探集	2		2		2	2	2			10
計	5	1	4	1	11	5	6	2	1	36

スポットg（第11図）では、4の尖頭器がB面を表にして先端を南東に向け出土した。

スポットh（第11図）では、18の剝片が出土したが、その方向や表裏などの出土状況の記録は残されていない。

スポットi（第11図）では、20の剝片が出土したが、その方向や表裏などの出土状況の記録は残されていない。

ブロック内で器種別に石器分布をみると、石斧はスポットa・b・c・dとブロックの北側に片寄って分布する傾向が明らかである。これに対しeを例外として、f・g・h・iのスポットには石斧は含まれず、尖頭器・搔器・石刀・剝片・砥石などが分布する。つまり、石斧類とそれ以外の器種が対置的に分布する傾向は明らかである。

（2）ブロック外の石器分布

ブロック外出土の石器としては、8の削器・14・15と19の剝片、36の礫がある。

8の削器と19の剝片は、3～4m距離をおいたA-11グリッドで出土した。36の礫はD-13から、14・15の剝片はD-12グリッドの焼跡が東側から出土した。

なお、上記のほか、おそらくは大部分がブロック1に帰属するとみられるものの、正確な出土地点に戻すことができない表面採集資料が10点あることをつけ加えておく。

3 焼跡炉

焼跡炉（第13図）は、C・D-12グリッドにおいて検出された。本構造はその端部がD-3号土坑と接するが、ブロック1の石器分布とは3～4mの距離を隔てている。

本炉址は、150×120cmの楕円形に焼土が広がり、深さは10cm前後とあまり深くなく、しっかりととした掘り込みをもつものではない。プラン内部には、焼け跡とみられる扁平な赤化礫8点（図の網点表示）と、小形礫3点がみられた。

4 土坑・ピット

（1）土坑

土坑は6基検出された。D-1号土坑（第13図）は、100×95cm深さ26cmで円形を呈し、覆土は1層で暗褐色土層である。D-2号土坑（第13図）は、160×120cm、深さは140cmと他にくらべ深く、楕円形のプランを呈する。覆土は2層に分層され、1層が暗褐色土層、2層は白色粘土層である。土坑の底面には、厚さ3cmほどの炭化物状の堆積が認められた。

D-3号土坑（第13図）は、焼跡炉と接して存在し、135×95cm深さ70cmで、楕円形のプランを呈する。D-4号土坑と接するが、その新旧関係は明らかでない。覆土は2層に分層され、1層が暗褐色土層、2層は白色粘土層である。土坑の底面には、扁平な礫1点と厚さ2cmほどの炭化物状の堆積が認められた。

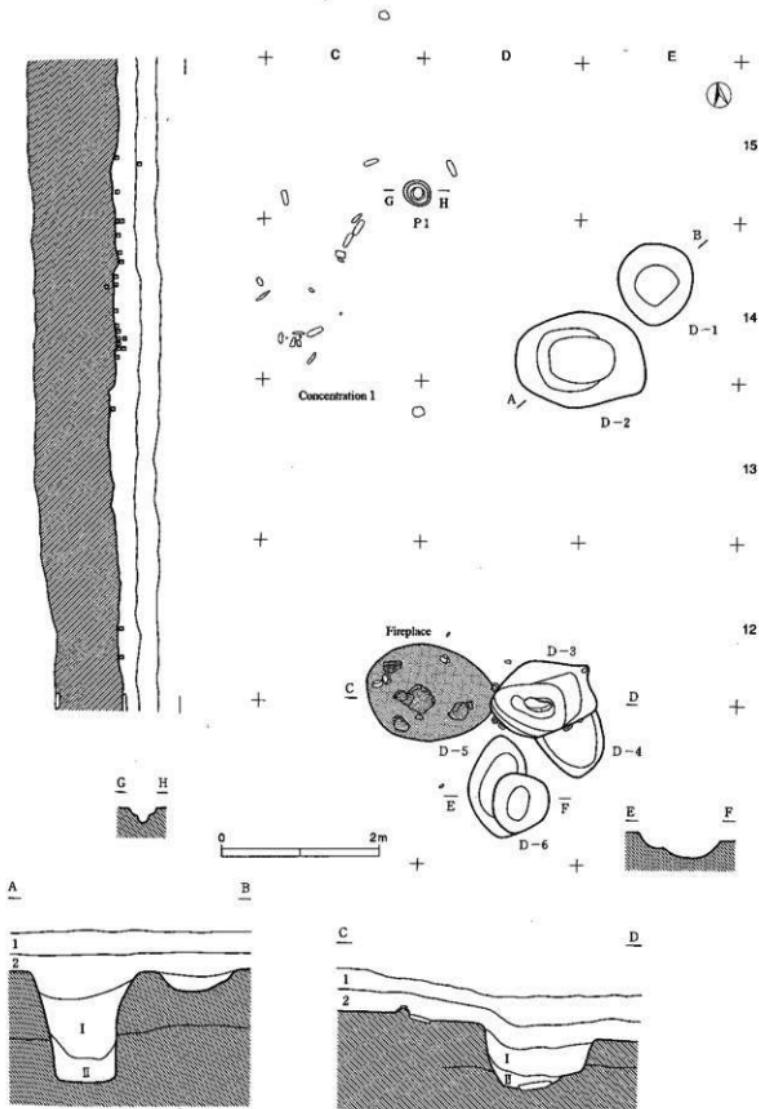
D-4号土坑（第13図）は、D-3号土坑と重複するが、新旧関係は明らかでない。残存部分は65×85cm深さ15cmで楕円形を呈する。覆土についての記載は残らず。D-5号土坑（第13図）は、130×70cm深さ19cmで楕円形を呈し、覆土は層に分層された。D-6号土坑と重複するが、新旧関係は明らかでない。覆土についての記載は残らない。

D-6号土坑（第13図）は、75×70cm深さ18cmで円形を呈し、覆土は層に分層された。D-5号土坑と重複するが、新旧関係は明らかでない。覆土についての記載は残らない。

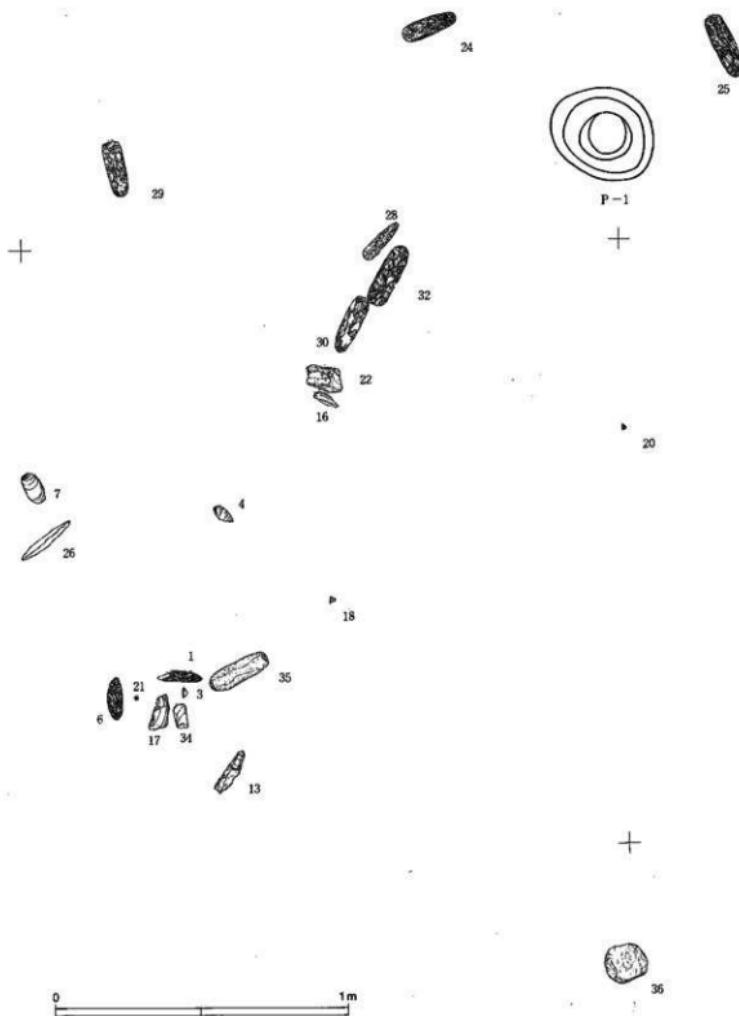
（2）ピット

P-1号ピット（第9図）は、C-15グリッドの石器ブロック1内より検出され、35×30cm深さ20cmの円形を呈し、二段状に掘り込まれたピットである。

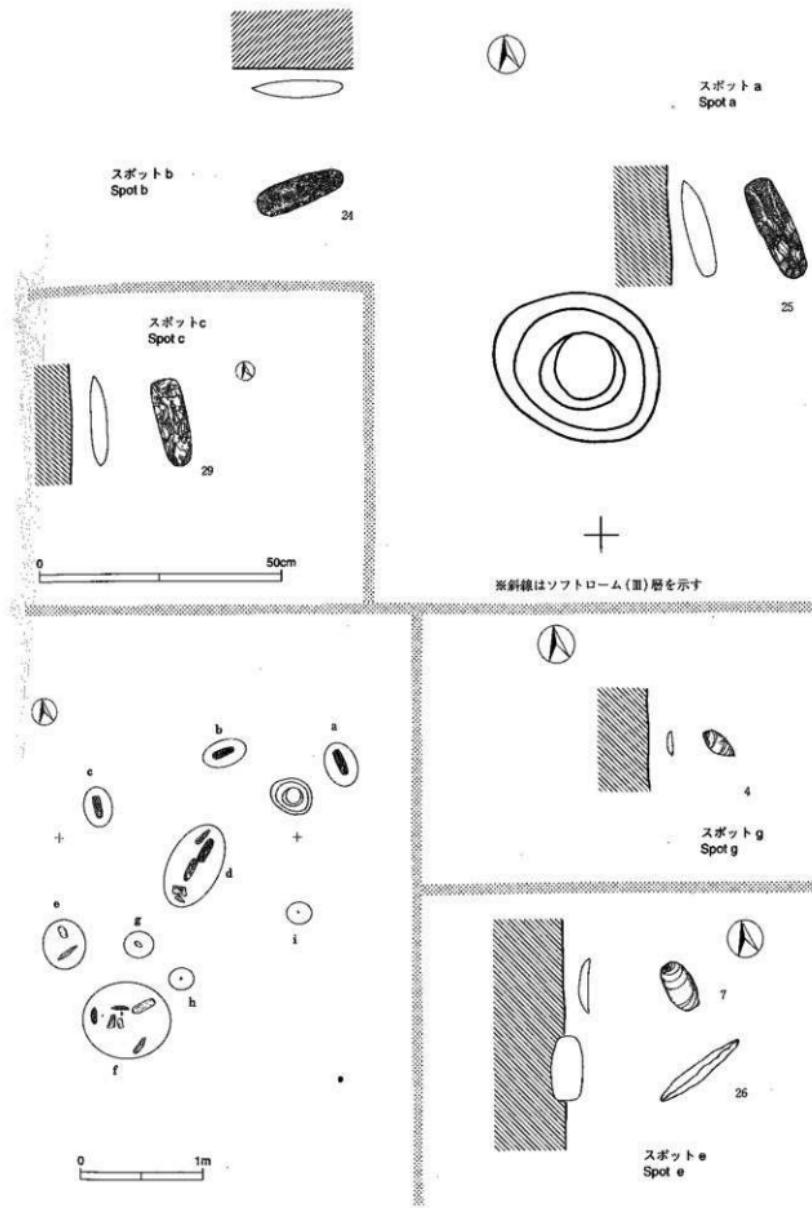
この他のピットとしては、P2・P3・P4の3個のピットがA-11グリッドより検出されているが、これについては写真（PLATE 6-12）を記録として残すのみで図面類が残らず、規模等がわからない。写真から判断するには、20～40cm前後の円形のピットと考えられる。



第9図 唐沢B遺跡の遺構分布 (1/60)
Fig.9 Distribution of features from Karasawa B site (1/60)

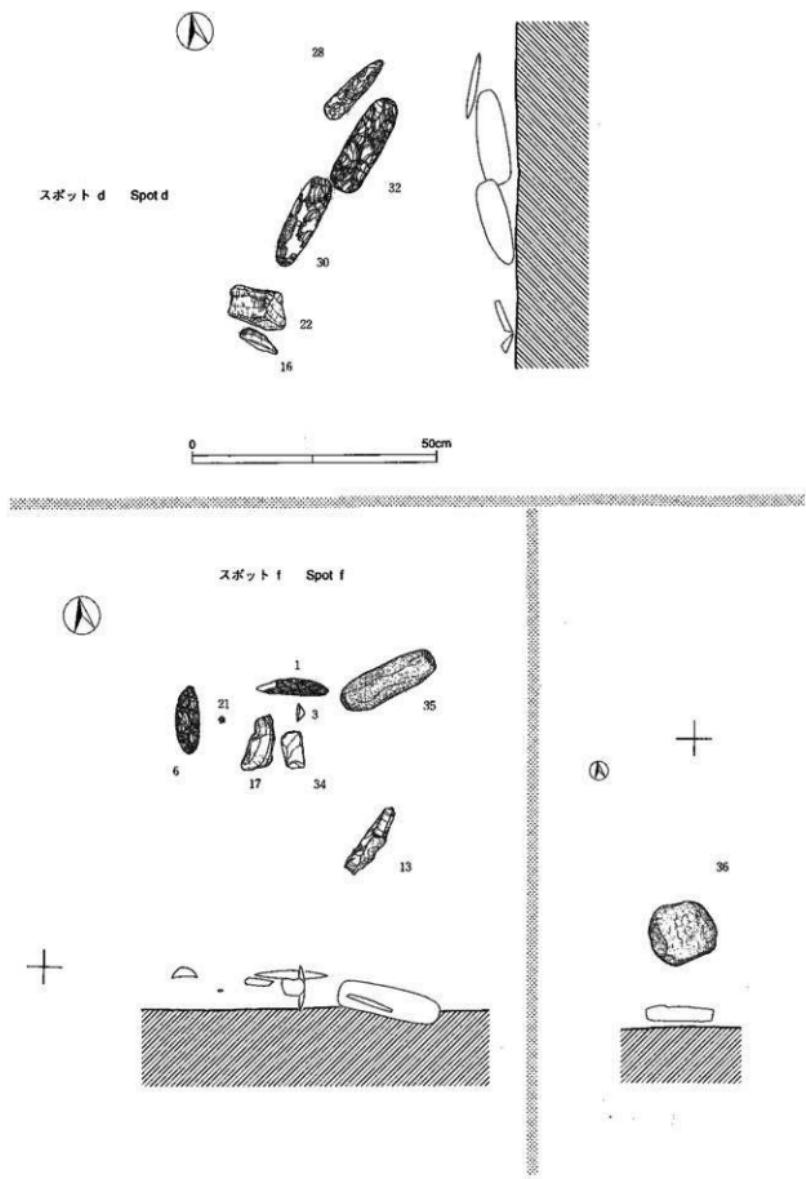


第10図 ブロック1の石器分布
Fig.10 Distribution of stone artifacts in Concentration 1

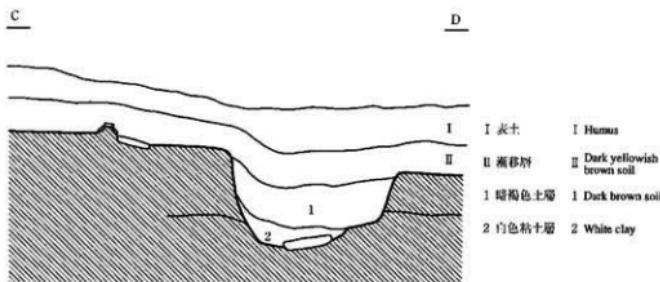
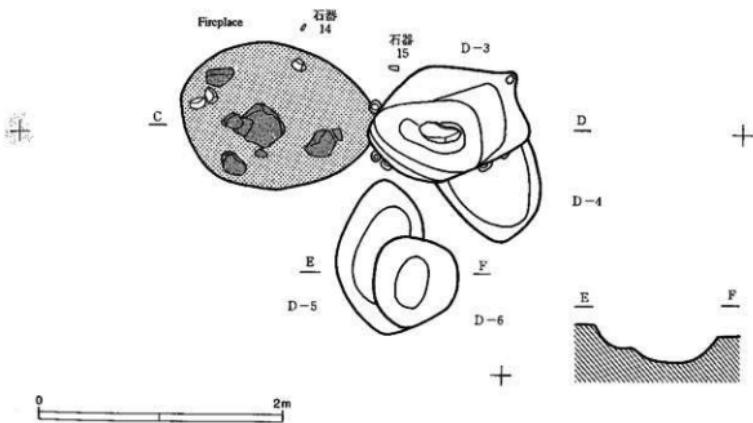
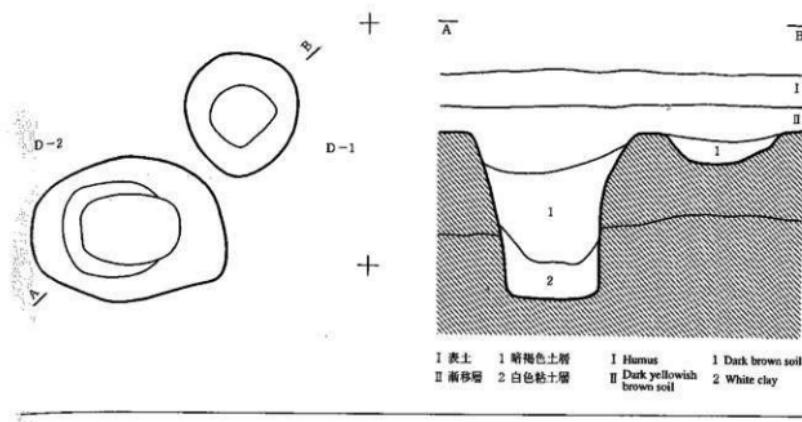


第11図 唐沢B遺跡の石器スポット

Fig.11 Distribution of stone artifacts in Concentration 1 (Spots a-c, e and g)



第12図 唐沢B遺跡の石器スポット
Fig.12 Distribution of stone artifacts in Concentration 1 (Spots d and f)



第13図 唐沢B遺跡の焼櫻炉と土坑 (1/40)
Fig.13 Fireplace and pits from KarasawaB site (1/40)

5 石器と石材

1 石器

唐沢B遺跡で出土した石器は、尖頭器5点・搔器1点・削器4点・石刃1点・剝片11点・局部磨製石斧5点・打製石斧6点・砥石2点・蹠1点の計36点である。以下、各器種ごとにその特徴について述べる。

(1) 尖頭器 (第14・15図 1~5)

1は珪質凝灰岩の尖頭器である。A面の先端表面は風化によって剥落する。調整剝離は表裏両面におよぶ。正面形は左側縁がやや直線的であるのに対し、右側縁は弧状を描き、全体に半月形を呈する。器体断面は扁平なD字形である。本資料は唐沢Bの尖頭器のうちでは、最も長いものである。

2は、硬質頁岩の横長剝片を素材とした尖頭器である。A面の左側縁とB面の右側縁にはやや深い調整剝離が並ぶ。A面右側縁の調整は周縁のみの短い剝離で、器体中央のラインは調整によってノッチ状を呈している。断面は扁平な三角形状を呈し、最大厚は器体中央より下にある。

3は、硬質頁岩の縱長剝片を素材とした尖頭器である。A面は全面調整剝離によって覆われるが、先端から器体中央にのびる剝離は、古い欠損によるものと考えられ、あるいは衝撃剝離の可能性もある。B面には基部と先端部に平坦な剝離がなされるが、それ以外はそのまま素材の主要剝離面が残されている。断面は扁平な三角形状を呈する。

4は、硬質頁岩の縱長剝片を素材とした尖頭器である。A面は両側に周縁調整剝離がなされる。先端はB面側に古く欠損し、あるいは衝撃剝離の可能性もある。B面基部には平坦な剝離が若干なされるが、それ以外はそのまま素材の主要剝離面が残されている。断面は扁平な台形状を呈する。

5は、両面調整の尖頭器基部で、断面はレンズ状を

呈し、器体の大半を古く欠損する。ガラス質黒色安山岩製で、風化が進行している。

(2) 搗器・削器 (第16~18図 6~10)

6は、チョコレート色の硬質頁岩の摗器で、A面全面を大きく調整剝離が覆い、周縁には細かな調整がなされる。素材は石刃もしくは縱長剝片と考えられ、その調整打面を残す。弓なりに反りのある側面形をみせ、断面は扁平な三角形状を呈する。

7は、チョコレート色の硬質頁岩の削器で、両側縁に細かな調整がなされ、スクレイバー・エッヂとなっている。素材は自然面を残す幅広な石刃もしくは縱長剝片で、その調整打面を残す。やや弓なりで反りのある側面形をみせる。

8は、乳白色の珪質凝灰岩を素材とした削器で、A面右側縁の一部に細かな調整がなされている。素材は縱長剝片で、その調整打面を残す。

9は、乳白色の珪質凝灰岩を素材とした削器で、A面右側縁の基部付近に調整がなされている。素材は先端のすぼまる縱長剝片で、その自然面打面を残す。

10は、硬質頁岩の削器断片で、A面に自然面を残し、C面の側縁に細かな調整がうかがえる。

(3) 石刃・剝片 (第18~22図 11~22)

11は、凝灰質頁岩で、尖頭器が石斧など両面調整石器の断片と考えられる。これまでの報告では、本石器は彫刻刀形石器とされたものであるが、改めて両面調整石器の断片（=剝片）として位置づけた。本石器が彫刻刀形石器として当初認識された理由は、D面下方に向かうアシット状の剝離が観察されるためである。しかしこの剝離は不安定なもので、同D面の上方からの剝離（=本石器が両面調整石器から剝がれ落ちる際のポジティブな主要剝離）に伴う下方からの偶発剝離とみられる。また、本石器は赤化変色しており、火を

受けているものと考えられる。A面の上半の剥離は、打ち欠きによるものでは生じ難く、明らかに火ハネなどが原因した剥落によるものと考えられる。

12は凝灰質頁岩の縦長剝片で、一部(矢印)に微小剥離痕が残る。

13は硬質頁岩の石刃で、打面を僅かに残し、背面に自然面が残る。側縁には微小剝離痕が残る(矢印)。

14・15は頁岩の縦長剝片である。16・17は乳白色の珪質凝灰岩の横長剝片で、打面側には折れ面が残っている。

18~21は、小形の剝片である。現在所在不明のため石材は判定が困難だが、18・19はおそらく珪質凝灰岩、20・21は確実に黒曜石である。

22は、現在所在不明であるが、珪質凝灰岩とみられる大形剝片で、16の剝片と並んで出土した。写真から判断するに、おそらく16と同一個体で、それぞれの折れ面で接合する可能性がある。

(4) 石斧 (第22~32図 23~33)

23は、チョコレート色の硬質頁岩を素材とした小形の局部磨製石斧である。B面の研磨は刃部付近では横方向になされ、また両側縁C・Dも僅かに研磨されていることがうかがえる。刃部先端は、B面側から研磨を切る急斜度な調整によって直線的(平面形)に形成され、おそらく再生刃部とみられる。A面には平坦な調整剝離が並び、B面にはやや急斜度な剝離がなされる。したがって、その断面はB面側に膨らむ扁平な三角形を呈する。ちなみに本資料のような小形品で、再生がなされたかとも思われる急斜度な刃部をもつ石斧は、神子柴遺跡にもみられる。

24は、黒色頁岩の局部磨製石斧である。研磨は、A面では刃部から器体の中央に及ばない範囲でなされているが、B面では器体中央を越えてなされている。研磨方向は、刃部付近では横方向になされ、器体中央に向かうにつれ斜め方向になされている。また両側縁も僅に研磨されている。断面形は、ややA面側に膨らむが全体的にはシンメトリーなレンズ状を呈し、C面からみた刃縁は直線状である。

25は、黒色頁岩の局部磨製石斧である。研磨は、A面では刃部から器体の中央部付近までなされている

が、B面では器体中央まで達していない。また、側縁C面にも研磨が観察されるが、D面側の側縁が研磨されたかどうかは、風化が進行してわからない。A面の側縁は風化による剥落が進行し、研磨がなされたかどうかは明らかでない。また、E面の刃縁が若干的に研磨されていることも注意され、僅かにシャープさがとれた状態である。A・B面の研磨方向は、刃部付近では横方向になされ、器体中央に向かうにつれ斜め方向になされている。断面形は甲高なD字状を呈する。E面側からみた刃縁は直線状である。D面の基部周囲にも、風化の進行による剥落がみられる。

26は、黄白色の砂岩の局部磨製石斧である。研磨は、A面では刃部から器体の中央部付近までなされている。B面では全体に風化が進行しているため研磨の状況がとらえにくいか、おそらく図示した程度に刃部付近に研磨がなされているものとみられる。また、側縁にも研磨がなされているかどうかは、風化が激しいためわからない。なお、注意すべきはB面の研磨を切ってなされている刃縁からの剥離である。研磨方向は図示したが、実際は風化によりあまりはっきりとしない。断面形はシンメトリーなレンズ状を呈する。

27は、ホルンフェルスの局部磨製石斧である。研磨は、A面では刃部から器体の中央部付近までなされているが、B面では器体中央まで達していない。また、側縁の研磨状況は、若干の風化により明らかでない。断面形は、基部付近では扁平なD字状を呈し、器体中央から刃部にかけては、シンメトリーなレンズ状を呈する。

28は、黒色頁岩の小形の石斧である。全体に極めて風化が進行しているため断定はできないが、おそらく研磨のない打製石斧と考えられる。全体に肉薄な作りで、断面はシンメトリーなレンズ状を呈する。

29は、黒色頁岩の石斧である。全体に極めて風化が進行しているが、おそらく研磨のない打製石斧と考えられる。断面は、A面側がややふくらみが強い。刃縁は直線状である。

30は、黄白色の表面をみせる黒色頁岩の打製石斧である。A面は風化による剥落が進行するが、一部に平坦な筋理面をのぞかせる。断面は、A面側がややふくらみが強い。C面側からみた刃縁は、直線状である。

31は、黄白色の表面をみせる黒色頁岩の打製石斧である。全体に入念な調整がなされ、均整のとれた形態に仕上げられている。断面は、A面側が甲高となるD字形である。C面側からみた刃縁は直線状である。

32は、黄白色の表面をみせる黒色頁岩の打製石斧である。31と同様に全体に入念な調整がなされ、均整のとれた形態に仕上げられているが、31に比べ幅広である。断面は、ごく僅かにA面側が膨らむ。C面側からみた刃縁は直線状である。

33はきわめて風化が進んでおり、剥離痕・研磨痕とともに捉え難いが、その形状・大きさから石斧とみられる。断面は、B面側がフラットなD字形を呈する。刃縁は直線状である。安山岩。

(5) 砥石 (第33・34図 34・35)

34は、極粗粒のアルコース砂岩の砥石である。細長く不規則な六・七面体で、そのいずれの面も研砥に供されている(図の矢印範囲)。中央より上半で二つに折損する。この折れは当時のものかどうかはわからぬが、比較的古い段階の折れである。図の上部(a)が発掘資料、図の下部(b)は表面採集資料。ちなみに35はその両端が敲打に供されているが、本石器は軟質な石材のためか敲打には用いられていない。

35は、粗粒のアルコース砂岩の砥石で、またその両端は敲打に供されている。材質は、34がやや粗めであるのに対し、本砥石のほうは、細かなキメをみせる。細長い器体全体に稜がつくほど研砥は進行していないが、図の矢印で示したように全面が研砥に供されている。

(6) 扁平礫 (第35図36)

36は、安山岩の小判形の礫で、節理に沿って扁平に割れたものとみられる。加工痕はみられない。表面には赤変した部分があり、火を受けた可能性がある。焼窯炉の礫群の一部を構成した可能性もあるが、それはやや遊離した位置から出土したため図示した。

2 石器石材

唐沢B遺跡の石器石材については、器種別に第3表に示した。

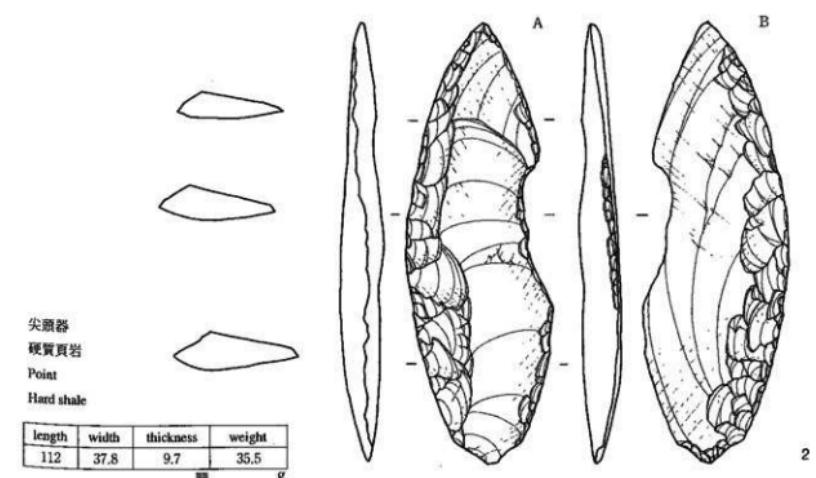
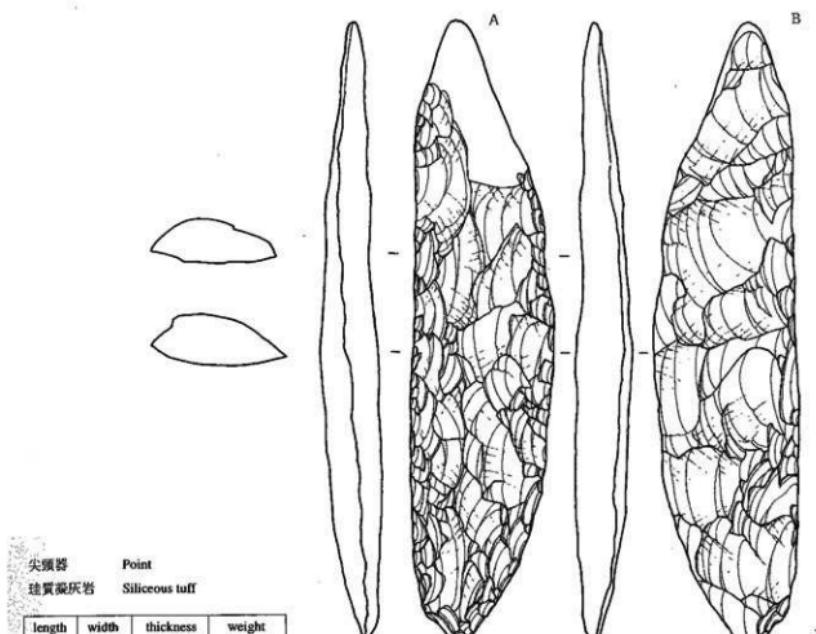
石器36点を構成した石材は、11種で、硬質頁岩・黒曜石・ガラス質黒色安山岩・珪質凝灰岩・凝灰質頁岩・頁岩・黒色頁岩・安山岩・ホルンフェルス・砂岩・アルコース砂岩である。このうち硬質頁岩が8点、珪質凝灰岩が8点、黑色頁岩が7点とそれぞれ全体の二割前後を占めている。

個別資料の観点から、これらの石材をみた場合、接合関係の想定できる剝片16と22の帰属する珪質凝灰岩が同一個体である以外は、基本的に石材種は同一でもそれぞれ別個体とみられる。

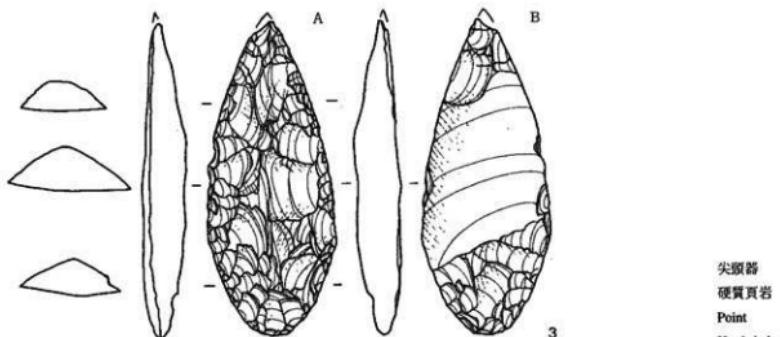
器種と石材との関連では、剝片石器には硬質頁岩・黒曜石・ガラス質黒色安山岩・珪質凝灰岩・凝灰質頁岩・頁岩など緻密質な石材が、石斧類には黒色頁岩を主に安山岩・ホルンフェルス・砂岩が、砥石にはアルコース砂岩が用いられ、器種による石材選択が明らかである。

第3表 唐沢B遺跡の石器器種と石材
Table 3 Tool types of Karasawa B by their raw materials

	尖頭器	搔 器	削 器	石 刀	剝 片	局部磨製石斧	打製石斧	砥 石	礫	計
硬質頁岩	3	1	2	1		1				8
黒曜石					2					2
ガラス質黒色安山岩	1									1
珪質凝灰岩	1		2		5					8
凝灰質頁岩					2					2
頁岩					2					2
黒色頁岩						2	5			7
安山岩							1		1	2
ホルンフェルス							1			1
砂岩							1			1
アルコース砂岩								2		2
計	5	1	4	1	11	5	6	2	1	36

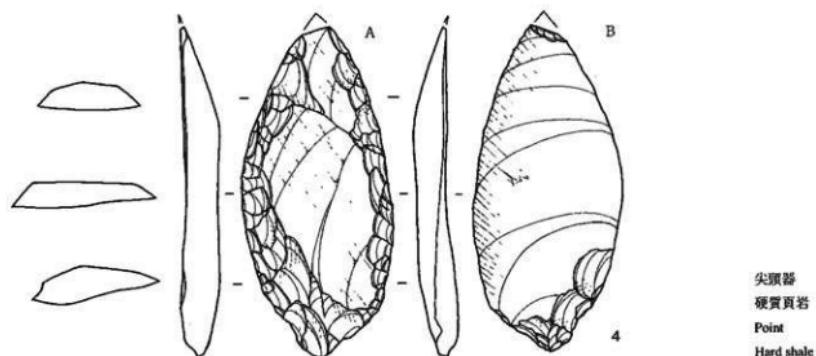


第14図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
 Fig.14 Stone artifacts from Karasawa B site (4/5)



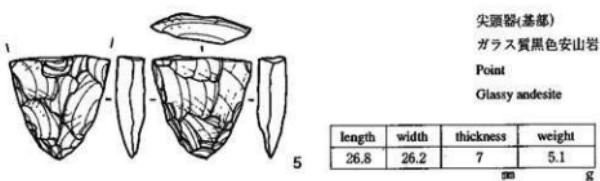
length	width	thickness	weight
80.6	32.9	11.1	28.4

mm g



length	width	thickness	weight
83.3	38.4	7.7	31.2

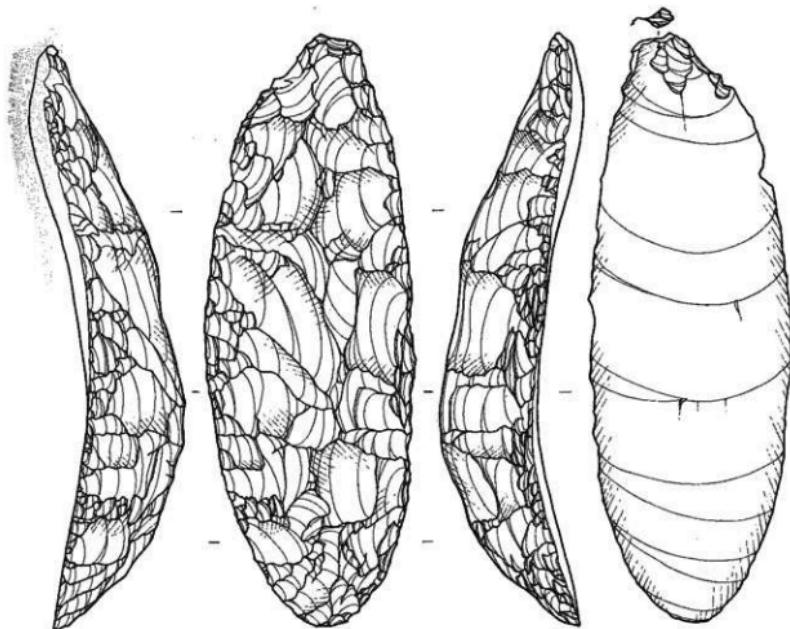
mm g



length	width	thickness	weight
26.8	26.2	7	5.1

mm g

第15図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.15 Stone artifacts from Karasawa B site (4/5)



6



掻器
硬質頁岩
End scraper
Hard shale



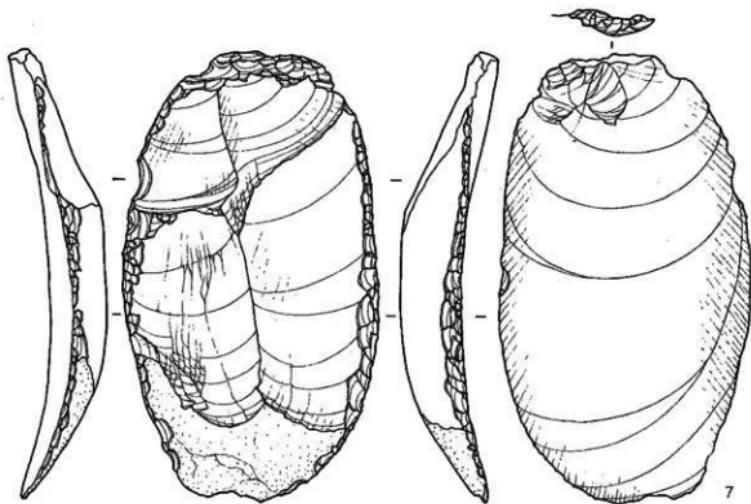
length	width	thickness	weight
151.5	52.9	24.7	210.6

mm g



第16図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)

Fig.16 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)

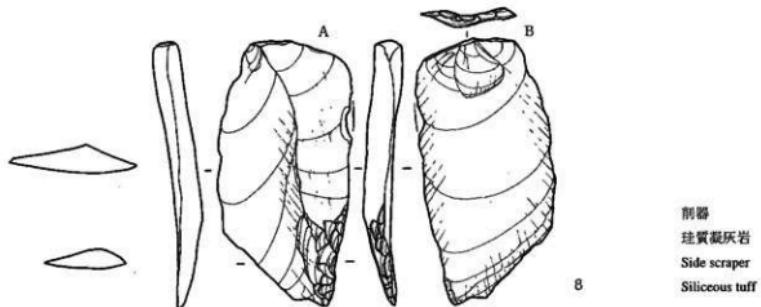


削器
硬質頁岩
Side scraper
Hard shale

length	width	thickness	weight
114	65.3	15.7	107.4

mm

g



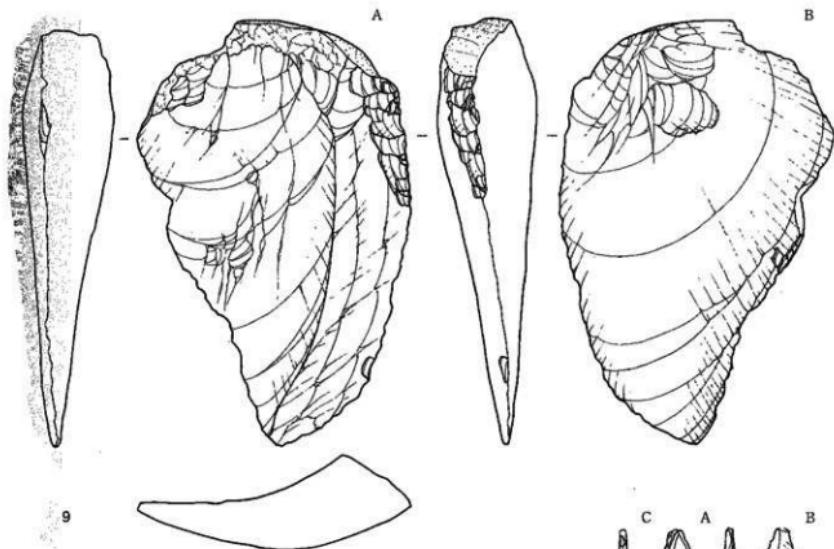
削器
珪質凝灰岩
Side scraper
Siliceous tuff

length	width	thickness	weight
65.9	34	6.6	15

mm

g

第17図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.17 Stone artifacts from Karasawa B site (4/5)

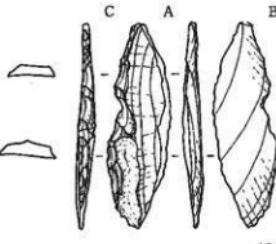


length	width	thickness	weight
106.6	73	20.6	103.6

mm g

前器
珪質凝灰岩
Side scraper
Siliceous tuff

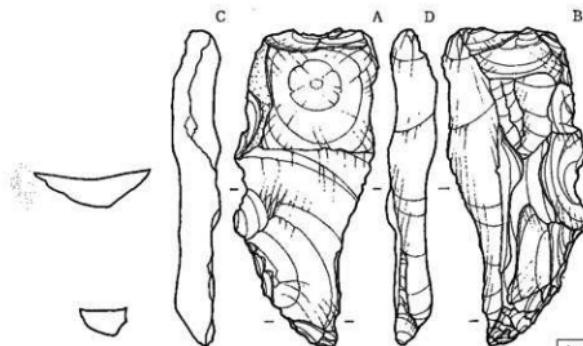
削器（断片）
硬質頁岩
Hard shale
Side scraper



10

length	width	thickness	weight
53.2	15.7	3.7	3.7

mm g



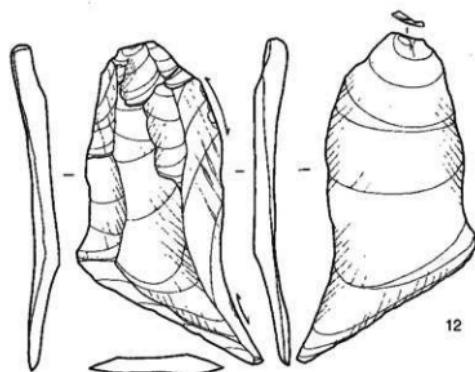
11

剥片（両面調整石器断片）
凝灰質頁岩
Flake
Tuffaceous shale

length	width	thickness	weight
81.1	36.1	11.4	28.2

mm g

第18図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.18 Stone artifacts from Karasawa B site (4/5)



剥片

凝灰質頁岩

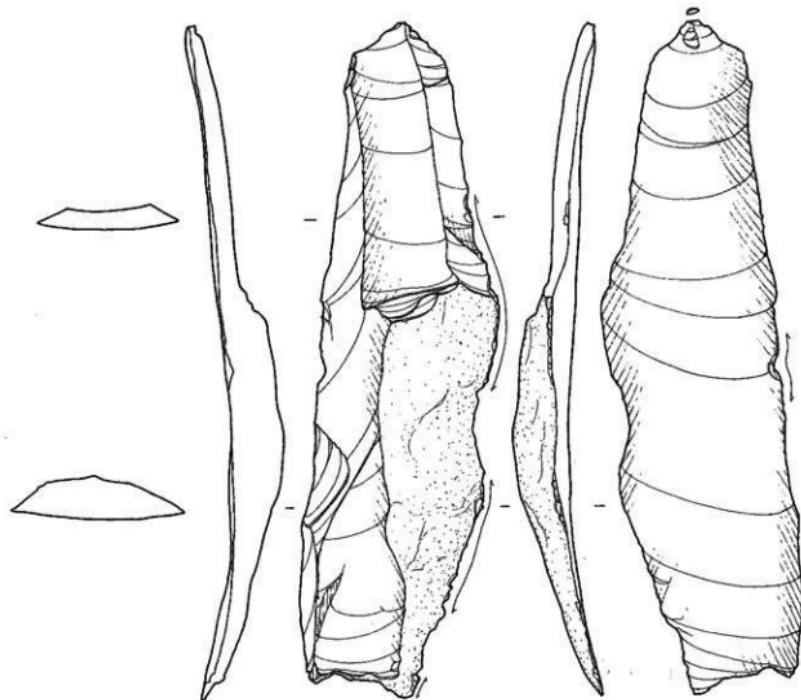
Flake

Tuffaceous shale

length	width	thickness	weight
84.4	50	4.8	15.8

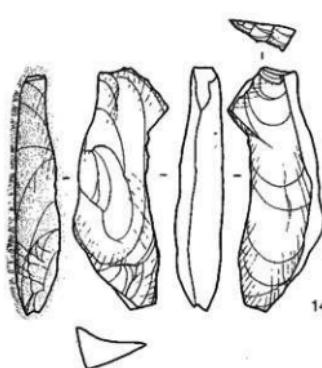
mm g

12



13

第19図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.19 Stone artifacts from Karasawa B site (4/5)



剥片

頁岩

Flake

Shale

length	width	thickness	weight
62.5	18.9	11.4	11.8

mm g

14

剥片

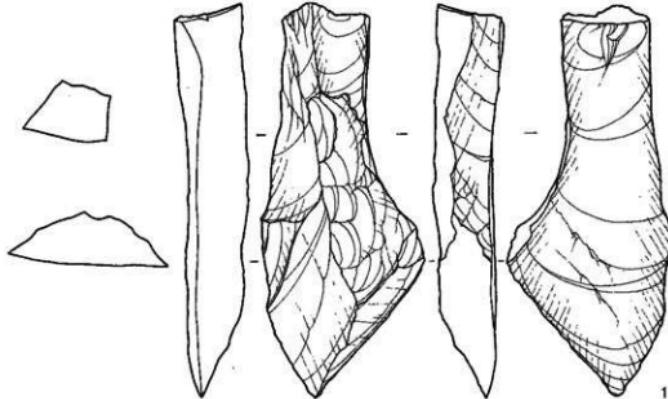
頁岩

Flake

Shale

length	width	thickness	weight
100.8	41.7	14.9	54.3

mm g



15

剥片

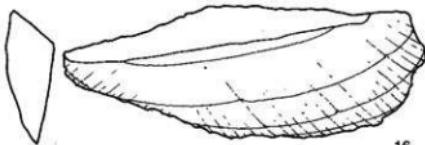
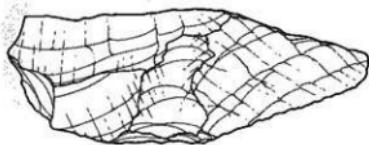
珪質凝灰岩

Flake

Siliceous tuff

length	width	thickness	weight
34.4	92.5	13	30.9

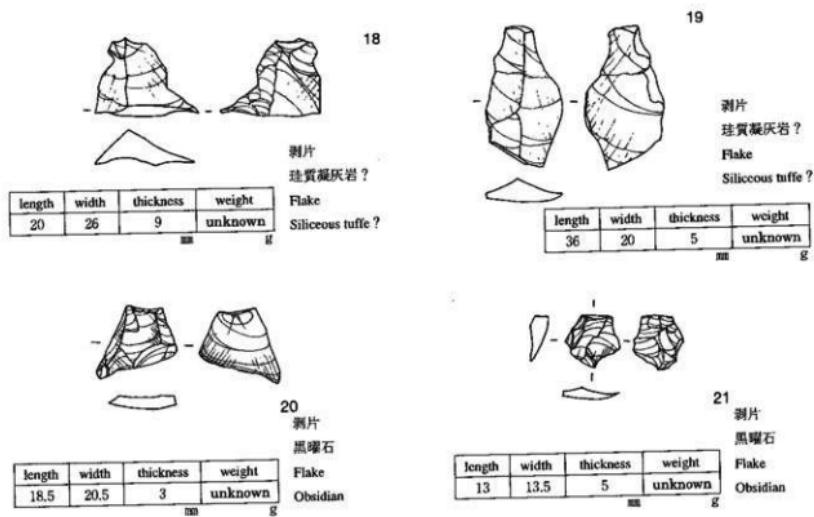
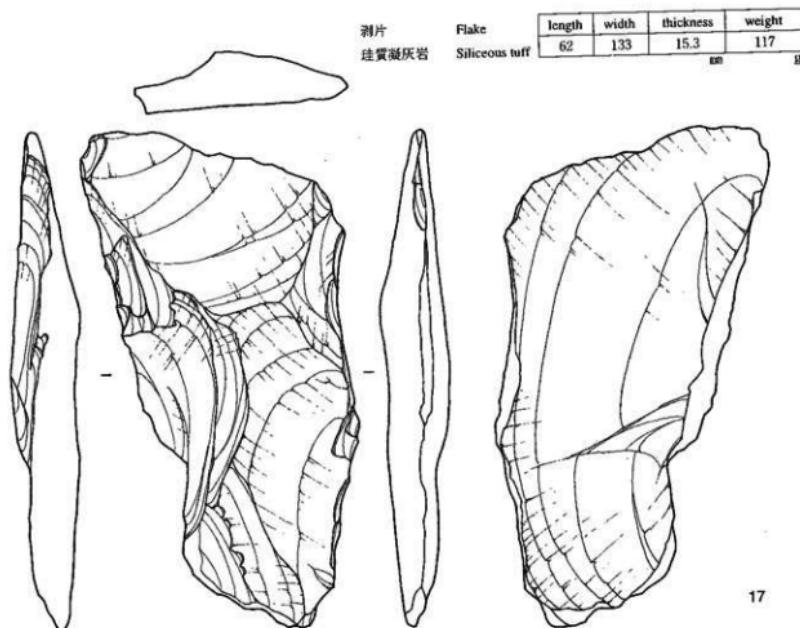
mm g



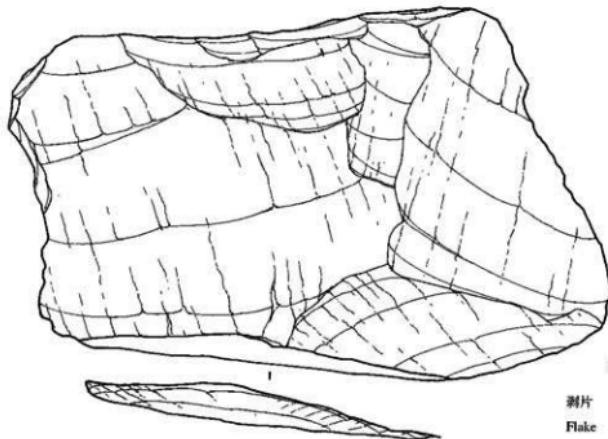
16

第20図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)

Fig.20 Stone artifacts from Karasawa B site (4/5)



第21図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.21 Stone artifacts from Karasawa B site (4/5)

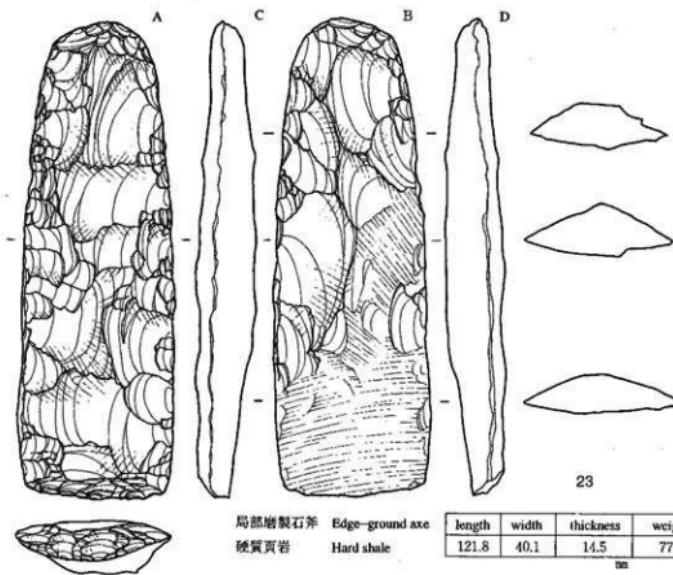


22

剥片 珠質凝灰岩?
Flake Siliceous tuff?

length	width	thickness	weight
9.5	15.5	unknown	unknown

mm g



23

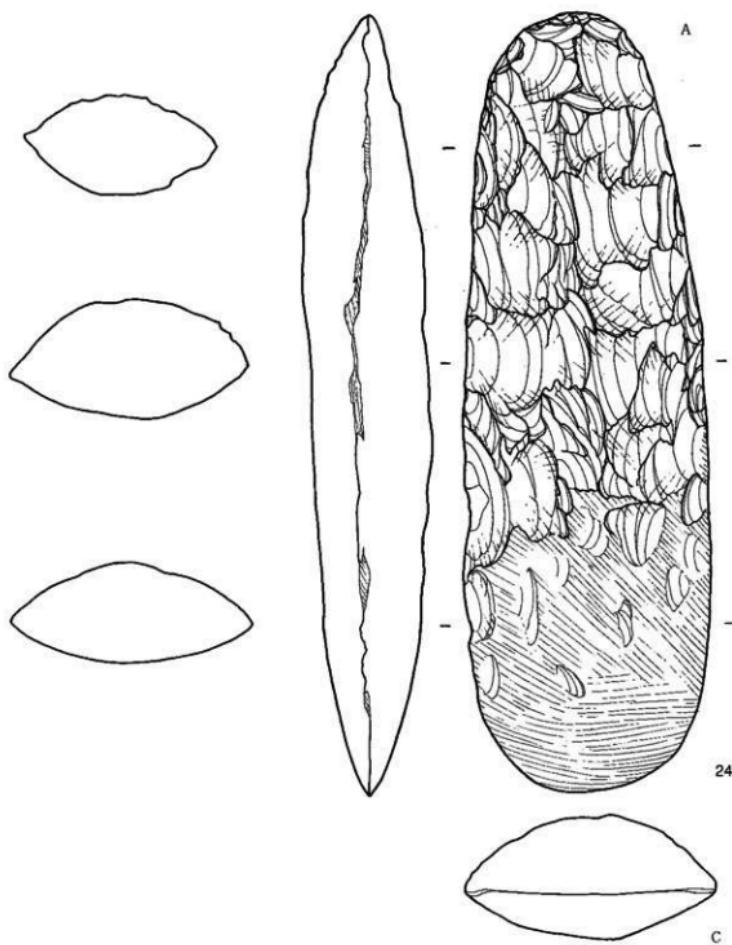
局部磨製石斧 Edge-ground axe
硬質頁岩 Hard shale

length	width	thickness	weight
121.8	40.1	14.5	77.9

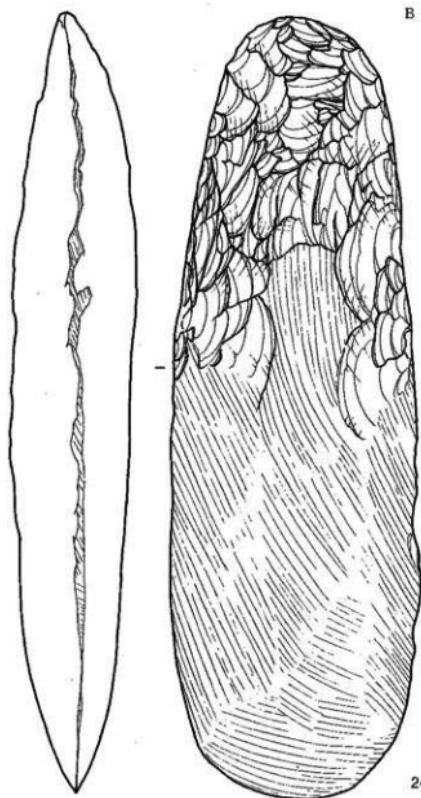
mm g

第22図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)

Fig.22 Stone artifacts from Karasawa B site (4/5)



第23図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.23 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)



B

24

局部磨製石斧

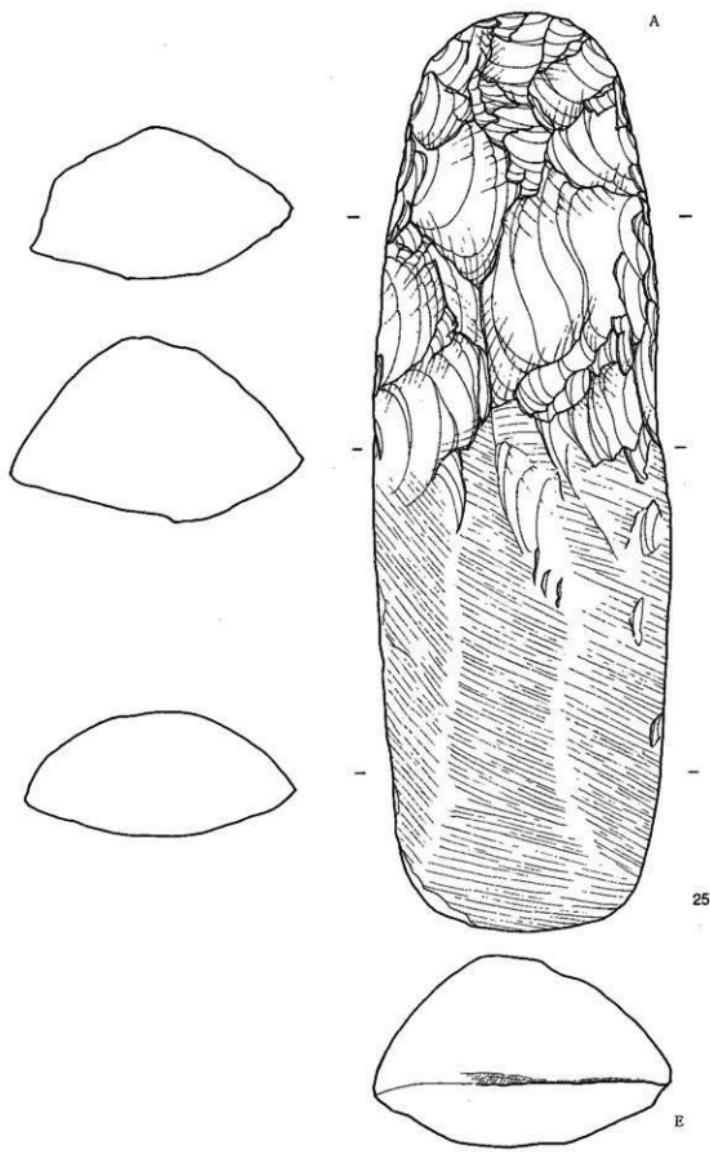
黑色頁岩

Edge-ground axe

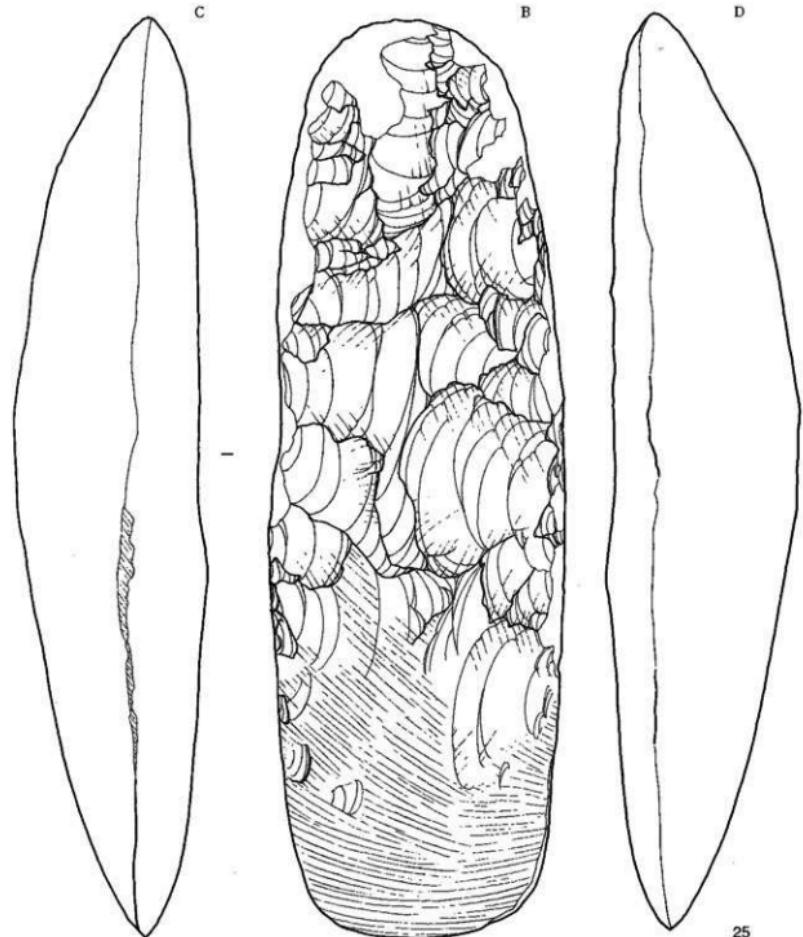
Black shale

length	width	thickness	weight
201	64.3	31.1	514.1

mm g



第24図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.24 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)



25

局部磨製石斧

黑色頁岩

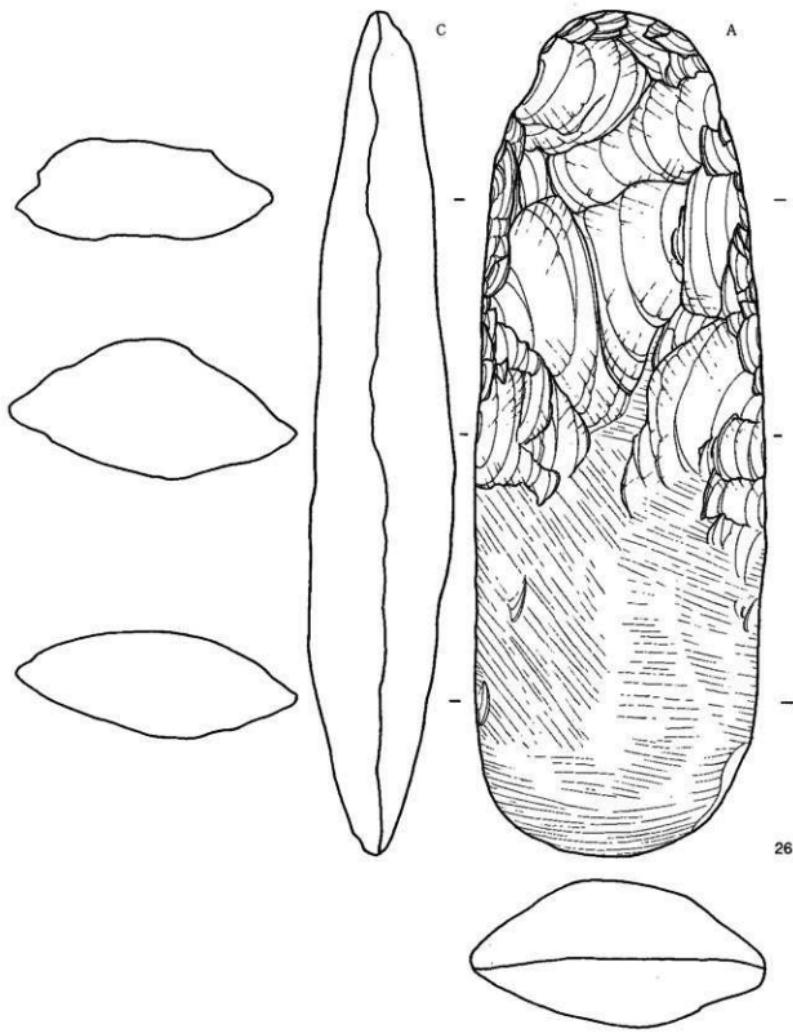
Edge-ground axe

Black shale

length	width	thickness	weight
235.5	76	47.5	1078.8

mm

g



第25図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.25 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)



26

局部磨製石斧

砂岩

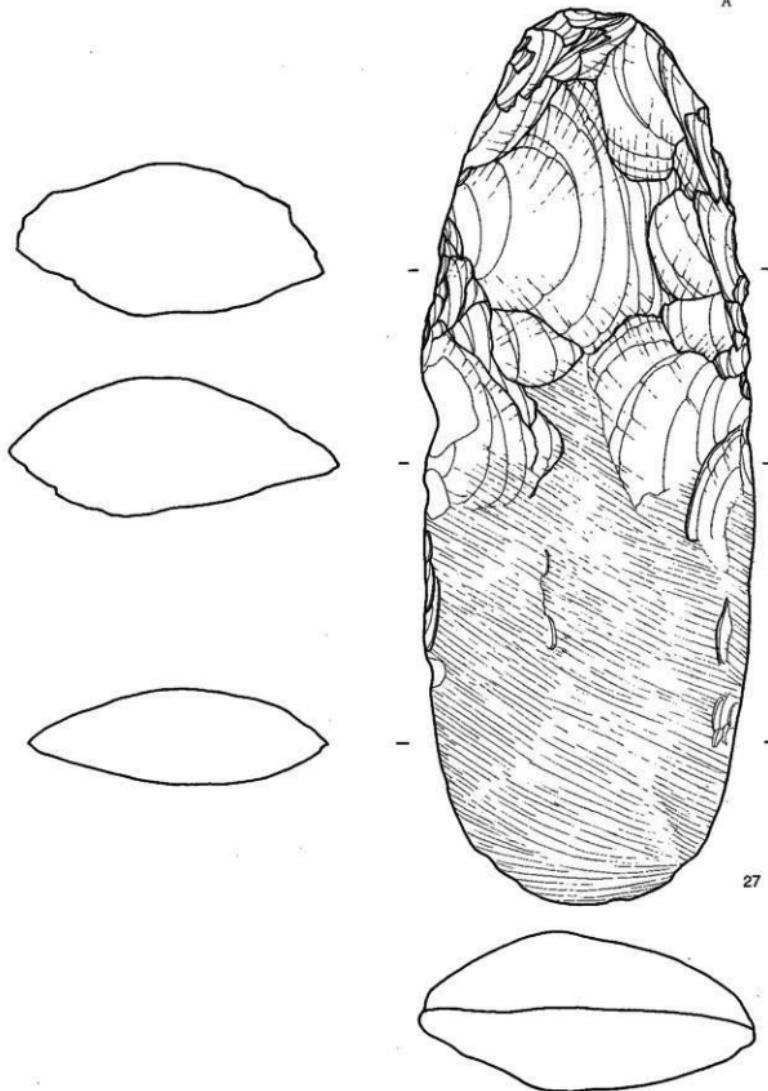
Edge-ground axe

Sandstone

length	width	thickness	weight
217.5	75.6	35.3	653.8

mm g

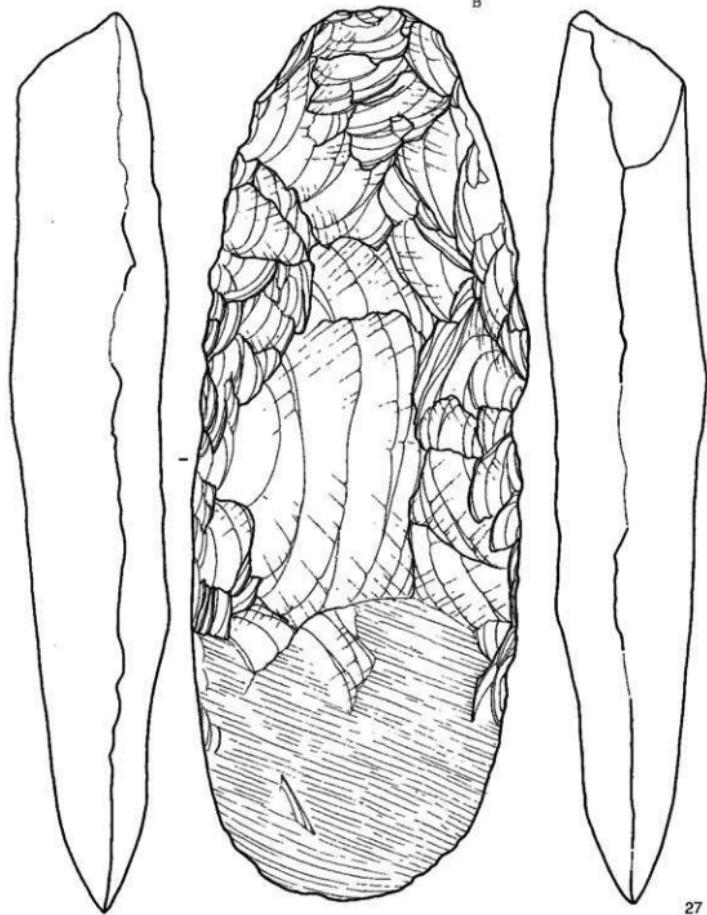
A



27

第26図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.26 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)

B



27

局部磨製石斧

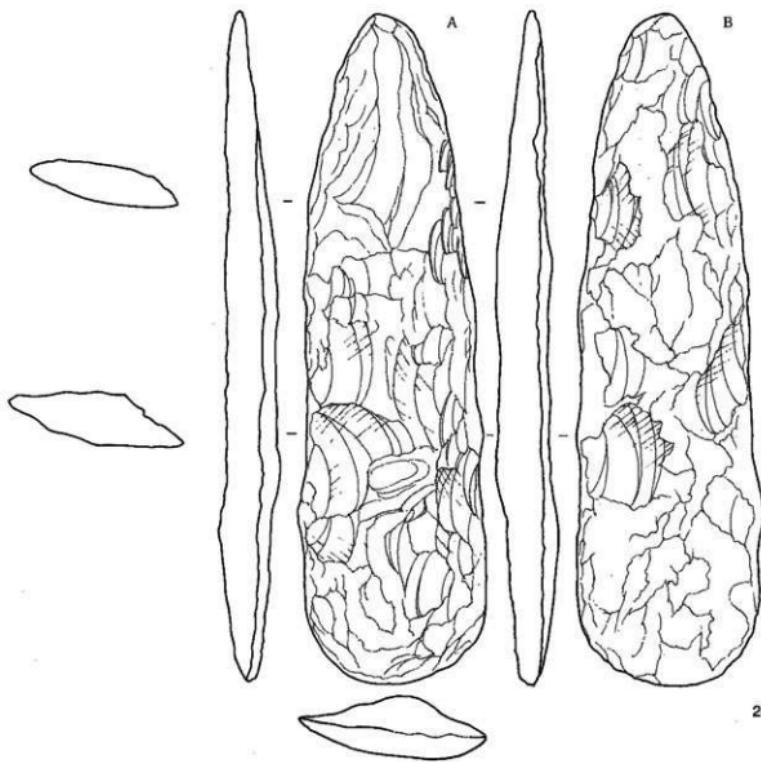
ホルンフェルス

Edge-ground axe

Hornfels

length	width	thickness	weight
230	84.4	40.9	977.4

mm g



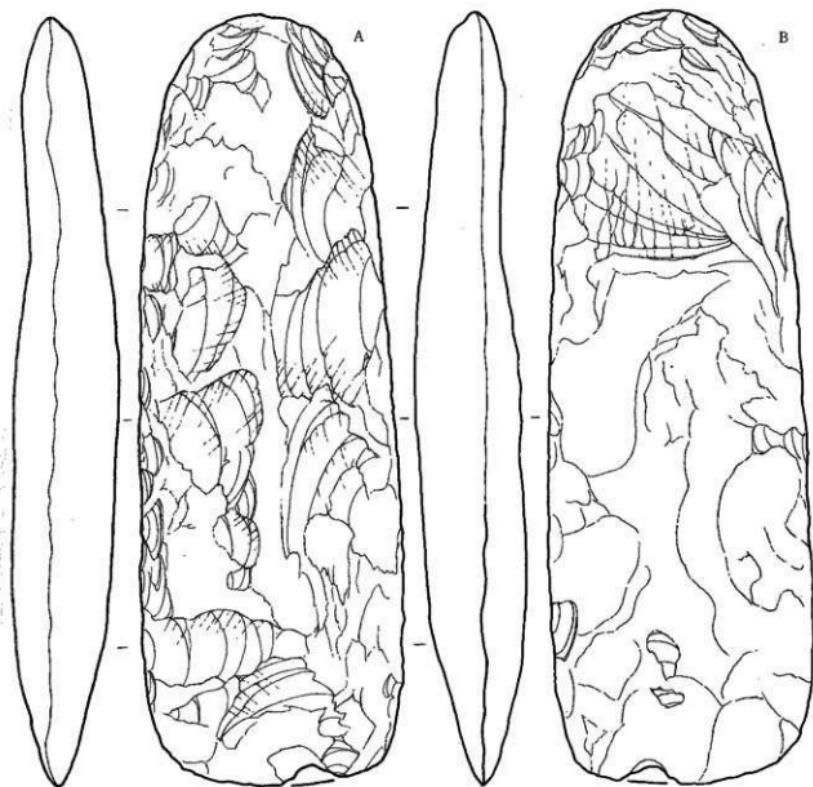
28

打製石斧
黑色頁岩
Flaked axe
Black shale

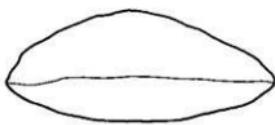
length	width	thickness	weight
172.5	48.5	14.2	128.5

mm g

第27図 廣沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.27 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)



29



打製石斧

黑色頁岩

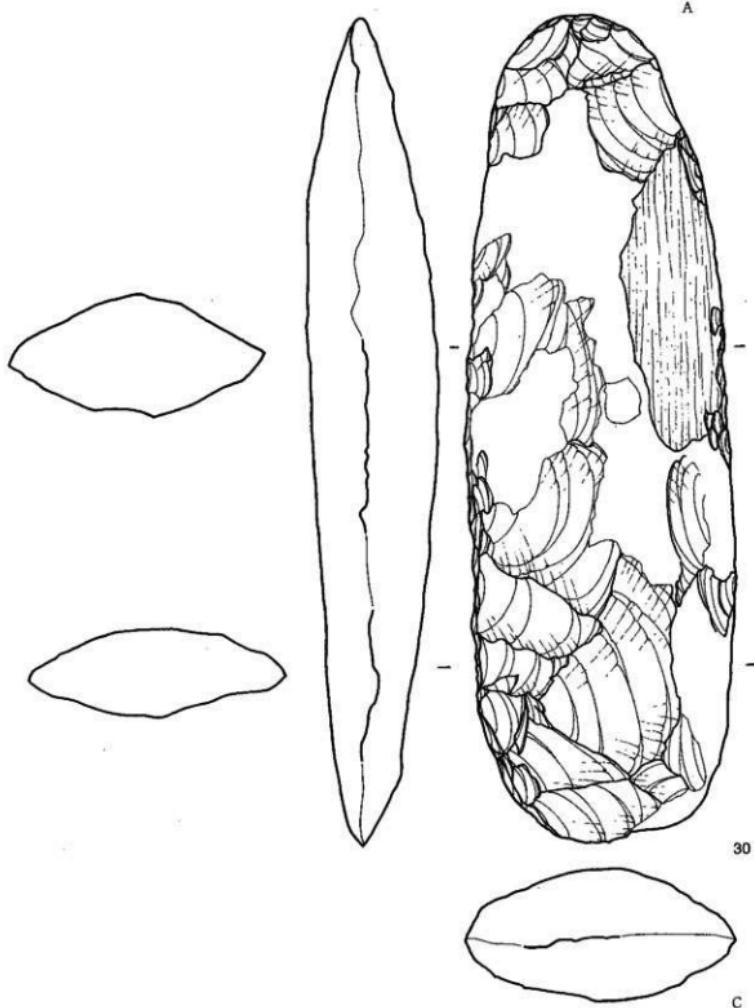
Flaked axe

Black shale

length	width	thickness	weight
199.5	66.9	27.6	466.8

mm g

第28図 唐沢B遺跡出土土石器 (4/5)
Fig.28 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)



第29図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.29 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)



30

打製石斧

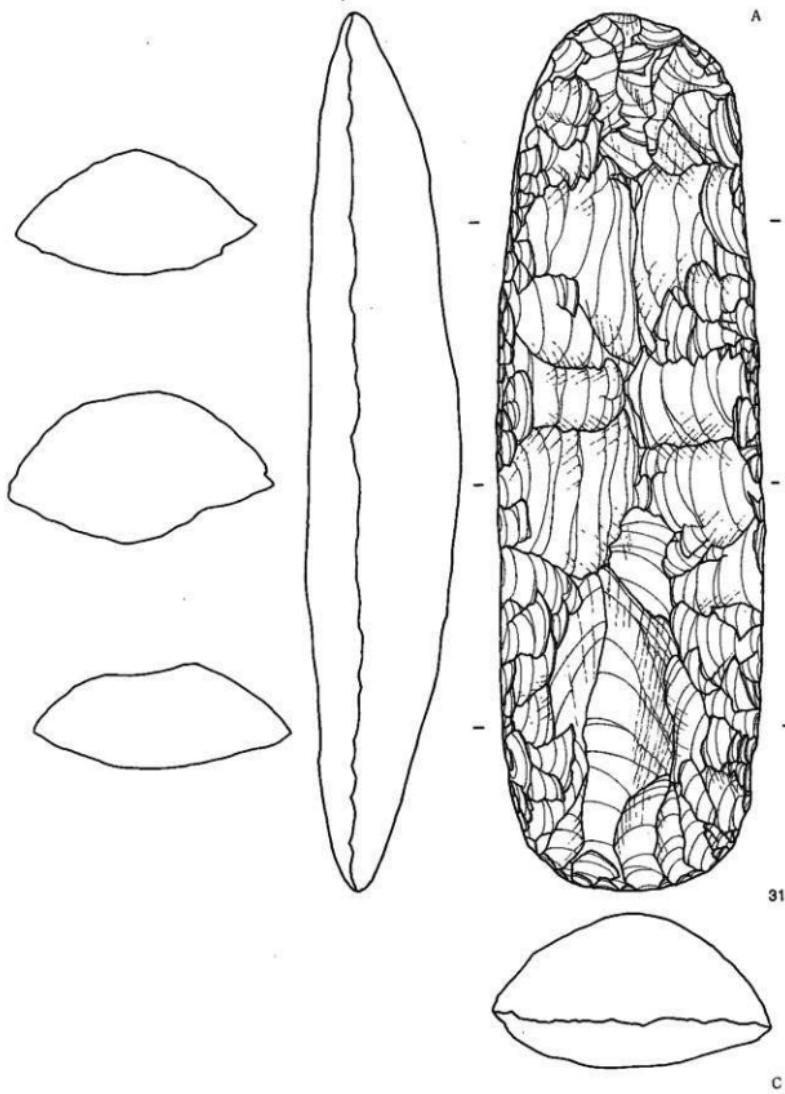
黑色頁岩

Flaked axe

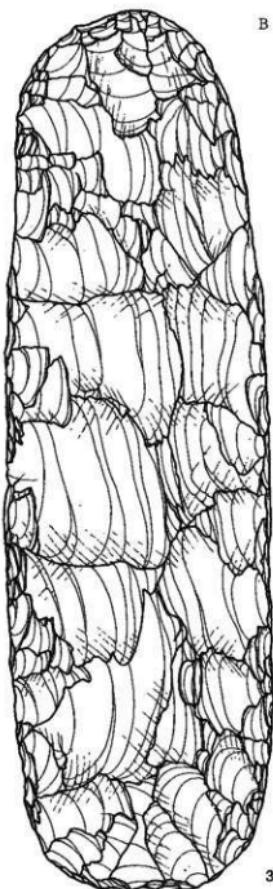
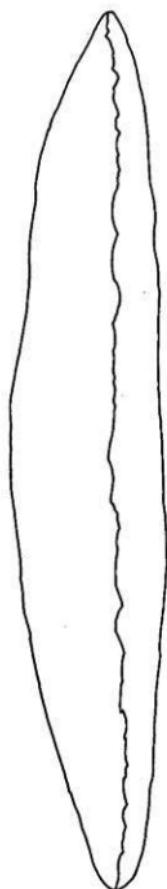
Black shale

length	width	thickness	weight
212.5	68	33.3	560.4

mm g



第30図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.30 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)



B

31

打製石斧

黑色頁岩

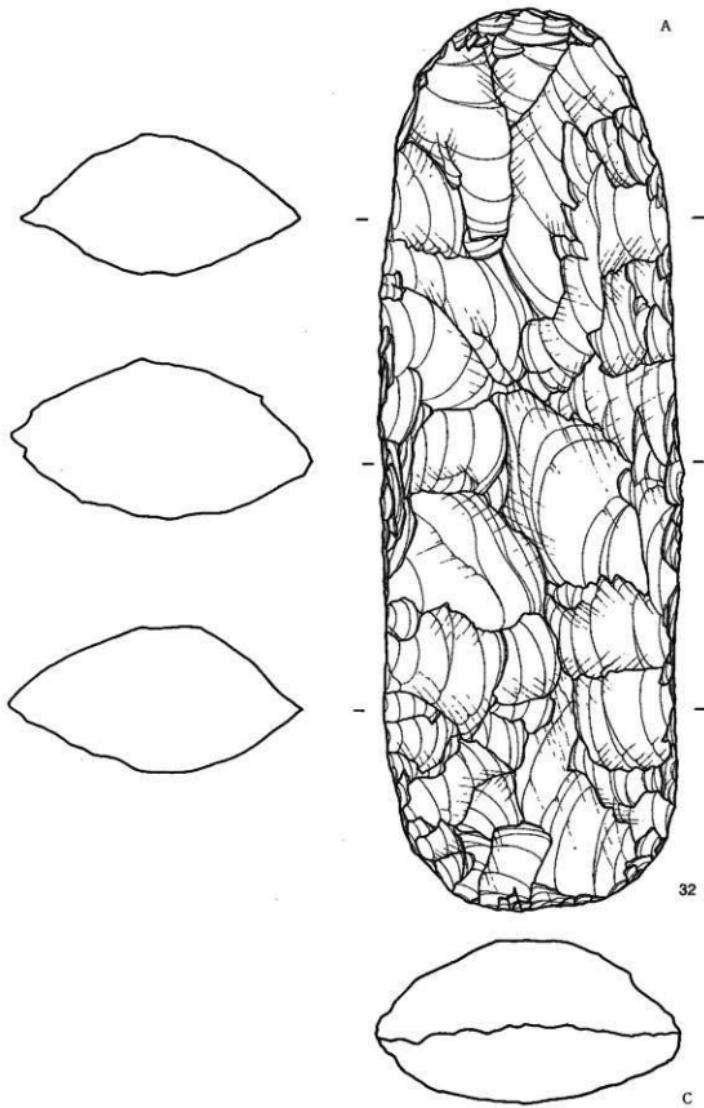
Flaked axe

Black shale

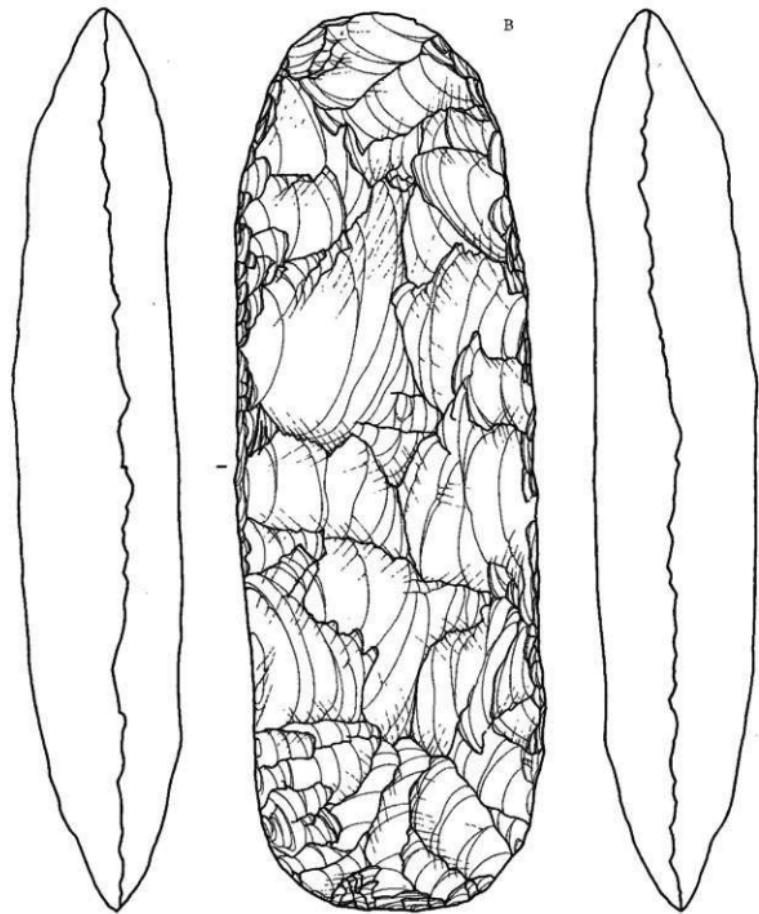
length	width	thickness	weight
226.5	69	38.9	720.1

mm

g



第31図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.31 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)



B

32

打製石斧

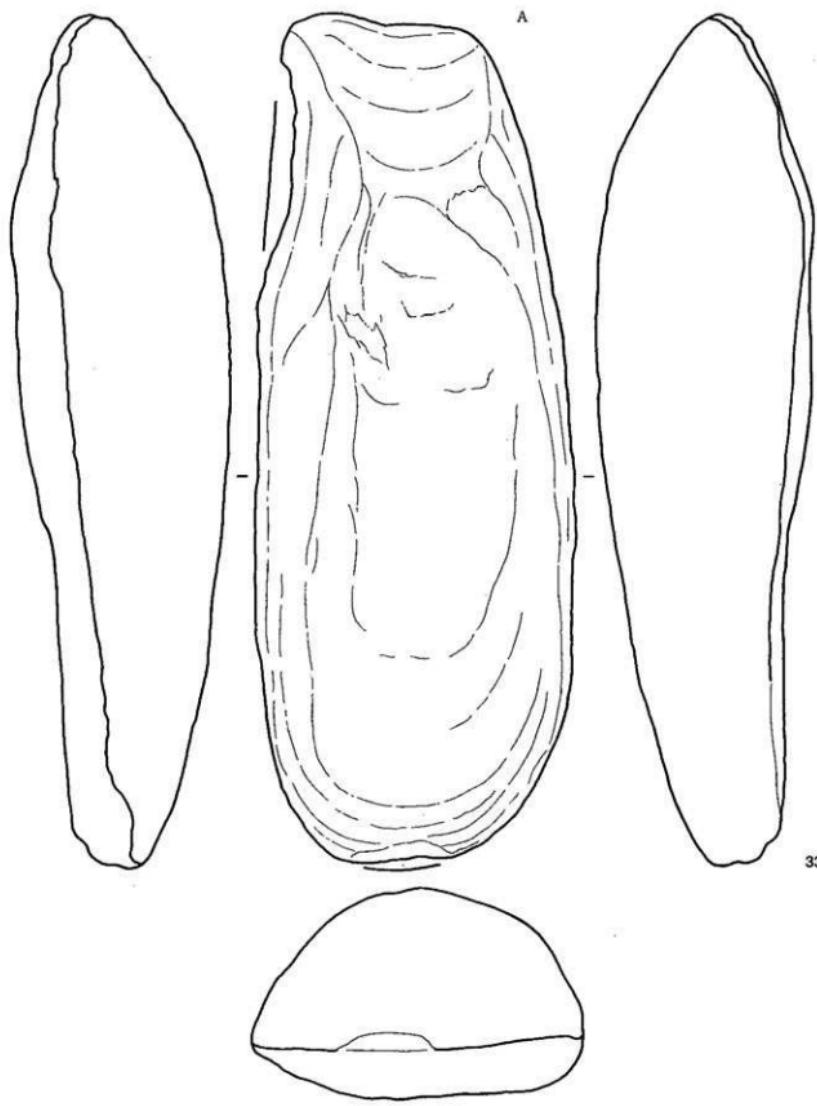
黑色頁岩

Flaked axe

Black shale

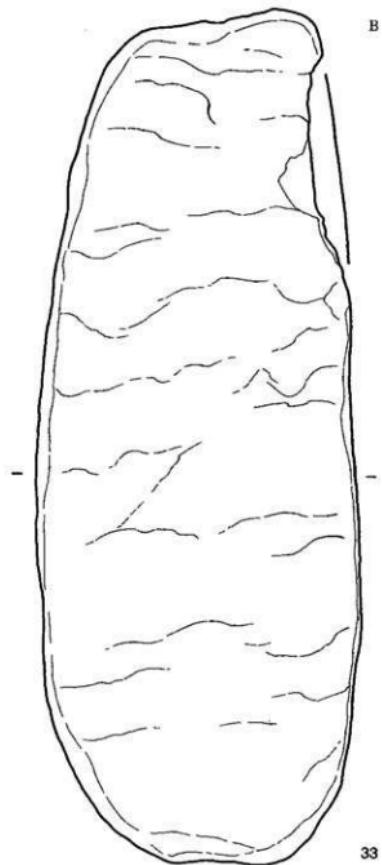
length	width	thickness	weight
232	78.6	41.7	957.1

mm g

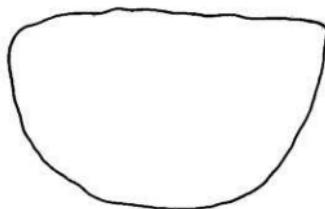


33

第32図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.32 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)



33



打製石斧？

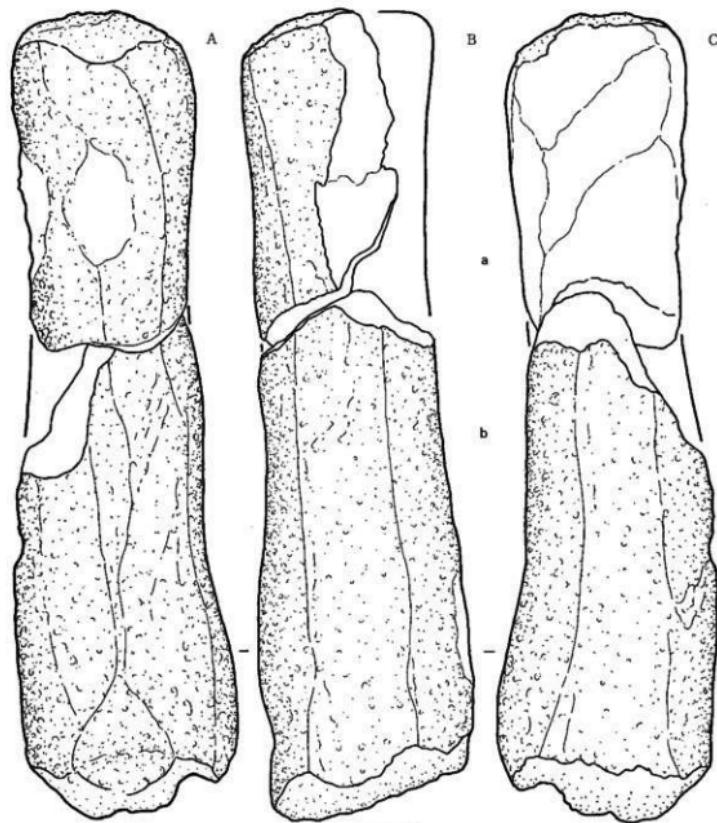
安山岩

Flaked axe?

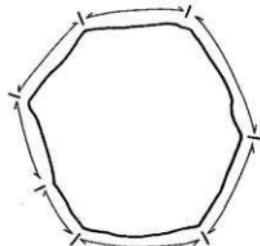
Andesite

length	width	thickness	weight
218.8	83.4	55.8	1106.7

mm g



34



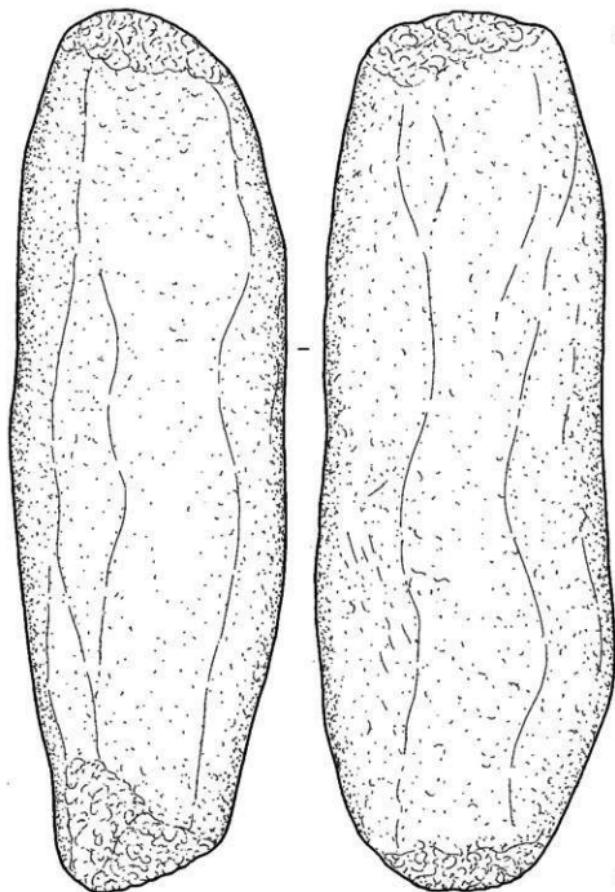
砥石
アルコース質砂岩（極粗粒）
Grinding stone
Arkose sandstone

length	width	thickness	weight
208	58.8	60	552.8

mm g

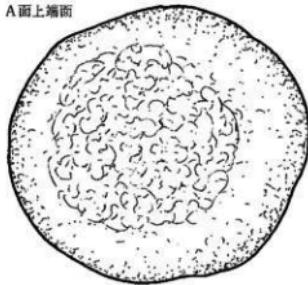
第33図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.33 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)

A

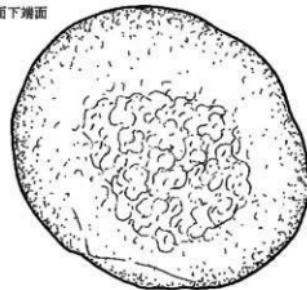


35

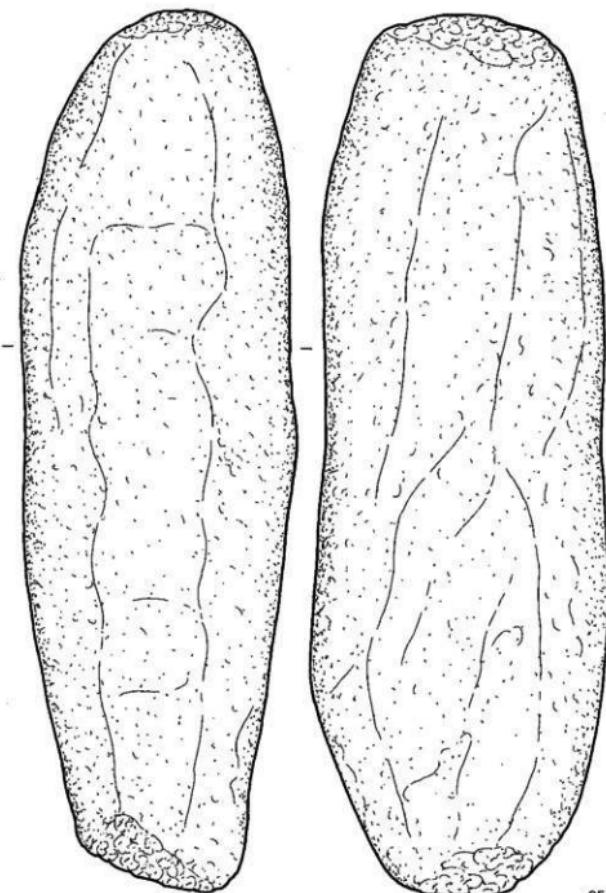
A面上端面



A面下端面



第34図 唐沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.34 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)



35

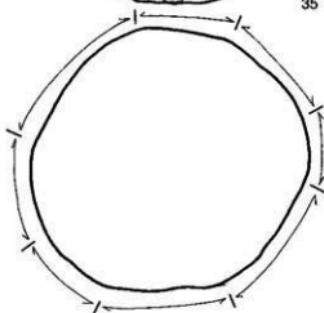
砾石

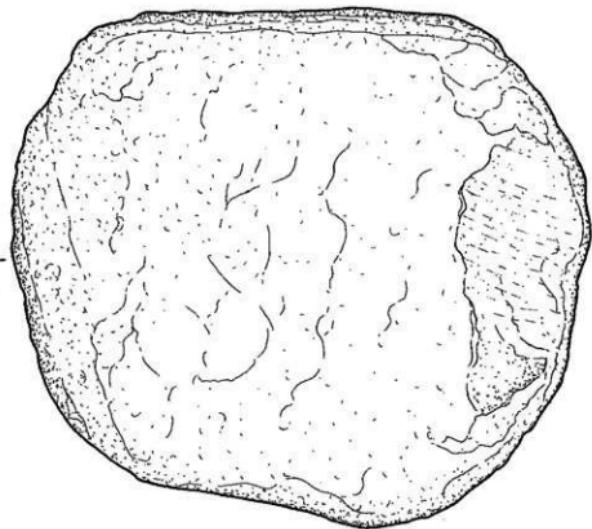
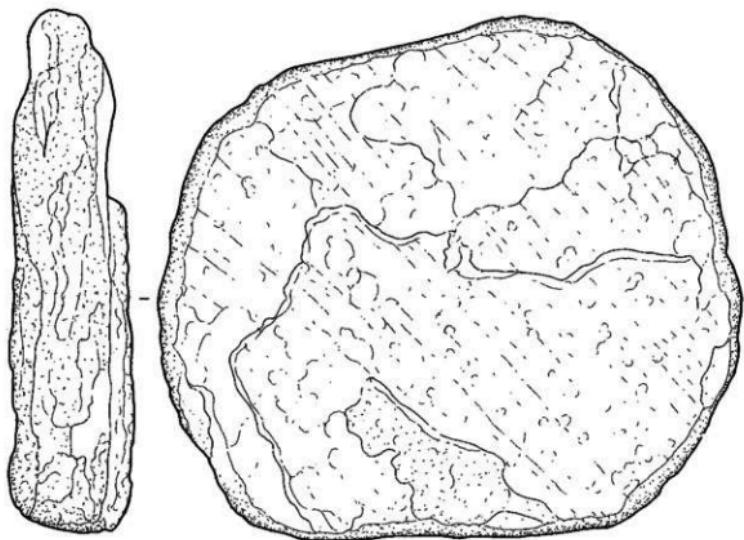
アルコース質砂岩(粗粒)

Grindin gritstone

Arkose sandstone

length	width	thickness	weight
226.2	76	67.1	1526.4
	mm		g





種
安山岩
Pebble
Andesite

36

length	width	thickness	weight
133	147	30.3	722.7

第35図 廣沢B遺跡出土石器 (4/5)
Fig.35 Stone artifact from Karasawa B site (4/5)

第4表 唐沢B遺跡石器一覧表

(長・幅・厚=mm, 重=g)

No	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	注記	取扱	備考
1	尖頭器	珪質灰岩	158.5	36.6	14.3	79	K-C-14-II-9	発掘	
2	尖頭器	硬質頁岩	112	37.8	9.7	35.5	K-M-H-3	発掘	
3	尖頭器	珪質頁岩	80.6	32.9	11.1	28.4	K-C-14-II-10	発掘	
4	尖頭器	硬質頁岩	83.3	38.4	7.7	31.2	K-C-14-II-8	発掘	
5	尖頭器(基部)	ガラス質黑色安山岩	26.8	26.2	7	5.1	K-O-H-2	発掘	
6	撃破器	硬質頁岩	151.5	52.9	24.7	210.6	K-C-14-II-5	発掘	
7	削器	硬質頁岩	114	65.3	15.7	107.4	K-C-14-II-13	発掘	
8	削器	珪質灰岩	65.9	34	6.6	15	K-A-11-II-27	発掘	
9	器器	珪質灰岩	106.6	73	20.6	103.6	菅平・前畠・昭和40年 5月12日	表探	
10	網状(断片)	珪質頁岩	53.2	15.7	3.7	3.7	走面なし	表探	
11	剝片	珪質灰岩	81.1	36.1	11.4	28.2	K-M-H-1	発掘	前回彫器と器種認定
12	剝片	珪質灰岩	84.4	50	4.8	15.8	黒岩標・昭和50年4月	表探	微小修理痕を有する
13	石刃	硬質頁岩	172	45.6	14.3	79.7	K-C-14-II-20	発掘	
14	剝片	頁岩	62.5	18.9	11.4	11.8	K-D-13-II-24	発掘	
15	剝片	頁岩	100.8	41.7	14.9	54.3	K-D-12-II-25	発掘	
16	剝片	珪質灰岩	34.4	92.5	13	36.9	K-C-14-II-16	発掘	
17	剝片	珪質灰岩	62	133	15.3	117	K-C-14-II-6	発掘	
18	剝片	珪質灰岩?	20	26	9	7-9	K-C-14-N-22	発掘	所在不明
19	剝片	珪質灰岩?	36	20	5	7-9	K-A-11-III-26	発掘	所在不明
20	剝片	黑曜石	18.5	20.5	3	4-6.9	K-D-14-II-17	発掘	所在不明
21	剝片	黑曜石	13	13.5	5	不明	K-C-14-II-16	発掘	所在不明
22	剝片	珪質灰岩?	9.5	15.5	不明	不明	K-C-14-II-15	発掘	所在不明
23	周面磨製石斧	硬質頁岩	121.8	40.1	14.5	77.9	K-O-H-1	表探	
24	周面磨製石斧	黑色頁岩	201	64.3	31.1	514.1	K-C-15-II-4	発掘	
25	周面磨製石斧	黑色頁岩	235.5	76	47.5	1078.8	K-C-14-II-18	発掘	
26	周面磨製石斧	砂岩	217.5	75.6	35.3	653.8	K-D-15-II-1	発掘	
27	周面磨製石斧	ホルンフェルス	230	84.4	40.9	977.4	1976年9月23日	表探	
28	打製石斧	黑色頁岩	172.5	48.5	14.2	128.5	K-C-15-II-14	発掘	黒化が激しい
29	打製石斧	黑色頁岩	199.5	66.9	27.6	466.8	K-C-15-II-3	発掘	黒化が激しい
30	打製石斧	黑色頁岩	212.5	68	33.3	560.4	K-C-15-II-12	発掘	黒化が激しい
31	打製石斧	黑色頁岩	226.5	69	38.9	720.1	菅平・前畠・昭和39年 10月5日	表探	
32	打製石斧	黑色頁岩	232	78.6	41.7	957.1	K-C-14-II-11	発掘	
33	打製石斧?	安山岩	218.8	83.4	55.8	1106.7	菅平・前畠・昭和41年 S30(上)・S30(下)	表探(上)・ 表探(下)	古く二つに欠損
34	砾石	アルコース質砂岩(板根付)	208	58.5	60	552.8	K-O-H-3(U)	発掘	表面は敲打に利用
35	砾石	アルコース質砂岩(粗粒)	226.2	76	67.1	1526.4	K-C-14-II-19	発掘	
36	礫	安山岩	133	147	30.3	722.7	K-D-13-II-23	発掘	熱を受け表面が赤変

Table 5 Attributes of stone artifacts from KarasawaB

(l-w-t=mm, weight=g)

No	tool type	raw material	length	width	thickness	weight	stone tool original No	excavation or surface collection
1	point	siliceous tuff	158.5	36.6	14.3	79	K-C-14-II-9	excavation
2	point	hard shale	112	37.8	9.7	35.5	K-M-H-3	surface collection
3	point	hard shale	80.6	32.9	11.1	28.4	K-C-14-II-10	excavation
4	point	hard shale	83.3	38.4	7.7	31.2	K-C-14-II-8	excavation
5	point	glassy andesite	26.8	26.2	7	5.1	K-O-H-2	surface collection
6	end-scraper	hard shale	151.5	52.9	24.7	210.6	K-C-14-II-5	excavation
7	side-scraper	hard shale	114	65.3	15.7	107.4	K-C-14-II-13	excavation
8	side-scraper	siliceous tuff	65.9	34	6.6	15	K-A-11-II-27	excavation
9	side-scraper	siliceous tuff	106.6	73	20.6	106.8	sugadaira maebara S40/5/12	surface collection
10	side-scraper	hard shale	53.2	15.7	3.7	3.7	no number	surface collection
11	flake	tuffaceous shale	81.1	36.1	11.4	28.2	K-M-H-1	surface collection
12	flake	tuffaceous shale	84.4	50	4.8	15.8	kurodwa S50/4	surface collection
13	blade	hard shale	172	45.6	14.3	79.7	K-C-14-II-20	excavation
14	flake	shale	62.5	18.9	11.4	11.8	K-D-13-II-24	excavation
15	flake	shale	100.8	41.7	14.9	54.3	K-D-12-II-25	excavation
16	flake	siliceous tuff	34.4	92.5	13	36.9	K-C-14-II-16	excavation
17	flake	siliceous tuff	62	133	15.3	117	K-C-14-II-6	excavation
18	flake	siliceous tuff?	20	26	9	unknown	K-C-14-N-22	excavation
19	flake	siliceous tuff?	36	20	5	unknown	K-A-11-III-26	excavation
20	flake	obsidian	18.5	20.5	3	unknown	K-D-14-II-17	excavation
21	flake	obsidian	13	13.5	5	unknown	K-C-14-II-16	excavation
22	flake	siliceous tuff?	9.5	15.5	unknown	unknown	K-C-14-II-15	excavation
23	edge-ground axe	hard shale	121.8	40.1	14.5	77.9	K-O-H-1	surface collection
24	edge-ground axe	black shale	201	64.3	31.1	514.1	K-C-15-II-4	excavation
25	edge-ground axe	black shale	235.5	76	47.5	1078.8	K-C-14-II-18	excavation
26	edge-ground axe	sandstone	217.5	75.6	35.3	653.8	K-D-15-II-1	excavation
27	edge-ground axe	hornfels	230	84.4	40.9	977.4	1976/9/23	surface collection
28	flaked axe	black shale	172.5	48.5	14.2	128.5	K-C-15-II-14	excavation
29	flaked axe	black shale	199.5	66.9	27.6	466.8	K-C-15-II-3	excavation
30	flaked axe	black shale	212.5	68	33.3	560.4	K-C-15-II-12	excavation
31	flaked axe	black shale	226.5	69	38.9	720.1	sugadaira maebara S30/5/10	surface collection
32	flaked axe	black shale	232	78.6	41.7	957.1	K-C-14-II-11	excavation
33	flaked axe?	andesite	218.8	83.4	55.8	1106.7	sugadaira maebara S41	surface collection
34	grinding stone	arkose sandstone	208	58.5	60	552.8	K-C-14-II-3(U) K-O-H-3(L)	excavation(U)/surface(L)
35	grinding stone	arkose sandstone	226.2	76	67.1	1526.4	K-C-14-II-19	excavation
36	pebble	andesite	133	147	30.3	722.7	K-D-13-II-23	excavation

6 唐沢B遺跡の様相

本稿では、まず、前章で述べてきた唐沢B遺跡の、
①石器群の様相・②遺構の構造・③編年等について、
総括的なまとめをおこなう。

次に技術的組織論（Binford 1979、阿子島 1989）的
な視点に基づいて、唐沢B石器群における補給・機
能・維持・消費・技術・廃棄構造についての検討を加
え、当時の社会システムの諸側面からそのあり方を考
えてみたい。

1 石器群の様相

(1) 石器組成の特徴

唐沢Bの石器は、尖頭器 5点・搔器 1点・削器 4
点・石刃 1点・剝片 11点・局部磨製石斧 5点・打製石
斧 6点・砥石 2点・疊 1点の計36点からなる。

また、以前の報告で彫刻刀形石器と器種設定したも
の（11）については、その認定を剝片に改めた。とく
に、その器種認定は重要な問題であり、竹岡俊樹氏など
何人かの旧石器研究者に意見を求めたが、いずれも
彫刻刀形石器とするには否定的な見解であったことを
付記しておく。

以下、その組成上の特徴を列記してみる。

- ① 器種組成の比重でみれば、磨製・打製あわせて11
本と石斧の数量が他の器種に比べ断然多い。
- ② 尖頭器は5点で、石斧に比べ貧弱である。
- ③ 砥石2点（うち1点は敲石を兼用）を含む。
- ④ 石器36点のうち、尖頭器4点・搔器1点・削器3
点・石刃1点・局部磨製石斧5点・打製石斧6点・
砥石2点の計22点は少なくとも成品として存在して
おり成品の占める割合が高い。一方、明らかな欠損
品といえるものは尖頭器1点・削器1点が認められ
るのみである。
- ⑤ 石核が組成しておらず、石器製作に伴う碎片類も
存在しない。剝片類も1ペアが同一個体のみで、他

は個体を別にし、いずれも他所からの搬入品とみら
れる。したがって、この遺跡内で剝片剝離作業が行
われた跡はない。

以上5点を組成上の特徴として列記してみた。これ
を、当該石器群の代表格といえる神子柴遺跡（藤沢・
林 1961）の石器組成（第37図、第6表）と比較してみ
よう。

まず、両者に共通する石器は、尖頭器・搔器・削
器・局部磨製石斧・打製石斧・砥石であるが、その數
量比には差がみられる。神子柴では、尖頭器・石斧と
ともに十数点を組成し両者が均衡するのに対し、前述し
たように唐沢Bでは石斧の充実に比べ尖頭器は数が少
ない。また、神子柴には安定して存在するが、唐沢B
には存在しない石器がある。石核である。ことに神子
柴の石核は「神子柴型」とでも呼びうるような特徴的
な円盤形石核（第37図10）であるが、こうした特徴的
な形態のものも含め、唐沢Bには1点の石核もないこ
とが注意される。なお、胡瓜形といわれる砥石の存在
は、両遺跡において特徴的で、形態のうえでも共通す
る。

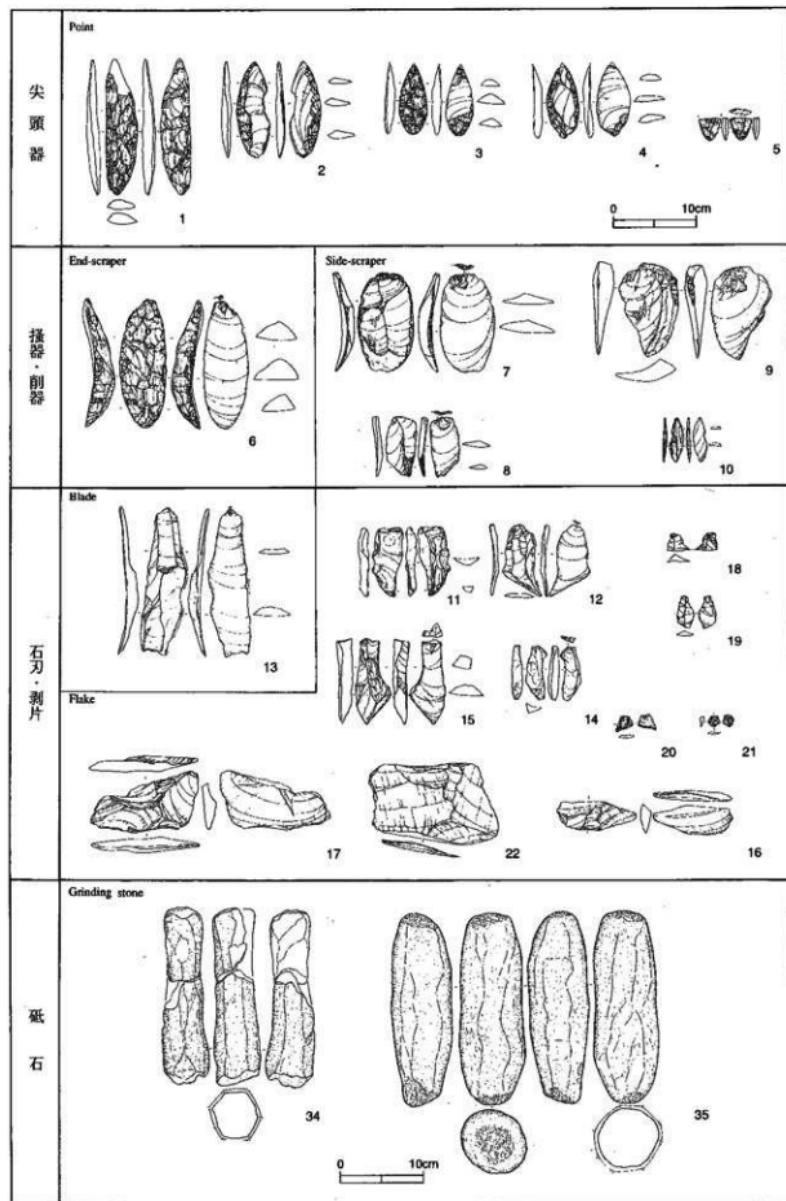
一方、同じく当該期の横倉遺跡（永峯 1982）の石器
組成は成品とみられる大形尖頭器40点（第38図）と剝
片数点であり、先に述べた神子柴とともに唐沢Bとも異なり、尖頭器への強い器種組成の偏りをみせているこ
とが注意される。

第6表 唐沢Bと神子柴の石器組成

Table 6 Stone assemblages from Karasawa B site and Mikoshiba site

	尖頭器	打製石斧	局部磨製石斧	搔器	削器	石刃・剝片	剝片接合個體	石核	磨石	砥石	計
唐沢B	5	6	5	1	4	12	0	0	0	2	35
神子柴	16	4	9	8	10	0	1	1	9	1	61

*唐沢Bは撲1点を除く点数



第36図 唐沢B遺跡の石器
Fig.36 Stone artifacts from Karasawa B site



第37図 神子柴遺跡の石器 (藤沢・林1961)
Fig. 37 Stone artifacts from Mikoshiba site

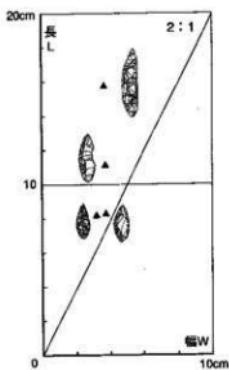
(2) 石器形態

尖頭器

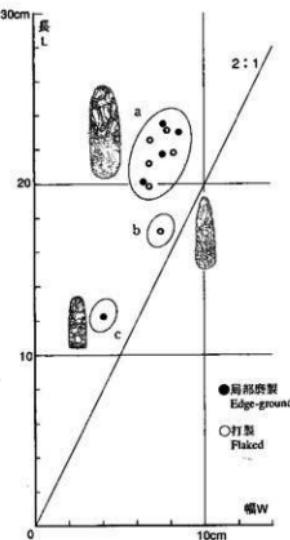
唐沢Bにおいて尖頭器は5点あり、以下の形態的特徴をもつ。

- ① サイズ的には15cm強の大型、10cm強の中型、8cm程度の小型に分けられる（第39図）。
- ② 加工形態では、大型のものが両面加工の半月形を呈し、中型のものが半両面加工で片側に抉入部を有し、小型のもの2点が片面加工で断面D字形を呈している。
- ③ 半月形尖頭器と、硬質頁岩製で半両面加工もしくは片面加工で小型の尖頭器の存在が唐沢Bの特徴といえる。

こうした唐沢Bの尖頭器の形態的特徴に対し、神子柴や横倉の尖頭器は両面加工であることが大きな特徴である。また、神子柴の尖頭器の多くがその最大幅を器体中央部寄りに有するに対し、横倉（第38図）は最大幅が基部側にあり下ぶくれた形態を有せ「横倉型尖頭器」の名で呼ばれることがある。従来、当該期の尖頭器については「神子柴型尖頭器」の呼称も広く使用されており、「長大・扁平・基部より最大幅をもつ」点が特徴とされる（森鶴1967）。しかしこれ意外には明確な定義がなされておらず、それが草創期の大形尖頭器全体を指すのか、また唐沢Bのような片面周縁加工のものも含めるのか、「横倉型」は「神子柴型」とは別型式となるのか、など型式学的な再整理が大きな課題として残されている。



第39図 尖頭器の大きさ
Fig. 39 Point size of Karasawa B



第40図 石斧の大きさ
Fig. 40 Axe size of Karasawa B

石斧

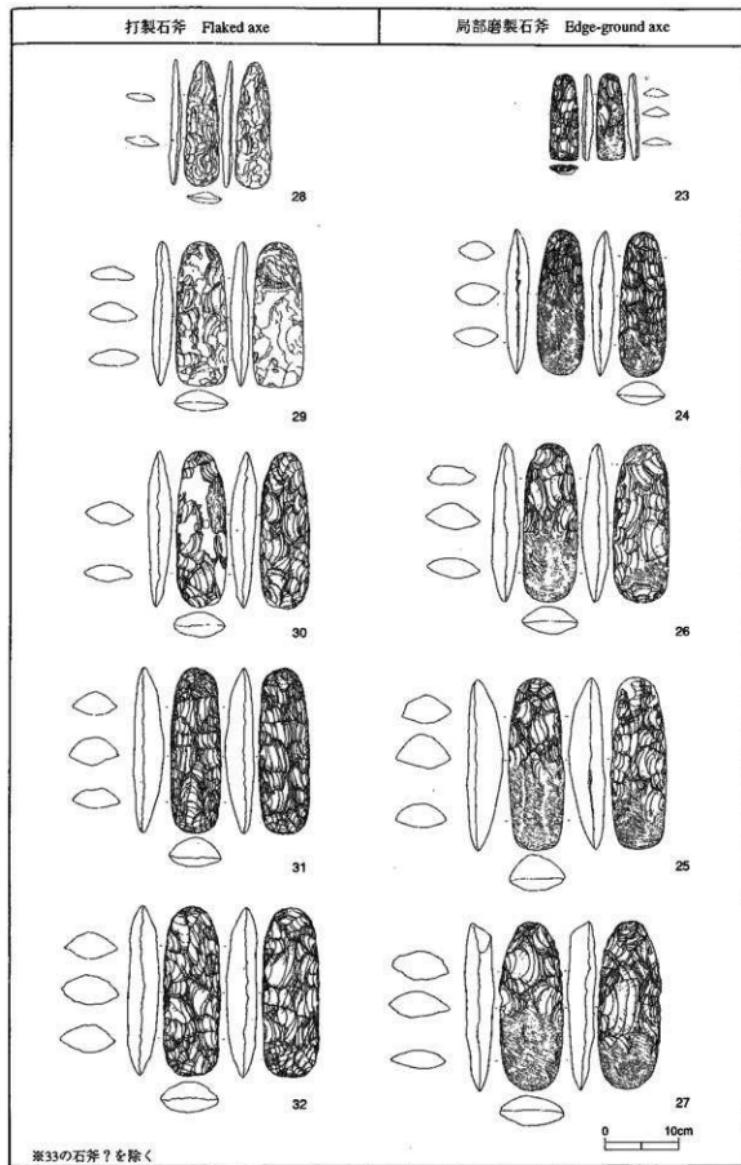
唐沢B遺跡には、局部磨製石斧5点・打製石斧6点の計11点が存在する(第41図)。その形態的特徴を列記すると以下のとおりである。

- ① 石斧は、サイズ的には(第40図)、20cm強の大型(a)、17cm強の中型(b)、12cm程度の小型(c)がみられる。
- ② 石斧の平面形は、基部側がわずかにすばまり、弧状を描く。いわゆる撥形というよりは短冊型に近い平面形を呈する。その形態的齊一性は高く、たとえば31・32の石斧のように刃で型を押したかのような相似形を呈するものがある。同一製作者の手による作品だろうか。
- ③ 刃部の側面形でみると、完全な片刃となるもの(21・25・31)、片側がわずかにふくらむ刃部となるもの(24・26・27・29・30・32)、シンメトリーな両刃(28)の三者がみられる。
- ④ 石斧の最大厚は器体中央にくる場合がほとんどである。
- ⑤ 刃縁ラインは、23の一例がいわゆる丸整型(弧状刃縁)を呈し、残りの全点は直線状の刃縁を形成する。
- ⑥ 局部磨製石斧では、研磨の奥行きが裏表で異なり甲高な側の面がより長く研磨されている(23・25・26・27)。(24のみ逆で甲高な面の研磨が短い)
- ⑦ 研磨が、側縁にもなされている場合があり、注意

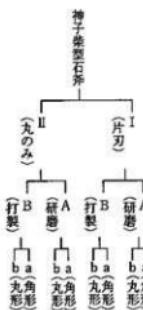
される(23・24・25)。こうした事例は神子柴の局部磨製石斧(第37図9)にもみられる。

- ⑧ 研磨は、いずれも刃部付近は横方向になされ器体中央部寄りでは斜め横方向になされている。さて、当該期の石斧は「神子柴型石斧」とされ、森嶋により「神子柴型石斧は巨視的に見れば、平面形は狭長で、断面は三角形を基本とする石斧である」とされ、微視的には、I片刃とII丸のみ、A研磨とB打製刃部平面形のa角形とb丸形に分類された(森嶋1970)(第42図)。

その後岡本は、列島内の当該石斧を総括するなかで、新たな分類案を提示し(第43図)、両刃と片刃に分類し、片刃をさらに平整と丸整とに分け、また磨製と打製の差は機能差にあるのではなく、効力の差にあるものと考え、分類の基準からはずしている(岡本1979)。一方、山内は打製石斧を磨製石斧の未成品と考えている(山内1969)。確かに唐沢Bのような石器群の状況をみた場合、石斧は砥石と共に伴していることから、打製石斧でも常に研磨は可能な状況にあるといえる。



第41図 唐沢B遺跡の石斧
Fig.41 Axes from Karasawa B site



第42図 神子榮型石斧の分類 (森嶋1970)

Fig. 42 Classification of Mikoshiba type axes by Morishima

当該石斧については、この他白石の分類などもあるが（白石1992）、従来の分類からみると、磨製・打製・片側・両刃・直刃（平盤）・曲刃（丸盤）、短冊形・撥形などが基本的な分類基準となりうるものとみられる。ただ、さきに打製と磨製の意味についてみたように、石斧の機能面や管理性からそのリダクション・プロセスを考慮した場合、あまり細かな形態分類は意味をなすものかどうかは難しい。したがってここでは、形態的属性を上記するのみにとどめておく。

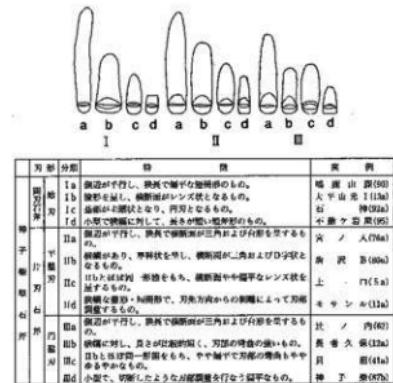
なお、石斧において、横斧・縦斧の弁別は重要である（佐原1994）。唐沢Bの石斧のうちでも、アンシンメトリカルな形態的属性を有する石斧（例えば第41図23・25・31）は、おそらく「横斧」であるものと考えられる。

(3) 石器の使用痕観察と機能

唐沢Bの石器について、使用痕観察による機能的検討をおこなってみる。観察には、金属顕微鏡オリンパスBHMJ（倍率200・100・50倍）、実態顕微鏡オリンパスS260（倍率10～25倍）およびルーペを用いた。観察の対象は、光沢・線状痕・微小剝離痕などである。観察結果を記す。

尖頭器

5点出土している尖頭器のうち、基部のみのNo.5を除き顕微鏡観察した。このうちNo.1の珪質凝灰岩尖頭器は風化が進行しており、観察が十分にできなかつた。また、No.2～4の硬質頁岩の3点はその形態から



第43図 神子榮型石斧の分類 (岡本1979)

Fig. 43 Classification of Mikoshiba type axes by Okamoto

刺突機能ばかりでなく側線を用いた切削機能も想定でき、その点をふまえて観察を行ったが、光沢・線状痕は観察できなかった。とくにNo.2の抉入部の機能も注意されたが使用痕はみられなかった一方、No.3・4の尖頭器は先端部を古く欠損するが、とくにNo.3の先端部の剝離は正面中央に向かって奥行きが長く、あるいは衝撃剝離としての縦溝状剝離（御堂島1996）である可能性がある。

振器・削器・剝片類

振器・削器・剝片類のうち使用痕の観察に有利な硬質頁岩製の石器もいくつか存在するが、これらのいずれからも光沢・線状痕は検出できなかった。

微小剝離痕を有する石刃・剝片にはNo.12・13があるが、微小剝離痕自体は偶発剝離としても生じる可能性があるので（西秋1994）、使用痕とは判断できない。

石斧

11点出土している石斧に関しては、No.26・28・29・33の4点については、風化の進行により、使用痕観察が不可能な状況にあり、残りの7点において使用痕観察をおこなった。その結果、No.23の局部磨製石斧から使用痕とみられる痕跡を見いだした。

No.23は、硬質頁岩の小形の局部磨製石斧で、その刃部付近の研磨面に、刃縁と直交する使用痕とみられる線状痕が観察された（第44図1）。この石斧の刃部研磨は、刃縁に平行方向になされているので（第44図

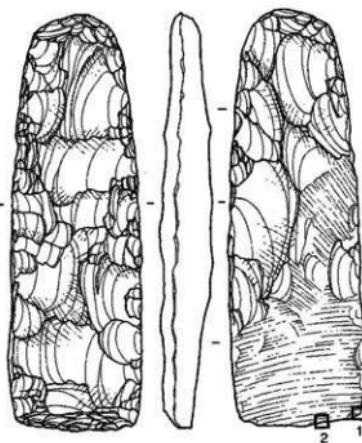
2)、研磨痕と使用痕との鑑別はしやすい。ただ残念ながら、使用光沢等は検出できなかった。この石斧の研磨痕と線状痕・刃部を形成する剥離の形成の前後関係だが、古い順から研磨痕→線状痕→刃部形成剥離→微小剥離痕の順で進める。つまりこの石斧の使用プロセスをたどると、局部研磨により局部磨製石斧として仕上げられた後、線状痕を形成するような使用をうけ、その後、ダメージを受けたであろう刃部が再生されたものとみられる。また、線状痕とともに写真1にみられる微小剥離痕は、刃部形成の際の偶発剥離とも考えられる。本石器のサイズの小形さも、そうしたリダクション・プロセスからの理解が可能であろう。

ここでひとつの想定を提示しておきたい。一般に使用痕の検出の有無は、石器の使用の有無とイコールでないことを注意しなければならないが、少なくともNo.23を除く唐沢Bの石斧が、明瞭な使用痕をもたないことは、それらが未使用状態であることを示しているのではあるまい。石斧は一般に管理的石器と見られ、通常は繰り返し使用され刃部再生（打削・再研磨）がなされる状況も考慮しなければならない。だとすれば、未使用的刃部の場合でも使用痕は残らないことになる。しかし唐沢Bの石斧の大形度から勘案すれば、現状はリダクション・プロセスを経る前、つまり一度も使用していない斧である可能性がある。ことに石斧の使用・未使用については、デボとも呼ばれる遺跡の性格とも絡んで、極めて重大な問題を提起しているといえる。

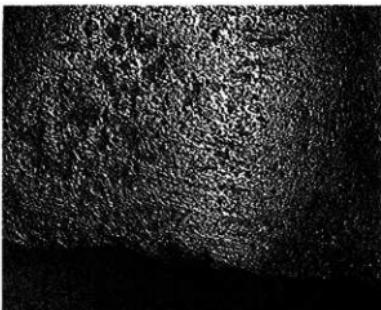
(4) 石器石材

唐沢Bの石器石材構成は以下の特色をみせる。

- ① 石器36点の構成石材は11種で、硬質頁岩・黒曜石・ガラス質黒色安山岩・珪質凝灰岩・凝灰質頁岩・頁岩・黒色頁岩・安山岩・ホルンフェルス・砂岩・アルコース砂岩である（第7表）。
- ② 11種の石材のうち、硬質頁岩が8点、珪質凝灰岩が8点、黒色頁岩が7点で、これらの石材がそれぞれ全体の二割前後を占めている。
- ③ これらの石材のうち同一個体とみられるのは剥片16と22の珪質凝灰岩1ペアのみであり、これ以外は同一の石材でもそれぞれ別個体とみられる。



1 使用痕 1 Striations by use ($\times 25$)



2 研磨痕 2 Striations by grinding ($\times 25$)

第44図 唐沢B遺跡の神子柴型石斧(23)の線状痕
Fig. 44 Striations of axe (23) from Karasawa B

第7表 唐沢Bの石材点数と重量

Table 7 Number and weight of raw materials at Karasawa B

石材	点数	重量 g
硬質頁岩	8	574.4
黒曜石	2	不明
ガラス質 黒色安山岩	1	5.1
珪質 凝灰岩	8	345.9
凝灰質 頁岩	2	44.0
頁岩	2	66.1
黒色頁岩	7	4425.8
安山岩	2	1829.4
ホルン フェルス	1	977.4
砂岩	1	653.8
アルコース 砂岩	2	2082.8
計	36	11004.7

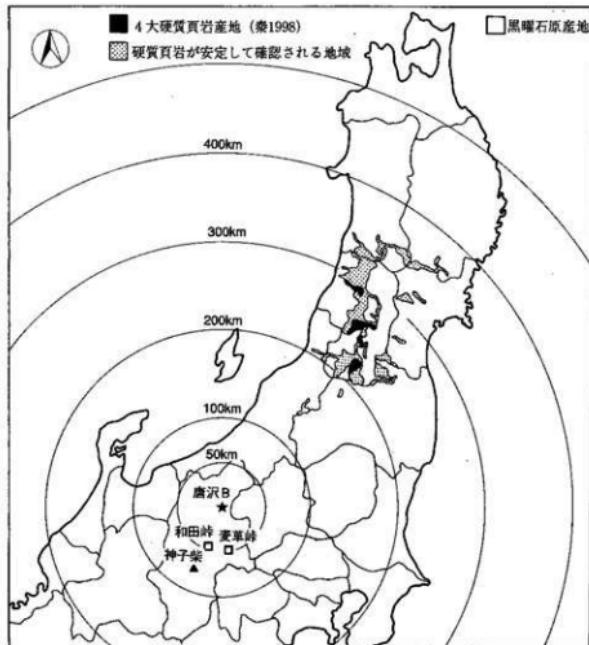


Fig. 45 Karasawa B and the distribution of raw material sources

④ 器種と石材との関連では、剝片石器には硬質頁岩・黒曜石・ガラス質黒色安山岩・珪質凝灰岩・凝灰質頁岩・頁岩など緻密質な石材が、石斧類には黒色頁岩を主に安山岩・ホルンフェルス・砂岩が、砥石にはアルコース砂岩が用いられ、器種による石材選択が明らかである。

ここで唐沢Bの石材産地についてみてみたい。

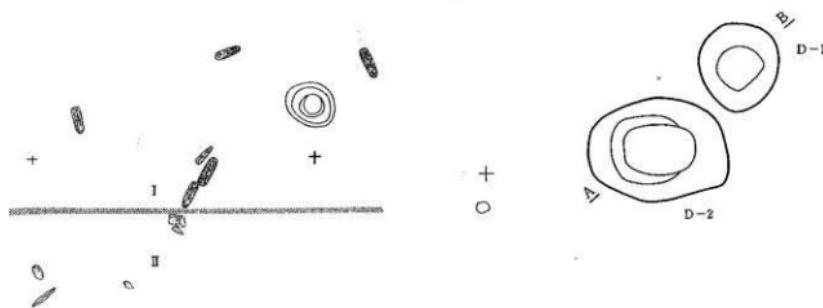
唐沢Bの尖頭器や擴・削器類に用いられている硬質頁岩（総計574.4g）はチョコレート色の良質なもので、第三紀層である女川層や草薙層起源の東北地方産の可能性がある。秦は東北地方の詳細な踏査によつて、石器に適した硬質頁岩の主たる分布域を明らかにしているが（秦1998）、それらの産地は唐沢Bとは200km以上の距離を隔てている（第45図）。

黒曜石小剝片2点は、所在不明のため産地分析を実施できなかつたが、近隣だとすると和田岬周辺のものであろうか。ガラス質黒色安山岩は、遺跡の南西方向

の佐久市の八風山周辺のものとは質感が異なるため、北東方向の飯山から津南にかけての信濃川流域などの産地の可能性もある。石斧に多用される黒色頁岩（総計4426g）は、中村由克氏のご教示によれば群馬から新潟にかけての第三紀層などに産出する石材である可能性があるといふ。このほか珪質凝灰岩・凝灰質頁岩・頁岩・ホルンフェルス・砂岩・アルコース砂岩なども、菅平高原で直接採取することは可能でないが、おそらく50km以内の範囲で調達できる石材であろうとみられる。

以上唐沢Bの石材供給ベクトルをみると、東北地方や群馬・新潟周辺からの方向性が強く看取される一方、和田岬や八風山など南西方向の供給ベクトルは弱い傾向がみられる。

ちなみに、神子柴遺跡での石材組成をみると、唐沢Bと同様東北地方産とみられる硬質頁岩が擴器類などに10点ほど存在する。一方、10点ほどの黒曜石尖頭器



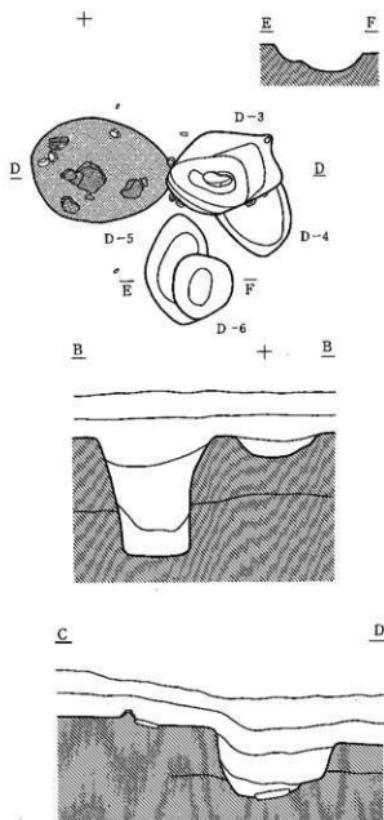
第46図 石器ブロック1のI群とII群
Fig. 46 Groups I and II of Concentration 1 in Karasawa B

(第37図2など)がみられるほか、黒曜石の石核(同図10)なども何点かあり、黒曜石が定量的にみられる点で、唐沢Bとの石材組成に大きな相違がある。また神子柴には下呂石製の尖頭器(同図1)も含まれておりますり、黒曜石や下呂石利用の点で唐沢Bとは異なる石材供給ベクトルがみられる。一方、横倉遺跡の尖頭器の素材は、玄武岩との記載があるが、おそらく飯山から津南近隣にかけての信濃川流域のガラス質安山岩の可能性がある。

2 遺構

唐沢B遺跡は、石器ブロック1か所・焼窯炉1基・土坑6基・ピットなどの遺構を中心に構成される。その構造や配置関係など遺構の特色を列記する。

- ① 唐沢Bでは、径3m前後の弧状の石器分布=石器ブロック1において22点の石器が検出された(第46図)。この中では、さらに石器ごとに分布の偏在性がみられ、便宜的にスポットa~iに区分した。
- ② ブロック内で器種別に石器分布をみると、石斧は北半に片寄って分布する傾向が明らかである(I群)。一方、南半の分布には石斧は含まれず、尖頭器・搔器・石刀・剣片・砥石などが分布する(II群)



第47図 唐沢B遺跡の土坑(1/60)
Fig. 47 Pits from Karasawa B (1/60)

群)。つまり、石斧類とそれ以外の器種が対置的に分布する「分布の対立性」の傾向は明らかで、I群とII群の置き分けの行為の存在が考えられる。

- ③ 焼躰炉(第47図)は、扁平な赤化跡8点と小形躰3点をもちしっかりとした掘り込みをなさない。
- ④ 焼躰炉は、石器ブロックとは3~4mの距離を隔てて存在する一方、4基の土坑と隣接する。
- ⑤ 土坑(第47図)は石器ブロック1とは距離をおいて、6基検出された。このうち、D-3とD-4、D-5とD-6の2ペアが重複する。
- ⑥ 土坑のうち2基は深い掘り込みをもつもので、炭化物様のものの出土が認められた。
- ⑦ 石器ブロック1内より径30cmほどのビットが検出された。上屋に関連するものだろうか。

唐沢B遺跡は、石器の成品のみが狭い範囲に集中してみられる点において、組成の違いこそあれ神子柴遺跡との共通性を示す。一方、唐沢Bにみられた焼躰炉や土坑は神子柴には認められないものであり、双方の遺跡の一部の機能差も想定可能であろう。

3 編年の位置付け

神子柴系石器群の時代的な位置付けについては、旧石器時代に最終末に位置付ける見解、繩文時代草創期に位置付ける見解、あるいはその両時代にまたがせる見解がそれぞれある。そこには移行期の石器群の位置付けの困難さが現れているが、筆者は神子柴系石器群の登場をもって繩文草創期とする立場をとる。

神子柴系石器群の編年については、数多くの編年案が出されているが、その初期には森嶋により6期の編年案が提出された(森嶋1970)。詳細は第2編の森嶋論文を参照されたいが、I期は大形の神子柴型尖頭器と神子柴型石斧が存在する神子柴遺跡に代表される時期、II期は尖頭器がやや小形化する唐沢Bの段階、III期は神子柴型石斧の小形化にみる長者久保の段階、IV期は神子柴型石斧・尖頭器に有茎尖頭器と隆起線文土器を伴う田沢の段階、V期は神子柴型石斧・尖頭器に石鐵と矢柄研磨器・隆起線文土器を伴う田沢の段階、VI期は神子柴型石斧・尖頭器に爪形文土器などを伴う日向廻窓などの段階とされる。この流れの中で神子柴

型石斧は「狭長化」という形態変化を遂げることも指摘されている。

森嶋の編年からおよそ30年を経たいま、改めて神子柴型といわれる大形尖頭器や石斧を含む石器群の編年を考えると、石刃・柳葉形尖頭器・植刃・有茎尖頭器・石鐵などの石器組列と、無文あるいは高文・刺突文などとされる隆起線文以前の土器・隆起線文土器・爪形文土器などの土器組列が指標となることは明らかで、森嶋の編年の骨子は大きくは揺らがない。また、神子柴型石斧の「狭長化」や、あるいは新しくなるにつれての形態のくずれも追認できる傾向である。

ただ、そうした諸要素のなかで、森嶋がI・II・III期と序列した神子柴・唐沢B・長者久保の石器群をみると、それぞれは異なった表情をみせているものの、地域や集団を異にした石器群の個性に偏る部分もあるって、ただちに時間差に置き換えるのは難しいと考えられる。この点については森嶋の編年から逆行するかのようであるが、むしろ現時点ではそれら三者は、鈴木忠司の編年にもうかがえるように(鈴木1988)、同段階に包括しておく方が望ましいと思える。

中部高地において神子柴系石器群が登場するのは、前時代の細石刃文化の最後を飾った削片系細石刃技法をもつ柳や中ッ原に後続する段階である。そして神子柴系石器群のうち、整った神子柴型石斧と尖頭器・石刃・石刃擴器を伴い、柳葉形尖頭器・植刃・有茎尖頭器は含まない神子柴・唐沢Bの石器群は、長者久保などを含めて、その純粹な内容性からも最古段階に位置付けることができよう。これら3遺跡には土器は認められていないが、石器群が近似する大平山元I遺跡での土器共伴事例をみると、本来的には隆起線文以前の土器が伴った可能性も否定できない。

これに継続する段階には、石刃技法を失い、ややラフな石斧や尖頭器を伴い、隆起線文以前の土器がみられる寺尾Iや月見野上野II・勝坂・多摩ニュータウンNo.796などの石器群が位置付けられよう。この段階にあっても柳葉形尖頭器・植刃・有茎尖頭器などは顕著に認められない。

柳葉形尖頭器・植刃・有茎尖頭器が組成に加わり、一部に隆起線文土器をもつ様相がみられるのはようやく次の段階に至ってのことである。

4 唐沢B遺跡の技術的組織

(1) 個人装備・世帯装備と交換品

狩猟採集民が保持する装備についての、技術的組織論的アプローチの嚆矢となつたのは、ピンフォードによるヌナミウト・エスキモーの管理的技術の分析である。装備には、個人装備・世帯装備という所有レベルがある一方、常用される装備と常用されない装備があつて、後者には非常（緊急）用装備や状況的装備が存在し、それらが管理的技術のもとに組織化され利用されていることが述べられた（Binford 1979、阿子島 1989）。ここではそうした装備論的視点から、最初に唐沢Bの石斧のあり方を検討してみる。

まず、装備数を問題にしてみよう。民族誌をひとく限り、個人装備あるいは世帯装備としての石斧は、单品もしくは2・3点の所持というのが通例である。これに対し、唐沢Bの11点という石斧の数は、明らかに世帯装備の通常数を越えた数である。この点において、神子柴や唐沢Bの石器群を「生活のセット一そり」とする森嶋の見解（森嶋1970）は残念ながら肯綮できない。ではその多数の保有は何を意味するのだろうか。解釈のひとつとしては、自己世帯のための備蓄というよりは、他世帯（もしくは他集団）への交換品としての機能を備えているとみることができる。前節で述べたように、唐沢Bには、小形品には使用した石斧がみられる一方、少なくともいくつかの大形石斧は未使用の可能性があった。このことは、唐沢Bに実際の生業用装備としての石斧が存在する一方、交換品としての未使用の石斧が保有されていたことをあらわしているものと考えたい。また、それらの斧が交換品であるならば、運搬の関係からもおそらく斧身のままで、保管に際しては着柄はなされていない状況を想定したい。

佐原は、『斧の文化史』を総合的に考察するなかで、オーストラリア国立博物館やホワイトらの調査したパプア＝ニューギニアのドゥナ語部族の石斧の利用実態を紹介している（佐原1994）。ドゥナの人々は、自らは石斧の作り方さえ知らず、言葉の通じないコラの人々が持ってきた石斧を、領域の境界付近で塩かブタと交換して入手するのだという。このように交換

第8表 ニューギニア・ドゥナの人々の石斧の入手方法
Table 8 Means of axe procurement by the Duna, Highland New Guinea

	国立博物館調査		ホワイト調査	
	石斧の数	(%)	石斧の数	(%)
よそとの交換	22本	(17)	31本	(14)
内々での交換	20	(15)	10	(5)
伝世	26	(20)	75	(34)
花嫁代償・償い	6	(5)	6	(3)
盜品・借り物	2	(2)		
贈物	45	(35)		
土中発見	9	(7)	97	(44)
合計	130	(100)	219	(100)

（佐原1994）による

が彼らの石斧の入手手段であったことは興味深い（第8表）。ちなみにシャープが観察したオーストラリア・北クイーンズランドの部族間交換システムを紹介したサーリンズによれば（sahlins 1972）、斧の原産地と槍の原産地にそれぞれ近い部族間の交換では、斧の原産地付近では槍1本と斧数振り、槍の原産地付近では斧1振りと槍十数本という交換レートがみられるという。つまり原産地からの距離に比例した石器の希少性で交換レートが定まることがわかる。一般に石器数・石器重量と石材产地との距離においては、反比例の関係が存在する。このことは、唐沢Bにおける石斧数量多さと推定石材产地（50km圏内）、尖頭器数量の少なさと推定石材产地（200km圏外）との関係において矛盾しない。改めて述べるまでもないが、唐沢Bは、石斧の原産地により近く、尖頭器の原産地により遠い地理的環境にあたっている。

では、唐沢B遺跡において石斧のいくつかは交換品としての意味を有しているとして、他の石器はどうなのであろうか。尖頭器や搔・削器については、点数の上からは個人・世帯といったレベルの装備数を越えているとはみられない。これらが200kmという距離を隔てた遠隔地の硬質頁岩を用いているとすると、あるいはこれについては今後さらに交換にまわされる石器というよりは、交換連鎖によってたどり着いた最終地で今後は使用に供される石器である可能性もあるうか。だが一方で、民族誌において散見されるように、遠隔

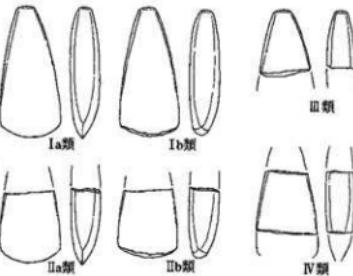
地石材を用いた製品はしばしば威信財として尊重されることも記憶しておかなければならぬ。いずれにせよ、石斧とそれ以外の器種については、先にみた「分布の対置性」にも象徴されるように、その機能上の違いばかりでなく、存在上の意味も異なることも考えられる。

ところで、石器群の技術的組織論における管理的技術と便宜的技術の分化はきわめて重要で、石器個々においても管理的石器と便宜的石器の存在（阿子島前掲）が対極にあり、その管理度が問題ともされている。そうした点においては、石斧は管理的石器の典型ともいえる石器である。例えばさきにみた、ドウナの人々の54本の石斧の使用年数の平均は7年で、4年から11年までの使用の幅があり、また親から子に伝世することも稀ではないという（佐原前掲）。石斧がきわめて長い寿命をもつ管理的石器であることがわかる。そうした耐用年数の問題も含め、本来的には唐沢Bの石斧がどのようなライヒストリーをたどるべきだったのか（あるいはこうして残されること自体がその本来の姿だったのか）は、興味深い問題である。

次に、石斧一般の機能についてだが、従来の使用痕分析からは主に木材の伐採・加工用と推定されているほか、肉や皮あるいは骨などの使用光沢も検出される場合がある。実際の民族例でも、木材の伐採・加工用に主に用いられる反面、動物の解体などに利用されていることが観察されている。神子柴型石斧の機能について麻柄は破損率（第48図）を問題にしたうえで、その破損が著しく少ないと着目し、もしその用途が木材加工用であれば激しい破損がみられて当然であり、木材加工用に用いられた可能性は低い、との見解を示している（麻柄1988）。説得力のある見解だが、逆にみればダメージの少ない用途のために、なぜこのように重厚で手間のかかるコスト高い石斧を作成したのか、という疑問点が新たに生じてしまう。のことからすれば、あるいは神子柴型石斧は当初は生産用具として機能した「生活財」というより、「威信財」や「交換財」であり「儀器・祭具」として存在していたとする見解（安斎1990）も見過ごせない。

唐沢Bの大形石斧には、そのほとんどに使用痕が観察されず、未使用の状態が推定された。一方で、最も小形な石斧のみに使用痕（線状痕）が観察されたこと

地域	類型	件数							計
		I a	I b	II a	II b	III	IV	V	
北海道		22	3	5		1			31
東北		45	1	4		1			51
関東		37		2		3		3	45
中部		84		15		4			103
近畿・中四国		5		1					6
九州		12	1		1				14
計		205	5	27	1	9		3	250



第48図 神子柴型石斧の破損例（麻柄1988）

Fig. 48 Breakage types of Mikohiba type axe

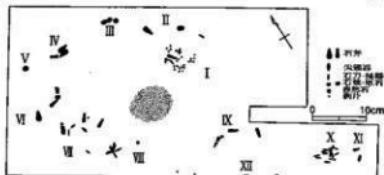
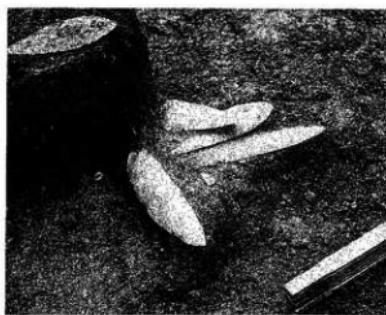
も注意された。のことから筆者は、一般に神子柴型石斧は、管理的石器として容易に廃棄されず、破損しても繰り返し繰り返し刃部再生がなされ、小形化のプロセスをたどるため、最終的に廃棄された破損品が見いだしにくい状況を想定している。また不用品の廃棄パターンにも特殊な状況があるのかもしれない。そしてその軽量なその機能であるが、使用痕による推定を伴わないとまつたくの想像としかいいようがないが、筆者は何といつてもまず第一に木材の伐採・加工用の道具であろうと考えている。おそらく、定住化の進行による住居等構造物の建設や、後水期に向けて拡大する森林環境への技術適応といった点において、より木材の伐採・加工が重要になったがために招来されたのが神子柴型石斧であろうと解釈したい。その「先適応」（安斎前掲）として、神子柴文化の前段階の細石刃文化にも、木材の伐採・加工用具とみられる「疊器の顕在化傾向」（堤1997）をとらえることができる。ただし疊器と石斧の決定的な違いは便宜的石器か管理的石器かという点にある。

(2) 場の機能とサイト・フォーメーション

場の機能

唐沢B遺跡や神子柴遺跡にみられるように成品がまとめて配置される当該期特有の遺構の性格については、「住居址説」・「墳墓説」・「デボ説」などが取り沙汰されてきた経過がある。「デボ」の概念一般について佐原は、ヨーロッパ考古学をひもときながら、「埋納」の訳をあて、墓以外の場所に品物を埋めることを埋納といい、盗まれないように隠す、交易の品物を分かれ道のそばなどに一時的に埋めておく、青銅器の飾物師が道具一式を埋める、神靈に捧げるために埋める、などの性格をあげている(佐原1985)。デボ=Depot(仏)に相当する概念には、英米では、Deposit・Cache・Hoardなどがあり、それぞれ一般的には、保管所・隠匿所・貯蔵所などの訳語もあてられる。

かつて山内清男は、神子柴遺跡を「デボ」として位置付け(山内1969)、また佐藤達夫は「デボ」の存在が「交換用物資の獲得、製造および交易といったような、日常生活以外の諸活動を支えた社会的余剰の存在を意味している」と理解した(佐藤1974)。岡本もそうした「社会的余剰」の中でデボをとらえ、神子柴・横倉・宮ノ入・鳴鹿山鹿などをデボの具体例としてあげている(岡本1979)。これに対し神子柴遺跡の性格について稻田は「日常生活の遺跡における道具類のさまざまなあり方とときはなしては理解できず、日常生活の多様性のなかに位置づけてこそ正しい理解ができる」と述べている(稻田1986)。また、本唐沢B遺跡の調査者である森島は本遺跡が「積極的に生活址的である」との見解を示した(森島1970)。具体例として唐沢Bをみれば、確かに焼櫻炉などの存在は生活址的なのかもしれないが、さきに述べたように通常の装備数をはるかに上回る石斧の数は、むしろ交換品などの計画的な保管行為と解釈することにより、当該期の社会経済のダイナミズムを語ることができないだろうか。すなわち「デボ」あるいは「キャッシュ」としての機能を想定したいのである。ただし、そうした保管行為自体は決して特殊なものではなく、遊動スケジュールに組み込まれた計画的・配置的なものであり、場合によってはそれに居住や調理など通常の生活行為が



第49図 神子柴遺跡の石器分布(林1994)

Fig. 49 Stone concentration from Mikoshiba site

付随したとしてもなんら不思議はない。また、デボは「社会的余剰」をもって出現したとみるよりは、石器受給システムの質的転換を示す特徴的現象として解釈したい。

神子柴遺跡など当該期の遺物分布を詳細に検討した田中は、そのあり方をデボととらえるなかで、その状況が埋納、つまり埋めるという行為だけに限られるかどうかは、検証する必要があると述べている(田中1982)。唐沢Bの場合をみると、いくつか土坑が明瞭に検出されているにもかかわらず、石器は穴らしき跡からは出土していないので、おそらく置かれている状況が想定でき(置いた上に土がかけられていたかどうかはわからないが)、穴に埋められていたものではなかったらしい。

栗島はこの時期のデボを二分し、I類を「石器集積デボ」、II類を「石器埋納デボ」とする。「石器集積デボ」は特定墓裡に偏って石器が集積され、分配や交換など当時の石器供給システムを背景に存在するものであり、「石器埋納デボ」は、石器生産や供給システムに関する儀礼的行為を背景として存在するものと推察している(栗島1990)。また、一方で栗島は、神子柴

や唐沢Bについては、デボという性格の範疇から除外する。特に神子柴は、尖頭器・石斧・搔器・削器・石核・砥石など多様な器種で構成される点で、特定器種に偏って石器が存在する「石器集積デボ」との違いが大きく、「石器交換の場」としての性格を想定する。神子柴や唐沢Bの事例（図50・51）は、確かに单一器種の集積とは異なる点で注意される。

なお、鳴鹿山鹿での石斧や有茎尖頭器の遺存状況を詳細に復元した土肥は、その中に石器の機能停止など儀礼としてのデボの存在を想定している（土肥1988）。また、さきに触れたように安斎は、神子柴型石斧は当初は生産用具として機能した「生活財」というより「威儀財」や「交換財」であり、転換期の動搖する社会にあっての統合のシンボルとしての「儀器・祭具」として存在し、そのデボ状の出土例は集会の後の用具の埋納跡であり、経済的意味以上に社会的意味を占めているものとの見解を示している（安斎前掲）。

さて、唐沢B遺跡では、石器分布とあわせて、焼跡炉や土坑数基の存在も場の機能を示すものとして注意しなければならない。これらの土坑については、墓・ゴミ穴・貯蔵穴・その他の機能が考えられよう。いさか無難だがその貯蔵穴としての性格を想定した場合、石器のデボ行為とあいまって、より収藏的な遺跡の場の機能を想定できるであろう。また、これらの土坑のうち、焼跡炉と隣接する4基については、焼跡炉との補完的な機能も考えられる。例えば、焼跡炉において調理した食糧を、隣接する土坑で処理あるいは貯蔵するような行為である。なお、これらの土坑二者が重複する現象は、その構築の時間差を表し、この場所への集団の回帰性を物語るものとして解釈したい。おそらく、この場所が回帰的な要地であったとすると、造構としては残らないが、大きな木など、なんらかのランドマークがかつて存在した可能性がある。

以上をふまえたうえで唐沢B遺跡の場の機能について考察すると、石斧の出土状況に象徴されるデボ的性格と、炉址に象徴される生活場の性格という二面性を具有しているものと考えられる。あわせて唐沢Bは回帰的要地でもあったことが想定される。

サイト・フォーメーション

ところで当該期の遺跡はデボ的な性格のものばかり



第50図 唐沢B遺跡の石器分布 (Spot d)

Fig.50 Stone concentration from Karasawa B

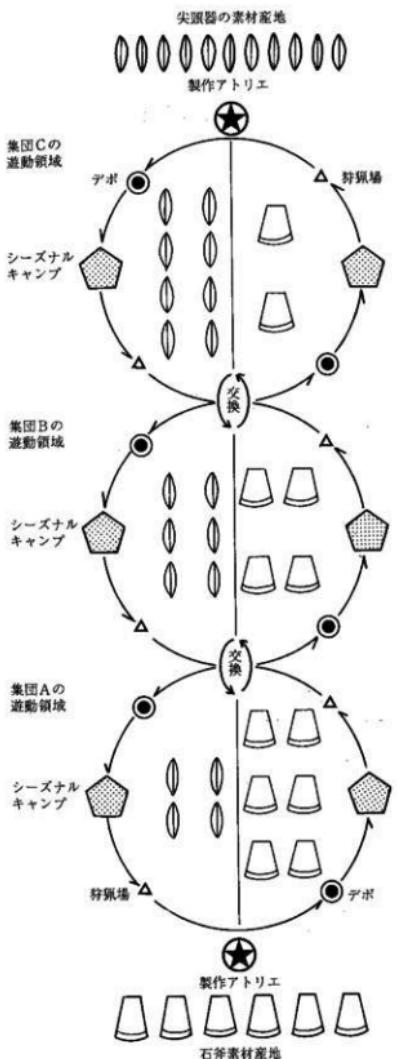


第51図 唐沢B遺跡の石器分布 (Spot f)

Fig.51 Stone concentration from Karasawa B

ではない。田中は、石器分布のあり方を検討した上で、デボ・日常生活場・専門の石器製作場・墳墓などの4つの性格を想定する（田中前掲）。また栗島は、この時期の遺跡を、多量の尖頭器をもつ製作跡、安定した石器組成と土器を有する集落跡、コンパクトな石器組成をもつキャンプ地、石器埋納の行われたデボに分類し、「石器交換をめぐる遺跡連鎖」から当時の石器の生産・分配・供給システムを読み取ろうとする（栗島1995）。

当該期のサイト・フォーメーション・プロセスを検討するとき、おそらく集団の遊動テリトリー内には、



第52図 遊動領域と石器交換のモデル

Fig.52 Model of stone artifacts exchanges in Incipient Jomon stage

居住地（レジデンシャル・ベース）、狩猟場（ハンティング・フィールド）、収納所（デボ・キャッシュ）、ときには祭祀場所などがみられ、加えて原産地を領域内に取り込んだ集団では、石器製作場所（アトリエ）を有するものと考えられる（第52図）。具体例をあげれば、八風山のガラス質黒色安山岩原産地を取り込んだ下茂内遺跡は、尖頭器の典型的なアトリエ・サイトであり、逆に唐沢Bや神子柴は回帰的な居住地でもありデボでもあったものと解釈できる。なお、唐沢Bは標高1200m以上の高地であることから、おそらくは冬季以外の探訪地で、峠路にあって集団間の接触地点としての可能性も残る。

さて、後期旧石器時代末の細石刃石器群から繩文草創期の神子柴石器群への移行における技術的組織の大きな変換は、自己領域内に石器石材原産地を持たない集団において、細石刃=石器素材の補給→石器自己生産という補給構造から、石斧・尖頭器=石器成品補給→石器非自己生産という補給構造へと質的に変換した点にあろう。成品補給は、石器製作に伴う破損のリスク回避と、石器製作時にチップなどとして排出される石材の不要部分を除く運搬の効率化という点で優れているといえる。しかし一方では、その補給システムの整備がなされなければ、その構造を支えることができない。そうした脈絡の中で、集団間においては石器交換システムの整備が進み、集団内においては遊動テリトリー内におけるデボもしくはキャッシュの設置、すなわちキャッシング・ストラテジーが重要となつたものと考えられる。

唐沢Bの前段階に位置付けられる細石刃文化期の後半には、東日本ではサケ属の遡河性漁労がなされ（佐藤1972）、食料貯蔵技術も進み、一方では遊動領域の限定化や居住の長期化が進行したものと考えられる。それはいわばフォレイジャーからコレクター（Binford 1979）への移行ともとらえられる。こうした転換は、分散する重要資源について資源領域集団それぞれの管理を一層強化させ、一方で資源領域外の集団がそれを得るための交換システムを発達させたものと考えられる。こうした脈絡において、草創期のデボ的な遺構が登場したものと想定される。

では繩文草創期以降、なぜデボ的な遺構がなくなつ

たのか。それは、おそらく交換システムのさらなる整備によってデボによる一時的保管という紛失リスクが回避されたことと、居住システムの質的な転換、すなわち定住化の進行によって、住居内での装備管理が強化されたことなどの原因が想定されようか。

引用・参考文献

- 阿子島香 1989 「石器の使用痕」
- 安斎正人 1990 「無文字社会の考古学」
- 福田孝司 1986 「縄文文化の形成」『岩波講座日本考古学』6
- 岡本東三 1979 「神子柴・長者久保文化について」『奈良国立文化財研究所学報』35
- 栗島義明 1990 「デボの意義」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』7
- 栗島義明 1995 「日本列島における移行期の文化—神子柴文化が移行期に果たした役割—」『シンポジウム東アジアにおける土器の起源』
- 佐藤達夫 1974 「黎明期の日本」『図説日本歴史』1
- 佐藤宏之 1992 「北方系削片系細石刃石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』
- 佐原 真 1985 「ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念」『国立歴史民俗博物館研究報告』7
- 佐原 真 1994 「斧の文化史」
- 白石浩之 1992 「旧石器時代末から縄文時代初頭の石斧の研究」『東北文化論のための先史学・歴史学論集』
- 鈴木忠司 1988 「上野第II文化層の位置付けをめぐって」『大和のあけぼの』II
- 田中英司 1982 「神子柴遺跡におけるデボの認識」『考古学研究』29-35
- 堤 隆 1997 「更新世末期における砾器使用行動の意味」『長野県考古学会誌』82
- 土肥 孝 1989 「第一の道具」「縄文人の道具」古代史復元3
- 永峯光一 1982 「横倉遺跡」『長野県史—考古資料編』1-(2)
- 西秋良宏 1994 「石器製作時に生じる偶発剝離の諸問題」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4
- 秦 泰昭 1998 「珪質頁岩とその分布」「考古学ジャーナル」432
- 林 茂樹 1994 「神子柴遺跡」「信州の大遺跡」
- 藤沢宗平・林 茂樹 1961 「神子柴遺跡—第一次調査概報—」「古代学』9-3
- 麻柄一志 1988 「神子柴型石斧の機能」「旧石器考古学』37
- 御堂島正 1996 「ナイフ形石器の刺突実験」「神奈川考古』32
- 森嶋 稔 1967 「長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器」「信濃』19-4
- 森嶋 稔 1968 「神子柴型石斧をめぐっての試論」「信濃』20-4
- 森嶋 稔 1970 「神子柴型石斧をめぐっての再論」「信濃』22-10
- 森嶋 稔 1984 「使用破壊痕のある神子柴型石斧Ⅲ b型をめぐって」「中部高地の考古学』III
- 山内清男 1969 「縄文草創期の諸問題」「MUSEUM』224
- Binford,L.R. 1979 Organization and formation processes: Looking at curated technologies. *Journal of Anthropological Research* 35
- Sahlins,M. 1974 *Stone age economics*. Tavistock Publications
- 山内親記 1984 「石器時代の経済学」

第2編
神子柴系文化を
めぐる諸問題



Point from Karasawa B (1/1)

第2編 神子柴系文化をめぐる諸問題

第2編では、「神子柴系文化をめぐる諸問題」と題して、唐沢B遺跡に直接的な関連性をもつ神子柴系文化について、故森鷗穂による以下の論考を再録した。

再録にあたっては初出誌の発行者である信濃史学会・長野県考古学会および御遺族の承諾を得た。

- 1 森鷗穂 1968 「神子柴型石斧をめぐっての試論」『信濃』20-4
pp.11-22 信濃史学会
- 2 森鷗穂 1970 「神子柴型石斧をめぐっての再論」『信濃』22-10
pp.156-172 信濃史学会
- 3 森鷗穂 1984 「使用破壊痕のある神子柴型石斧Ⅲ b型をめぐって」
『中部高地の考古学』III pp.20-25 長野県考古学会
- 4 森鷗穂 1967 「長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器」『信濃』19-4
pp.33-35 信濃史学会
- 5 森鷗穂 1986 「神子柴型尖頭器とその周辺の二、三の課題」『長野県考古学会誌』52
pp.46-48 長野県考古学会
- 6 森鷗穂 1980 「系列文化編年への試み」『編年』 pp.28-29
千曲川水系古代文化研究所

神子柴型石斧をめぐっての試論

森 嶋 稔

1

神子柴遺跡の発掘調査からすでに10年の歳月が流れようとしている。その間、この遺跡及び遺物をめぐって、これほど論議のまとになったものは、旧石器文化研究史の上ではない。まさにその意味においても、神子柴遺跡は記念碑的な存在といえよう。そしてその理解は、芹沢長介氏の細石器文化と縄文文化との間に介在する文化としての位置づけ、八幡一郎氏のいわゆる中石器文化を象徴する文化であるとの位置づけ、山内清男・佐藤達夫両氏のシベリア新石器文化の影響を受けて成立した、いわゆる縄文草創期直前に位置する文化であるとする理解等に一応代表される。

しかし、私は1967年4月、「信濃」(19巻4号)「長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器—その神子柴系文化の系譜試論(予報)」で、神子柴文化は単にある限られた一時期の文化でなく、いわば神子柴系文化と呼ばれるべきものであって、その系譜の内部には、神子柴型石斧が次第に形態変化を遂げながらいくつかの文化階層を内包している、いわば後期旧石器文化をつらぬいて縄文文化最初頭にまで及ぶ一系列の文化ではないか、と言及した。この階層のあり方には、一部に修正点も問題としてもつてはいるが、その主軸となる認識は変化していない。変化していないばかりか、さらにその把握を容易ならしめる資料が整いつつある。このほか、山内清男氏により、同氏等の見解の補説が、いわゆる「矢柄研磨器」の存在をめぐって展開された論考も行われているが、その資料も、いわば神子柴系文化が縄文草創期にも脈々と息きづいている有力な証拠として把握される。

神子柴系文化の研究史はいわば10年に満たないものであるが、それはまだ、資料が出そろっていない段階での彷徨のようなものであることはいうまでもない。しかし、その彷徨こそがまさしく焦点への道程である

ことも、また、真実であろう。近年、いわゆる神子柴系文化に属する遺跡及び遺物はかなり増加の一途をたどっている。追求し得た遺跡及び遺物の空間的ひろがりは、大陸をひとまず除外してみたとき、樺太・北海道・東北・北陸・中部・関東・東海・近畿の一部にまで及んでいる。

本稿では、それらをめぐり、その存在の時間的空間的あり方に迫る前に、身近かにある神子柴系文化に所属する遺跡及び遺物について概観し、その問題の方向を求めてみたい。

2

現在までの管見にのぼったいわゆる神子柴系文化に所属し神子柴型石斧を出土する遺跡は、長野県において見た限りでは15遺跡に及んでいる。その多くは、いまのところ東・北信地方に偏在するが、中・南信地方の神子柴系文化の遺跡は必ず近日中に遺跡数を増加するものと思っている。教示をいただければ幸いである。次にその一つについて概観してみることとする。

神子柴遺跡

多言を要しない。いくつかの報告と、いくつかの論説について先学に敬意を表し、ここではいわゆる神子柴系文化の標準遺跡としての認識を提示するにとどめたい。遺跡は上伊那郡南箕輪村神子柴で、天竜川段丘上に形成された丘陵上に位置し、展望にめぐまれている。石器製作に伴なう剝片の出土が限られていて、石器はあるプランをもって検出されたので、特殊遺跡として、平常生活址とは考えられていないのは、どの研究者も同様である。すでに調査者によって報告が行われているが、その石器組成の全容については、まだ正確な分析が行われていないのが実状である。したがって、神子柴遺跡の評価は全石器の組成が知見にのぼることがあるときには、若干の変動があるのではないか

と思考される。

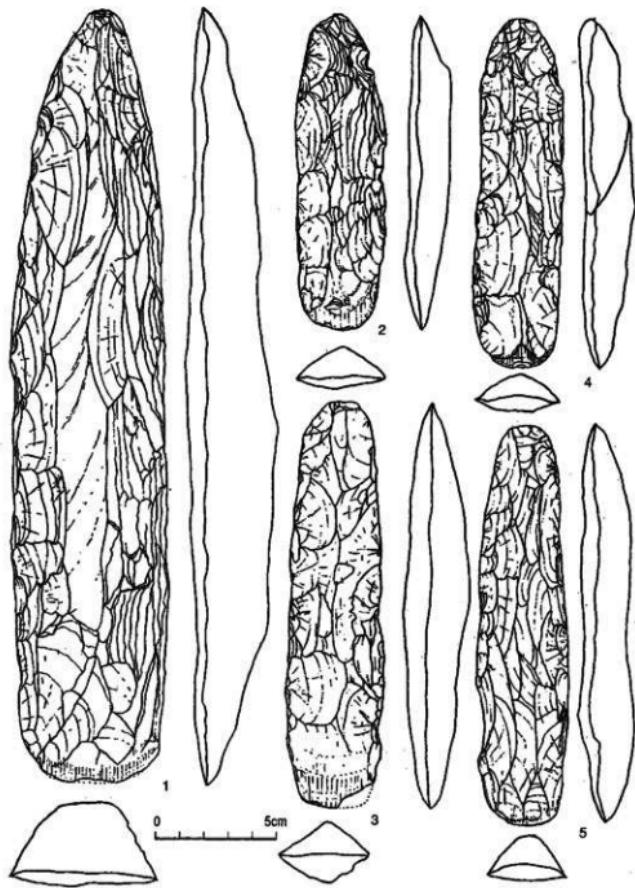
神子柴遺跡の遺物群中には土器はない。その報告によると、槍先形尖頭器16点（別に表掲資料7点）・石斧13点、石刃10点・搔器3点・石核7点・断面三角形の錐・胡瓜形磨石となっている。林茂樹氏の好意により実見したときの記録によると、槍先形尖頭器はいわゆる神子柴型尖頭器を主体として、若干の器形変化が認められ、一様ではない。また、石斧は神子柴型石斧と呼ばれるもので、純然たる丸のみ型石器が入っている。神子柴型石斧もやはり一様ではなく若干の器形変化がある。石核として把握されているものの中には、他の石器として認めた方がより妥当なものがあるように思われる。積極的に彫刻器と分類されるべき石器は認められないが、性格不明の石器もある。また、これら石器の製作作業によって打削されたと思われる多量の剝片は伴なっておらず、シャープなエッヂをもった石器と若干の剝片と石片があるのみである。概して石器は大形のものが多く、その組成は単純でなく、むしろ複雑である。石材にはかなり多様なものを用いている。

以上、神子柴遺跡を観察したが、この記述はまさに群盲象をなでのる感がある、と同時に兩純搔痒の感のあるのは免れない。後日、詳論を試みたいと思っている。

宮ノ入遺跡（第1図）

宮ノ入遺跡は長野市松代町大室にある。大室古墳群の北谷をつめて古墳地帯をぬけたあたりの谷状地形の緩斜面の小平地である。遺物は植林作業の際の小ピットから出たものであると採集者の宮本速雄氏は語っている。採集された遺物は、すべて神子柴型石斧のみであって、5点である。他に採集されたものはない。近くの同室町並付遺跡からは神子柴型尖頭器が採集されているが、単独出土であって同石斧を伴なっているかどうか明らかでない。宮ノ入から採集された神子柴型石斧はすべて頁岩製である。第1図1に示した石斧は全長32.1cm、最大幅6.4cmに及ぶもので、かなり大形の石器であり、断面は中央部においては台形を呈している。その製作技法は薄く大形の剝片を剥いていて、その調整は整っている。刃部はいわゆる片刃で、その正面形状は刃線はやや曲線を描くが、丸のみ状というほどでもない。刃部の一部のみに磨痕を認める。使用

痕と思われる擦痕も刃部に近い調整剝離面との境の稜に磨耗痕として観察される。刃部の平面形状は丸型である。2・4は小形の神子柴型石斧である。刃部の平面形状は丸形、2は刃部の正面形状の刃線が直線的で、4はやや丸のみ状をなしている。4はほぼ中央で折れているが、その折れ方は側面図で見れば裏面から背面にかけて斜めになっている。これは力の方向を示すものと理解してよいかと思う。刃部先端部に裏面方向から斜めに力が加ったものであろう。それがおそらくは器体保全力量を上回るために器体の破壊が起つたものであろう。おそらく、それがその石器使用の結果として起ったものとおもわれるが、器体に対する力の方向にまさに反対の方向が使用目的の方向である。その方向は打削としてのもののように器体の方向に対して平行方向でなく、ある角度をもっているのは、その機能が、打削具でなく、打削器具的なものであったことを暗示するのではないかと思われる。断面が常に背面に高く三角形ないし台形になるというのは、果してただ単に、その石器の製作上の癖、あるいは器体保持の安定のためだけの理解でとどまることができるであろうか。おそらく、この4の石器の破壊力の方向が示すように、力が器体の方向に対して斜めに加わるその力学的作用方向を経験的に理解し、偏平な断面でなく、その作用方向に厚い断面形に、いわば背面に高い三角形ないし台形にまさに合目的に製作されたものではあるまいか。当然打削の際に残る痕跡は曲線状のものであることを期待する機能的所産であることもいうまでもない。4は更にもう1つの理解を提供してくれる。それは、点線で示した器体内側に、ピッチ様の黒褐色塗料が塗布されていたのではないかと思われる状態が観察されることである。同石器の両端及び他の同様風化度を示す図示した石器にはみられない状態である。これはこの破壊というアクシデントを補修するためのものであろうか。他の石器には見られないということは、これらの石器が他の何かに装着された際にピッチ様接着塗料を塗布したものであるという理解を妨げるものであろう。そしてそれは、この4の器体の破壊を補修するためのものではないかとの理解に近づくものといえよう。断定的な見解として提示することは避けたいが、一応、この附着物は、この石器の補修用のもの



第1図 長野市大室・宮ノ入遺跡出土石器（1/2）
Fig. 1 Mikoshiba type axes from Miyanoiri site (1/2)

のと考えておきたい。そうすると、この石器は使用による破損後も補修されて使用されたことを物語るものであろう。いずれにか装着されたものでないとするとこの種の石器、いわば神子柴型石斧は単独で手に握られて使用されたものと理解され、その使用は曲線状痕跡を期待する打削具的なものではなかったかと認識される。3の中央部の断面はむしろ菱形に近い。正面刃部刃線は直線的で側面刃形はやや片刃的ではあるが、

始刃に近い。平面刃形は丸形でなくやや角ばる角型である。刃部は局部磨製にふさわしく研磨されている。5は5点の神子柴型石斧中もっとも正面刃部刃線が丸のみ状を呈している。平面刃部は丸形である。

宮ノ入遺跡の神子柴型石斧は1という例外はあるが、他の4点は概して小形である。1も例外でなく、その全体の平面形は両側縁はほぼ平行で狭長である。断面は台形、菱形のものが含まれている刃部平面形は丸形

が多く角型が1点ある。正面刃部刃線は丸のみ形のものが2点で、あとは直線に近い。刃部は表裏とも局部的に磨かれている。1は清水一男氏、2・4・5は宮本速雄氏、3は倉科小学校の所蔵である。調査の機会をつくりたいと思っている。

猪ノ平遺跡（第2図3）

猪ノ平遺跡は長野市塩崎猪ノ平にある。ほとんど長野市の南の端で更埴市に接する篠山の東斜面のテラス状地形上にあり、善光寺平を展望することのできる所である。近くに湧泉があり、かつて温泉であったところを塞止めて灌漑用の池がある。その池の底の泥をさらうときに検出されたと所蔵者の荒井藤四郎氏は語っている。頁岩製である。新しい欠けもあるがほぼ完形である。断面はあまり背稜の高くならない三角形で、刃部の平面形は丸形、正面刃部刃線は一部丸のみ状を呈している。平面形両側縁は平行しないで、基部に狭くなるようなフォルムをもっている。磨痕というよりも消耗痕といった方が適当である。それは背面のみに観察される。この石斧は長者久保遺跡にある報告書では打製石斧として分類している石器にほとんど大きなフォルムなども類似する石斧である。

池尻遺跡

更埴市大田原佐野山にある。俗称池尻をとって池尻遺跡と呼んでいる舌状台地上に位置する。『上代文化』(33巻)に所収されている池尻遺跡の報告の中に、実測図を収録してある縁泡片岩製の石斧がそれである。断面三角というよりも、かまぼこ形である。平面形はやや基部にしまる形態をもち、刃部刃線は丸形であるがやや寄っている。側面形は曲線を描いた片刃で、正面形における刃部刃線は直線状である。神子柴型石斧の一形態であろう。他に流済岩製の神子柴型尖頭器の基部破片が採集されている。

手見塚遺跡（第2図1）

上水内郡豊野町手見塚にある。手見塚は、千曲川のぞむ南曾峯丘陵上の小丘を指している。ここにある畠地のわきの石積みの中から村本鉄作氏によって採集されたものである。しかって手見塚遺跡は仮の遺跡名である。後日、この一帯で丘陵上の精査を行い、正確な位置を明らかにしたいと思っている。宮ノ入遺跡・猪ノ平遺跡などは、善光寺平の東縁部、南縁部に

位置するのに対して、手見塚遺跡は次のゴンボ山遺跡と並んで、北縁部に位置する。

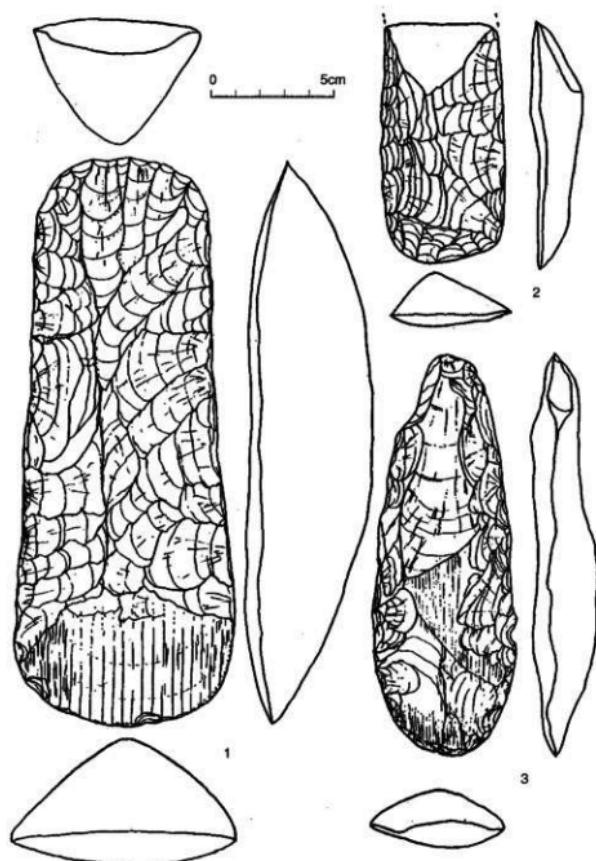
石器は玄武岩質の石材によっている。表面の風化が進んでいて、観察にかなりの時間を必要とした。神子柴遺跡出土のものに遜色のないフォルムをもっている。平面形はやや基部がしまり、刃部がやや広がる。平面右側縁がややしまり、曲線的に中央より基部よりに最少幅になるような調整が行われている。刃部の平面形は、丸形と角形の中間形をしている。刃部はよく研磨されている。正面刃部刃線は若干丸のみ状に弯曲するが直線状である。断面形が重厚な三角形であるので片刃である。全体を洗練された技法をもって打削した剝離痕が覆っている。この神子柴型石斧の典型ともいべき石斧のもう一つの特徴は基部にも刃部が作出してあって、その刃部は正に丸のみ状を呈しているという点である。したがって、両端に刃部をもつという形態の神子柴型石斧である。標準遺跡神子柴にもこうした石斧を見ることができる。側面形もかなり部厚く重厚で比較的重量がある。基部の丸のみ状刃部は研磨痕はない。消耗痕は風化のため観察できない。

ゴンボ山遺跡（第2図2）

ゴンボ山遺跡は手見塚遺跡が千曲川べりの丘陵上に位置するのに対して、西のいわゆる飯繩山につらなる中央山地の西斜面に面する小丘陵上に位置している。この石器もゴンボ山丘陵あたりといわれるのみでその出土は確実でない。上水内郡豊野ゴンボ山で、所蔵は遺跡すぐ南に鎮座する伊豆毛神社である。石材は硬質砂岩によって行われている。その調整打は美しく整っている。平面形における側縁は平行的で、刃部はむしろ角形であるのが特徴である。側面形は比較的偏平であるが、片刃であり、正面形における刃部刃線は直線的である。刃部に研磨痕も消耗痕も観察できないほど風化が進んでいる。器体中央で折れている。この石斧も斜めに折れており、先に見た宮ノ入遺跡例とちょうど反対の所見になっているが、ゴンボ山例は先刃部片でなく、基刃部片であろうかおそらく手見塚例のように両端に刃部をもつ石斧であったものと思われる。

立ヶ鼻遺跡（第3図1）

信濃路も野尻湖の周辺にくると、神子柴系文化の石器を出す遺跡は多く、しかもその遺跡には重要な所見



第2図 長野県上水内郡豊野町手兒塚(1), 同ゴンボ山(2), 長野市塩崎猪ノ平(3). 各遺跡出土
石器 (1/2)

Fig.2 Mikoshiba type axes (1/2) from Tegozuka site (1), Gonbozama site (2), and Inotaira site (3)

を提供してくれるものがある。

立ヶ鼻遺跡は上水内郡信濃町立ヶ鼻の湖底にある。石器採集者吉松雄一氏によると、立ヶ鼻から弁天島に向かうその湖底のことである。ここは岬状に湖へ突出した地形をもつところで、湖底における舌状台地端ということになる。湖にならなかった以前、あるいは減水期には陸地、とりわけ岬状に突出した地点といえるところである。

遺物はいまのところ図示したもの1点のみ採集されているに過ぎないが、該期の文化遺物が埋蔵されている可能性が大きい。頁岩質の石材によって製作されたかなりの重量のある石器である。いわゆる断面は三角形を呈し、平面形における刃部形態は中間形である。正面刃部刃線は直線状であり、片刃の石斧として、丸のみ状とはならない。平面形において、左側縁がやや器体内へ彎曲しており、右側縁はやや器体外へ曲線的

に張り出しているのが観察される。調整打は他の石器に比べると荒く側縁には階段状剥離が多く見られる。刃部の研磨は入念に行われており、背面刃部はふくよかな曲面をなしている。

小丸山遺跡（第3図2）

上水内郡信濃町柏原小丸山にある。小丸山は一茶記念堂などのある小丘陵で、この遺物はその丘陵の一部をけずり取り、その土（黄褐色火山灰土）を道路に敷いた際、その土の中から吉松雄一氏によって採集されたものであって、プライマリーな検出ではない。頁岩製である。背面の一部に節理面の皮を残してはいるが、かなり整った調整打を施している。平面形における右側縁がやや器体内に彎曲し、左側縁はやや外曲する。したがって、立ヶ鼻例とはちょうど反対のフォルムを形成している。正面形における刃部刃線はやや丸のみ状になるような曲線を見せる。刃部はほんの一部分表裏とも研磨されている。側面形はやや背面の方向に曲がるように調整されていて、力学的作用方向に一致するようなフォルムを見せている。正面形の刃部の刃線の形態は角形に近い。

砂間遺跡（第3図3）

砂間遺跡はすでに何回か紹介されていて、周知の遺跡である。野尻湖の砂間ヶ崎の一隅にあり、平常は遺跡は湖底である。

この遺跡から採集されている石器には、神子柴型尖頭器・有舌尖頭器があり、他にすづまりの先刃振器などが吉松雄一氏によって採集されているが、図示した神子柴型石斧は池田寅之助氏の採集になるものである。硬質砂岩質の石材によって製作されていて、石器全面にその節理痕が荒く残されている。平面形における左側縁はやや気持器体内に彎入し、右側縁はやや外曲する。平面形刃部刃線は丸形である。その正面形刃部刃線は明らかに丸のみ状を呈していて、刃部は局部的に入念に研磨されている。側面形は小丸山例と類似しており背面の方向に曲っている。調整打はやや荒く行われているが、全体として整っている。

この遺跡は次ぎの孤久保遺跡などと同様に生活址、剝片の採集も行われているが、砂間遺跡の石器組成の問題はまだ追求の途についたばかりである。土器の存在はいまだ確認されていないが、セットするか、ある

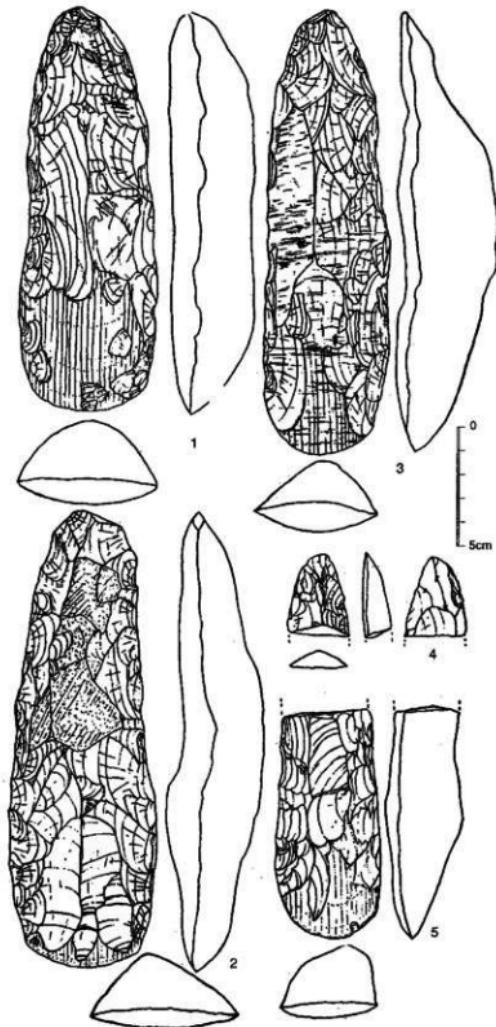
いはセットしないか、重要な枝路にある遺跡であるといえよう。

孤久保遺跡（第3図4・5）

孤久保遺跡は吉松雄一氏採集の資料を見て、故神田五六氏が昭和37年頃発掘調査を試みている。が、良好な包含層にあらず、若干の剝片を得たのみで終っている。40年晚秋、小林孚氏を主体に森嶋が担当して再度試み、上層から有舌尖頭器・神子柴型尖頭器を、下層ロームからは小坂タイプのナイフを主体とする石器群を検出した。42年夏、遺跡破壊の緊急調査が小林孚氏を主体にして行われ、上層から有舌尖頭器と隆起線文系土器の伴出を確認した。他に通常彫刻器・振器・礫器などがその組成に登場してきている。図示した神子柴型石斧は同遺跡から吉松雄一氏によって採集されたものであって、明らかにセットの一員であることは出土剝片からの所見からもいえる。他に基部のみのものがもう1点あり、都合3点となる。4は基部端片である。安山岩製で、小破片ながら美麗な調整痕が並んでいる。5は頁岩製である。ほぼ中央部でぶつり折れている。美しい調整打跡痕が並び、刃部には入念な研磨が表裏ともなされている。平面形刃部刃線は丸形である。正面形刃部刃線は直線状であり、片刃である。左右側縁はほぼ平行である。4・5の石器、そして図示していない基部のみのもう1点も加えて、孤久保遺跡の神子柴型石斧は、宮ノ入遺跡に見られたように、狭長で概して小型であることを指摘することができよう。孤久保遺跡の遺物群は神子柴系文化が繩文最初頭に突入したときの事情を物語っていることはいうまでもない。それは、神子柴型石斧・神子柴型尖頭器・有舌尖頭器・通常彫刻器・先刃振器・石刃・礫器そして隆起線文系土器を組成の内容としていることから明らかである。遺跡はテラス状地形上に位置している。

杉久保A遺跡

杉久保型ナイフの標準遺跡である。その表層の砂層から第三次調査の際に、先端部のみの粘板岩製の石斧が出土している。杉久保Aの表採資料中に、神子柴型尖頭器と有舌尖頭器、先刃振器があるが、あるいはこの系列の文化的石器群であるかもしれない。遺物の精査を行っていない現在、まだ確実なことはいえないが、一応ここで触れておくこととする。遺跡は湖底で、湖



第3図 長野県上水内郡信濃町野尻湖周辺遺跡出土石器（1/2）
1立ヶ鼻。2小丸山。3砂間。4・5孤久保

Fig.3 Mikoshiba type axes from the Lake Nojiri-ko area,
Tategahana site (1), Komaruyama site (2), Sunama site (3), and
Kitsunekubo site (4-5)

底の微地形で見ると、一つの舌状台地形上にある。なお、北海道には神子柴系セットに荒屋型彫刻器が加わっている場合があるが、この杉久保A遺跡の表探資料中にこの荒屋型彫刻器のあるのが注意される。

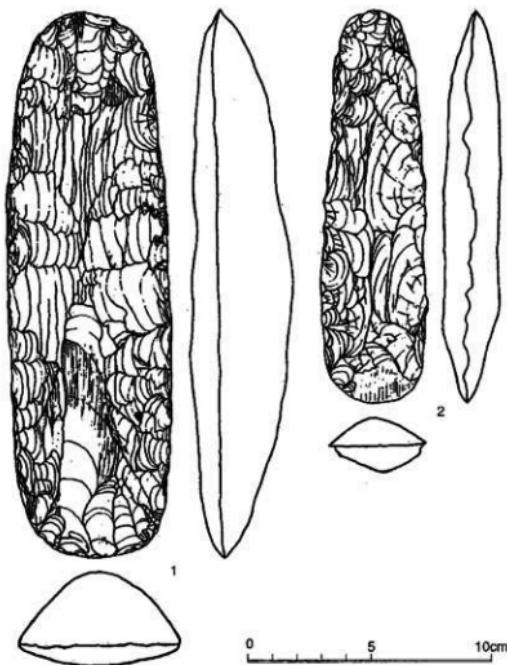
横倉遺跡

奥信濃の横倉遺跡は古く永峯光一氏によって報告された尖頭器を主体とする遺跡で、その報告書によると、千曲川左岸の段丘上に位置するものようである。当時、その尖頭器に横倉ポイントと型式名を与えていたが、その尖頭器は、いわゆる神子柴型尖頭器といわれる尖頭器の範疇に属するものである。そしてその報告書第5図15に示められている「ポイントを造り出す過程におけるフレイク」とされている石器は、神子柴型石斧の破損品ではあるまいか。玄武岩製の石器である。この遺跡も神子柴遺跡同様、その石器製作作業に伴う多量の剝片の存在がないので、やはり特殊遺跡として把握された。

唐沢B遺跡（第4図1）

菅平高原に眼を転ずる。標高1200m台のこの高原には、いくつかの旧石器文化遺跡が存在するが、とりわけ神子柴系文化の所産と認められる遺跡は現在2遺跡である。他に2箇所、神子柴型石斧こそまだ検出されていないが、有舌尖頭器・先刃搔器などが採集されている地点であるので、更に遺跡の増加があることは必至である。

唐沢B遺跡は小県郡真田町菅平にあり、唐沢の開析した残丘状の舌状台地上に位置している。第4図1に示した神子柴型石斧が1点と調整打の施されている剝片が2点、他に彫刻器が1点採集されている。地主の黒岩正美氏が同地を開拓の際に発見したもので、黒



第4図 長野県小県郡菅平・唐沢B(1), 菅平・小島沖(2)遺跡出土石器
Fig.4 Mikoshiba type axes from Karasawa B site (1), and Kojimaoki Site (2)

色腐植土表層の下に堆積している火山灰質ローム内に包含されていた石器である。頁岩製で、その残されている石器製作技法は整い、美しい剝離面を見せている。平面形における両側縁は、中央部でややふくらむ中太の形態を示し、刃部は丸形である。正面形の刃部刃線は直線状で、いわゆる断面三角形片刃である。刃部は意識的に研磨した様子は観察されないが、若干の磨耗を感じさせる。とりわけ平面形における左側縁のエッジには、明らかに使用による磨耗を見る事ができる。その所見からすれば、この石器は刃部端を使用することは当然として、なお、背面の断面三角形の稜に指をかけて器体を横に保持し、土を搔くような作業にも使用したのではないかと観察される。器体の外側に彎曲する例はすでに指摘してきたが、それはこうした機能を満たすための合目的的な配慮であったのであろうか。

他に彫刻器が採集されているが、長者久保遺跡採集の彫刻器に類似の1点がある。唐沢Bの示す時間的位置を暗示するものであろう。同遺跡はできるだけ近い時期に発掘調査を行い、その全容を明らかにする用意を進めている。

小島沖遺跡（第4図2）

同じく菅平高原の中央湿原にのぞむ台地上に位置している。昭和38年永峰光一氏によって試掘が行われたとのことである。その際参加した樋口昇一氏の教示によれば、ローム層中から有舌尖頭器及びその破損品が出土したとのことで、土器の出土は認められなかった様子である。

第4図2に示した石斧が小宮山茂樹氏によって採集されており、それが試掘の直接の動機となったものであるが、この石斧は定型的な神子柴型石斧ではない。

平面形は狭長であり、やや基部が向かってしまう形態を示している。刃部刃線は丸形である。断面はほぼ菱形に近く、正面形刃部刃線は直線状で、側面形における刃部はむしろ片刃でなく始刃状である。小瀬ヶ沢洞窟に例がある。おそらく土器を伴出するのではないかと思われる。

このほか、木曾地方の開田村柳又B遺跡にも神子柴型尖頭器が検出されているが、まだ神子柴型石斧は採集されていない。神子柴型尖頭器を出すが、神子柴型石斧が検出されないという遺跡はまだ多く存在するが、この問題は後日ふれることとする。

3

神子柴型石斧の解明は、もちろんひとり神子柴型石斧のみによって果されるものではない。それは神子柴系文化の文化組成を勤員して、その時間的空間的変容をとらえ、その基盤の上に立ってこそ投げかけることのできるアプローチであろう。そのアプローチは神子柴型石斧に投げかけるという問題提起でありながら、それはともなおさず神子柴系文化の全容を明らかにしようとする意欲であるにほかならない。

神子柴系石器組成をもなながら、有舌尖頭器という石器を加えて、さらに最初頭の土器、隆起線文系土器

をもつという内容を示す遺跡は次第に増加しつつある。それも2つの階級があるらしく、いわゆる「矢柄研磨器」と石錐という組み合わせがさらに加わる。もう1ステージ新しい階級が存在するらしく思われる。

神子柴系文化はその石器組成を媒介として、とりわけ神子柴型石斧の形態変化のあり方を中心にその系列化された文化の道程を明らかにすることができる部分が多いように思われる。形態の変化は機能の変化に対応するものである。その機能の変化は生産階段の変化に対応する。その生産階段の変化は時間的空間的変化に対応するものであろう。したがって、形態変化のあり方は、時間的、空間的変化に対応している座標の上で把握されてゆかれるべきものであろう。

本稿における資料と、明らかになっている文化組成を通観しただけでも、そうした座標上の焦点化は行うことができる可能性がある。平面形の変化、正面形の変化、側面形の変化、断面形の変化、石器製作上の技法の変化が、座標上の点として焦点化され、その焦点の移動が時間的、空間的変化として認識される方法を探してゆきたいと思っている。この試論は、そのための一つの方向づけをまさぐるものである。先学の教導を得、更に課題を展開してゆきたいと意図している。最後に資料を公開することを快く許容された諸氏に対し、厚く感謝の意を表したい。(1968・2・3)

神子柴型石斧をめぐっての再論

—その神子柴系文化の系譜について—

森 嶋 稔

1

『神子柴系文化』についての仮説を、試論の形で最初に提出したのは昭和42年4月の『信濃』であった。これは上和沢遺跡に検出された「神子柴型尖頭器」によせて、いわば尖頭器からのアプローチとして、その系譜について言及したものであった。更に1年後、昭和43年4月の『信濃』に、こんどは「神子柴型石斧」からのアプローチを描いてみた。この間、昭和42年の日本考古学協会総会の際に、「かつて夏島式土器と福荷台式土器がいつも伴出するから同時期のものであるとの認識が行なわれていたが、夏島貝塚ではっきり分離されたことがある。それから考えて、神子柴型石斧が隆線文系の土器を出す遺跡から検出されるからといって、それをセットと考えるのは性急過ぎるのではないか。表探ではあるが検査するとないというのが夏島貝塚での事のようになるのではないか。」(芹沢長介氏)との意見と、「土器を伴うものを一系の文化と考えるのはどうか。」(佐藤達夫氏)との意見が寄せられた。佐藤氏は昭和43年『史学雑誌』77-5の14ページで——森嶋稔氏は長野上和沢の石槍を紹介し、あわせて神子柴型文化を提唱される。しかし縄文文化に属するものを1系とするはどうであろうか。——と同様意見を公にしている。昭和42年山内清男氏は「矢柄研磨器について」を『金闇丈夫博士記念論文集——日本文化と南方文化——』にて発表し、從来からの神子柴型石斧・断面三角形の石錐・植刃の存在に加えて、矢柄研磨器をもって大陸の新石器文化と強く関連するものであるとの論証点をあげて、神子柴系石器文化をふくめた先土器文化を新石器文化の所産であるとの所論を開拓している。昭和43年10月日本考古学協会の大会が松本で開催された際に、1学生が芹沢長介氏の伝言を持って来て、田沢遺跡の調査に見学の機会をもたらした。田沢遺跡での現場ではいわゆる隆線文系の土器

に有舌尖頭器、木葉形尖頭器、先刃搔器、石錐などが、すでに検出されているとの教示を受け、その際も神子柴型石斧が「出ると思います」(森嶋)「どうですかね」(芹沢氏)ということになった。しかし2時間そこそこの遺跡での時間のうちに、裏面こそ調整打が行なわれていなかつたし、ラフな技術の形ではあったが、いわゆる断面三角形で片刃の石斧=神子柴型石斧が出土した。あまりにもラフな石器であったので速座にそれを認めるとはできなかつたが、遺跡でのノートには神子柴型石斧と記されている。遺跡から宿舎へ向い既に検出の資料をみせていただき、辞したが、昭和43年12月の『考古学ジャーナル』の「新潟県田沢遺跡の発掘調査予報」(芹沢長介・須藤隆)をみせていただくと——隆線文土器に伴う4点の小型打製片刃石斧を確認した——と報告されている。隆線文系土器と明らかなセットとの理解が行なわれたと注目されるのである。昭和43年に注意される論文がもう1つある。加藤晋平氏の「片刃石斧出現時期」「物質文化」11号である。この論文はシベリア沿海州の報告を用いたものとして出色で、ウスティ・ベラヤXIV層～XV層からは15000～10000年BPといわれる片刃石斧が検出されているとの事である。——片刃石斧としての機能をもつ手斧の開発は、エニセイ川流域では20000年前以前に遡るわけである。——中石器時代ではなく、さらに古く旧石器時代にまで遡ることが明らかになっている。一一との見解を提出している。昭和44年4月『考古学ジャーナル』1968年の考古学界の動向「旧石器文化」(芹沢長介氏)では、——このような遺跡を系譜だてて把握しようとする試みが(文献10<sup>[11]昭和40年
[12]昭和41年
[13]昭和42年
[14]昭和43年
[15]昭和44年</sup>森嶋)の論文である。長野県において確認された神子柴文化遺跡の数は現在5カ所であるが、これらはいくつかの階梯をふくんでいるのであって、後期旧石器時代が縄文時代初頭に及ぶ一系列の文化とみるべきではあるまいか

という。旧石器時代の終末から縄文時代の開始期につながる有舌尖頭器・片刃石斧・隆線文土器という三者の関連について、これからいよいよ興味が展開してくるであろう。——との論及が行なわれて来た。こうしたなかで、もう一度巨視的にまとまりを見せようとしたのが、昭和45年3月の森鶴穂・川上編の『昔平の古代文化』普研研究会刊の神子柴系文化へのアプローチである。その中で、①土器をもたない階段、②土器をもち有舌尖頭器をもつ階段、③土器をもち有舌尖頭器をもち、石鐵・矢柄研磨器をもつ階段の三階段に大きく分離した。

いわゆる神子柴系文化はすでに提出された大陸の事情をみると、バイカル湖沿岸から東の沿海州まで広く分布するらしく、西はバイカル地方からどのあたりにまで及んでいるかは明らかでない。文化は単純に西からの波及を考えると、バイカル地方のイサコヴォ遺跡は今の段階では原点となるのである（山内清男氏・佐藤達夫氏）が、はたしてどうであろうか。もちろん資料の絶対的な不足をかこつ現時点においては、どれもみな仮説以前の段階にとどまっていると言わざるを得ないが、イサコヴォを原点として、西から日本列島への波及と線を引き、したがってその時間的空間的距離の故に日本列島の該系列の文化がより新しくなくてはならない、との論理はあまりにも単純に過ぎるのでないだろうか。いわばそれは、いわゆる片刃の、日本列島では神子柴型石斧と呼ばれる石斧を標式とする文化が、どこを原点として時間的空間的座標を拡大して行き、日本列島やバイカル地方がその内でいかなる軌跡としてとらえるかにあるのであろう。もちろん仮説以前の段階ではあるが、その原点は以前に沿海州にあり、イサコヴォよりは神子柴の方が座標として求められるとの予想をもったとき、山内・佐藤仮説はどうなのであろうか。

神子柴型石斧の用語についてふれておきたい。局部磨製石斧→断面三角形の石斧→三面調整の石斧→神子柴型石斧→片刃石斧など研究の進展にともない、一つの研究史上の問題となる様相を呈しているが、用語は一つの概念を的確に表現するものがぞまれることは言うまでもない。石器の命名法が、機能的側面から行われるものより、形態的側面から行なわれるものの方

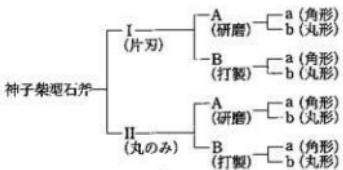
がよりティピカルであるとするならば、局部磨製の石斧では研磨が行なわれていないものは概念化することができない。断面三角、三面調整の石斧も、形態や製作技法からの命名であるが、断面が菱形になるもの、したがって四面調整になるものなどがあつて単純ではない。片刃石斧はかなりその点無難にみえるが、片刃石斧は概念として弥生式文化に属する特殊な磨製石斧を指向しているばかりか、いわゆる片刃石斧では包括することができない丸のみ状の刃部をもつものや、始刃状に近いものなどをその概念の中に吸収することはできない。各地における先史文化を論ずるとき、最初に注意された遺跡名を冠して呼ぶことによって、その特殊なメルクマールとなるべき石器や文化を記念しながら概念化することは、考古学の方法としても最も通常に行なわれて来たものではなかったろうか。更にそれが、いくつかの形態変化を持つ内容をしめしている場合、單一な形態をのみ呼ぶことによって概念化するよりは、より更に有効である。したがって神子柴型石斧をかたくなに使用して來たのであり、今後もそうした方向でこの用語を使用することが当然と考えている。大陸の事情とかなり明確に対応することがわかって來たこの神子柴系文化は、そうした上に立って日本列島でのあり方を明らかにして更に概念化しておくことが必要なではないだろうか。大陸との比較考古学的考察や論及によりクロスさせるのは、更に更に大陸の事情や日本列島の事情の該文化の認識が高められ深められてからで遅くないのであるまいか。

本稿で準備したのは、その理解をあたうかぎり日本列島の本州全域に及ぶようにした、その系譜についての試案である。日本列島での神子柴系文化の分布は、本州南半では未確認で、北半に濃密で、北海道にはかなり興味ある問題点を含みながら分布するようであり、それはサハリンに及んでいるようである。本稿で本州のみのあり方に限ったのは、ある部分ではできるだけ単純に把握し、それを出発点として理解を拡大した方がより真実に近寄れるのではないかと考へたからである。もう一つの理由は、北海道などの良好な資料が不足しているということである。本州でも落としてしまった良好な資料もあったのは、手許に文献などの基本資料の不足によるものであるので、後日、更に準備し

詳論を試みたいと考えている。先学の御教示を得ることでできれば幸いである。

2

神子柴型石斧は巨視的に見れば、平面形は狭長で、断面は三角形を基本とする石斧である。微視的にあるいは分類的に見れば、刃部の所見によるのが最もティビカルで、いわゆる片刃（I式）と丸のみ（II式）がある。そのIとIIには、それぞれ局部磨削の行なわれているもの（A式）と、行なわれていないもの、いわば打製のみのもの（B式）がある。またそのAとBにはそれぞれ刃部の平面形に角形（a式）と丸形（b式）がある。これを図式に表わすとつぎのようになる。



神子柴系文化と呼んでいる石器文化は、この神子柴型石斧を強くその石器組成の中にもっているばかりか、第1表にも明らかなように、その石器組成のなかには

強く、もう一つの石器、神子柴型尖頭器をもっているのである。これは学術調査の行なわれた遺跡からは通常組成として検出されているもので、この石器文化の特徴的な石器の一つである。そのプロポーションは偏平長大、基部寄りに最大幅があるので、基部の丸くなる、いわば横倉型尖頭器となるものもあるのである。調査された遺跡から常に組成とされて認識されてはいないが、神子柴系文化に基本的な特徴的な石器ではないかと思われるものに、円板状石核と磨石、いわば胡瓜磨石と呼ばれるものがある。これらをもって文化の基本的なベースを考えてよいのではないだろうか。この他ある時期には三角柱状の石錐や、矢柄研磨器などが組成する様であるし、もちろん有舌尖頭器は、重要な役割をはたしていることが明らかである。

——縄文文化に属するものを一系とするのはどうであろうか。——との意見を思い起こすことができる。第1表で見るごとく、神子柴系の石器組成をもちらんなら隆線文系の土器あるいは、爪形文系の土器などを組成する時期があるのは事実である。土器を伴わない長者久保は神子柴型石斧を模式として、前3000年と論じ、土器を伴うシャチノミ・ジュリンナの場合神子柴系の石器組成を無視し、単に矢柄研磨器のみを取り上げ、あるいは小瀬ヶ沢洞窟の場合も同様に神子柴系の石器

第1表 神子柴系文化各遺跡における遺物の組成
Table 1 Lithic assemblages from Mikoshiba-related sites

・遺跡名の頭に・あるものは調査の行なわれたもの、他は表掲
?あるかはつきりしないもの ×あるが教のはつきりしないもの

期	遺跡	遺物									石錐	器	石刃	円板状石核	磨石	石	矢柄研磨器	鉈	土器	
		神子柴型石斧	片刃	丸のみ	尖頭器	木葉形	有舌	標	三 角 柱	形 制 器										
VI	仁和院ノヨリ ・口	1 1 5	1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	新入向 板者又曾根 ・口	1 1 1	1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
V	古場 ・西 ・馬 ・小瀬ヶ沢 板者又曾根 ?	1 1 1 X X	1 1 1 X		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	昌見 ・小田 ・孤	1 1 2	1 X X		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
IV	杉立 ・村 ・長者久保	1 1	1 1		○	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	唐沢 B	1	2 3 3	1		○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○
I	神子柴 手	3 1	3 6	2	○	○	○	○	?	?	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

組成を意識の上にのせることなく、土器と断面三角の石錐や植刃のみをとり上げて、トロヤ第二層と比定しながら、したがって前2500年を遡り得ないと比較考古学的論理を展開しているのは基本的な資料のあつかいに誤認があるのではないだろうか。シャチノミ・ジユリンナの場合も、小瀬ヶ沢洞窟の場合も、神子柴系の石器組成がベースにあるのであって、断面三角の石錐も、植刃も、矢柄研磨器も、どうやらある時期を代表する、その基本的なベースの上に乗ってくるべき石器なのであるように思われるのである。そうした所見の上に立てみると、——縄文文化に属するものを一系とするはどうであろうか。——との忠告はなにかむなしいものに聞こえるのは、浅学のよくするまことに浅はかな、向うみずな行為であろうか。神子柴系の石器組成はある限られた時期に特徴的なのではなく、旧石器文化終末期から縄文文化最初頭までの一系列をなす文化であるものと考えられる。有舌尖頭器も、三角柱状石錐も矢柄研磨器、そのいわゆる神子柴系文化的去就のなかで息きづく舞台の小道具の一つであるのだと思うのである。文化はある特定の形式で代表される場合もあるが、すくなくとも石器文化はその石器組成を通じ、やがては文化組成へその認識をひそめながら、その文化組成の変容をみきわめ、それを再構成するのが斯学の方法であると考える。系統と分類とは身近かなところから積み上げ、比較考古学的な方法は、その論理と方法が間違わないよう駆使るべきものであることが自らも省るべきことであるように思われる。

本稿は神子柴型石斧を中心にしながら、できる限りその石器組成を基底において考えてゆくように努力したいと思っている。

3

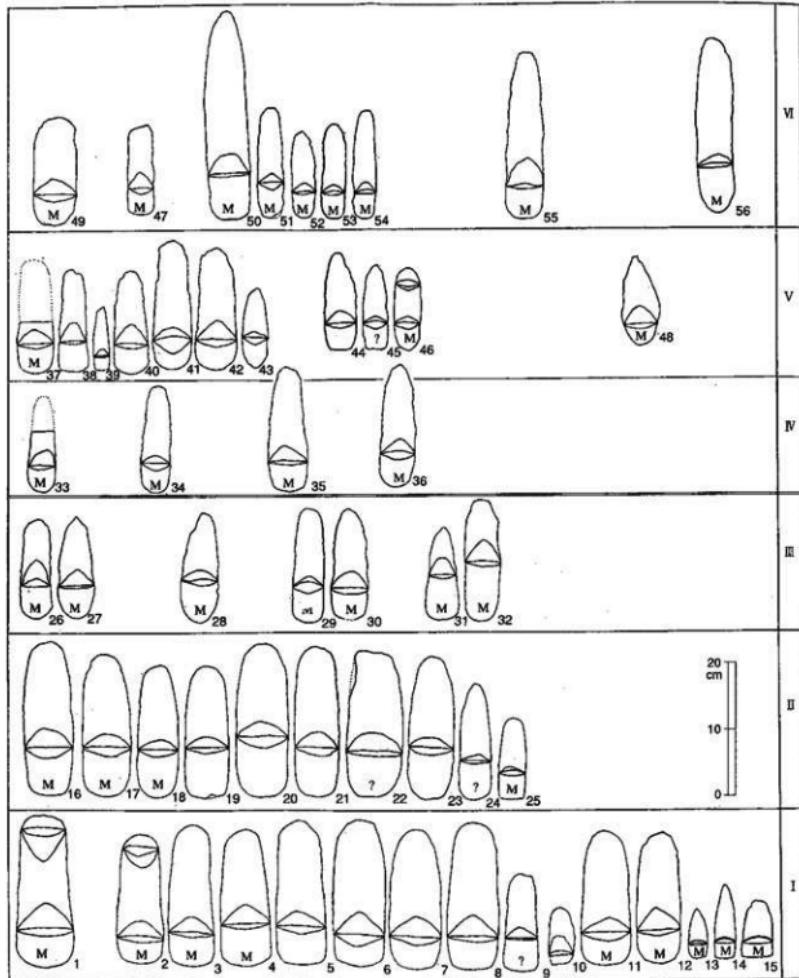
(第Ⅰ期)

日本列島で現在までの所、最も古い様相を呈していると思われる神子柴系の石器組成は神子柴遺跡のセットであると考えている。石器セットの量的なあるいは質的な中心は、神子柴型石斧と神子柴型尖頭器であって、石斧群は第1図に示したように、かなりなバラエティを示し、尖頭器群も同様な様相を呈している。石刃は円板状石核から削離されたものであるようで、

打面がいずれも小さく、しかもかなり大形である。石斧も尖頭器も、大形ぞろいで、よく整った技法をみることができる。三角柱状石錐と考えてよい三角柱状のグレーヴァースポール様の石器が一点あるが、小瀬ヶ沢や日向洞穴のような二次調整が行なわれていないもので、一次的な剥離面が三面通っている。単なる特殊な剥片と言ないので注意したい。彫刻器も同様で、黒曜石製の特殊な彫刻刀面をもつ剥片であるが、彫刻器と認めるには若干問題が残るかもしれない。神子柴セットの内で他に重要な石器は胡瓜形の磨石である。神子柴型石斧の研磨痕を詳細に検討してみると横方向が斜方向のものが圧倒的で、曲面をなし、それは凸面ばかりでなく凹面にも研磨が行なわれているのである。片手に石斧を保持し、片手に胡瓜形磨石を持って研磨するという方法がとられており、そのために中央の凹んだほそながい胡瓜形の磨石が必然的に開発されたものであろうと考えて間違いないであろう。他に石刃を素材とする先刃搔器と側刃搔器がある。またこの神子柴セットのなかで、從来からあまり注意されていなかったものに、更に両面石器がある。径10cm内外の平面形は鬼胡桃状で、断面形は凸レンズ状で握斧様の石器である。他に黒曜石塊を用いた撲器様の石器があるので注意しておきたい。以上が、神子柴セットのあらましであるが、正式報告が出されない現在にあっては、隔離振序の感があるが、一まずこれで正式報告に期待したい。

遺跡は、段丘上の小丘陵上の頂央より北東に若干さがった地点であり、石器はあるプランの周上に並置されたように出土していて他の遺構はなかった。シャープな刃部と大型石器、そしてこの配列が墳墓説やデボ説の根拠となっているが、生活のセット——そろいと製作時の剥片がないことがむしろ積極的に生活的であると考えているがいかがであろうか。

神子柴型石斧についてふれてみたい。片刃のI式が12点に対し純然たる丸のみII式は2点である。このうち第1図に見るよう、2はその基部に丸のみ状の刃部を作出しており、これが、研磨されていない丸のみとなっている。平面形のプロポーションをみるととんぐり形と中央より基部寄りややくびれる形の2つがある。刃部で見れば角形と丸形があり、I式で研磨Aと



第1図 神子柴型石斧の編年

1手見塚、2~15神子柴、16~25唐沢B、26~27長者久保、28猪ノ平、29~30立ヶ鼻、31~32杉村、33狐久保、34小島沖、35砂間、36小丸山、37~43小瀬ヶ沢、44~46西又、47シャチノミジュリンナ、48市場板、49日向洞穴、50~54宮ノ入、55柏崎、56仁礼

Fig.1 Chronology of Mikoshiba-type axes

Tegozuka (1), Mikoshiba (2~15), Karasawa B (16~25), Chojakubo (26~27), Inotaira (28), Tategahana (29~30), Sugimura (31, 32), Kitsunekubo (33), Kojimaoki (34), Sunama (35), Komaruyama (36), Kosegasawa-cave (37~43), Nishimata (44~46), Shiyanomijurinna (47), Ichibazaka (48), Hinata-cave (49), Miyanoiri (50~54), Kashiwazaki (55), Nilai (56)

打製Bとはその量は相半ばしている。Aは角形aと丸形bでは相半ばし、打製ではaに限られる。II式ではAはaに限られ、Bはbである。

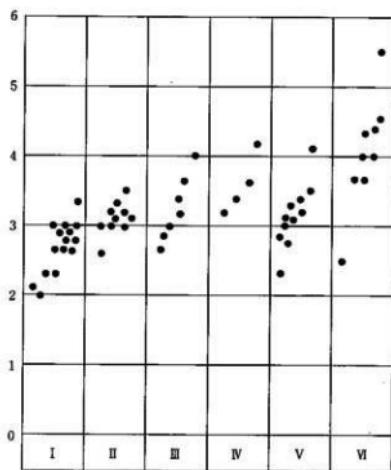
この時期Ⅰ期として把握したいがⅠ期の神子柴石斧は、第2表・第2図に見ることができるよう、最大幅に対する長さの比が2~3.3で平均2.57である。どれも、山広でずんぐり形であることが明らかである。

またこの時期は神子柴型石斧の量が多く、打製のものと、研磨の行なわれたものとでは相半ばすることが特徴であろう。

第1図の1に図示した神子柴型石斧は長野県手児塚遺跡の表採資料である。玄武岩製の優品であるが、風化がかなり進行している。刃部は両端にあり、主要刃部(図中下端)はI・A・aであり基部刃の部(図中上端)はII・B・bである。両端に刃部を持つのは、神子柴遺跡の付表2の2と同様であるが、そのプロポーションははるかに手児塚例が大きい。しかしそれはまったくの相似形であって、あらゆる点で相似関係にあるといえる。手児塚遺跡は神子柴遺跡とほとんどどうりふたつと言えるような立場上にあり、表採資料とは言え、その遺跡のあり方をうかがい知ることのできるものである。神子柴期より、あるいはワンステップ早い時期が成立するかもしれない予感をもつが、現段階ではまったく資料の不足でこれ以上の普及をすることができない。

I期の特徴としては次ぎのものがある。①石器が大型で重量感があること。②袖子柴型石斧は大形で最大

幅に対する長さの比はおよそ2.5でずんぐり型で幅の広いものが多い。③平面形にややくびれ部があるものがあり、打製の丸のみを基部端に作出するものがある。④純然たる丸のみが存在する。⑤刃部平面形は角形が多い。⑥打製のもの、研磨痕のあるものは相なかばする。⑦石器組成の基本形がそろっている。⑧土器は伴っていない。



第2図 各期における神子柴型石斧の最大幅に対する長さの比分布

Fig.2 Length to width ratios of Mikoshiba-type axes by periods

第2表 各期における神子崎型石斧の最大幅に対する長さの比

第2表 各期における条件集まり
Table 2 Original data for Fig. 2

Original data for Fig. 2												平均
VI	49	50	51	52	53	54	55	56				4.04
	2.5	5.5	4.0	3.6	4.0	4.3	4.4	4.5				
V	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	48	3.20
	3.0?	3.4	4.1	3.1	3.3	2.9	3.5	2.8	3.2	3.1	2.3	
IV	33	34	35	36								3.61
	3.4?	3.7	3.2	4.2								
III	26	27	28	29	30	31	32					3.23
	3.6	3.0	2.9	4.0	3.2	2.7	3.4					
II	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25		3.02
	3.2	3.0	3.2	3.0	3.0	3.5	2.6	3.1	3.1	3.4		
I	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	2.57
	2.6	2.7	2.9	2.7	2.9	3.0	2.3	3.0	2.8	2.1	2.7	

〔第II期〕

第II期として分離したのは長野県小県郡真田唐沢B遺跡の石器組成のそれである。この石器組成は神子柴型石斧10、神子柴型尖頭器3、半月形石器1、石刃2、彫刻器1、搔器2、磨石2、剝片が9である。遺跡は神子柴遺跡とほとんど異なることない丘陵で、遺物出土点もまったく同様な条件の所にある。神子柴では石器の配列という遺構であったが、唐沢Bでは、梢円形にならぶ石器配列とピット、そして焼石炉の存在が確認された。

石器の大きさは神子柴期のI期より若干小さめで、20数cmに及ぶ尖頭器などなく、小型化している。石器組成も若干縮小しているが、確実な彫刻器が組成するようになる。しかし基本的のセットはI期と変わらず神子柴石斧がその主体を示しているのである。特徴的な胡瓜形磨石もセットしており研磨器が存在している。

神子柴型石斧についてみると、I・A・aが1点、I・A・bが2点、I・B・aの3点、I・B・bが3点である。又II・A・aのいわば丸のみが一点検出されている。I式ではAよりBが多い、いわば打製のものが多いのである。aよりbが多く、刃部は丸形へと指向していく。平面のプロポーションでくびれをしめるものが、第1図16の右側縁のみとなり、これも後退の気配をみせる。断面形も両凸レンズ状のもの、かまぼこ状のものなどがみられるが、やはり基本形は三角形であろう。25は神子柴例の15とまったく同形の丸のみで、その技術的系譜は歴然たるものがある。第2表と第2図に見るように、最大幅に対する長さの比は2.6から3.5の間にあって、平均は3.02である。I期が平均2.57であることを見るとII期の神子柴型石斧はそのプロポーションが狭長になる方向を指してるように思われる。

II期の特徴としては次ぎのようにまとめることができる。
①石器が大形で、重量感があること。しかしI期のものよりやや小形化する感がある。
②神子柴型石斧は大形で、最大幅に対する長さの比はおよそ3.0で、I期同様ずんぐり形であるが、I期よりはやや狭長になる。
③平面形にくびれ部のあるものがない。
④純然たる丸のみが存在する。
⑤刃部平面形は丸形が多くなるような指向がみえる。
⑥打製のものがやや多い。
⑦

石器組成の基本形はそろっている。
⑧土器は伴っていない。

〔第III期〕

この期として分離する代表的な遺跡は、長者久保遺跡である。長者久保のセットがそのままそのすべてであるかについては明らかにならないが、そのセットの中に欠けるものがあったとしても、その全容を知ることがあるいはできないにしても、そのあり方を知ることは可能である。すでに報告されているものを検討してみたい。神子柴型石斧が2点、I・A・b(27)とII・A・b(26)がそれである。神子柴型尖頭器、木葉状尖頭器、先刃、側刃、周刈搔器があり、彫刻器がある。石刃は大形のものではなく、概して中形である。長者久保の石器群の特徴は、II期の唐沢B例からみるとそれはすべて更に小形化の方向で把握される。神子柴型石斧は第1図でみることができるように、平均の3分の2に小さくなり、各石器もそれは同様な現象を呈している。長者久保期、III期は彫刻器の増加が現象している。その内容は斜角形彫刻器(a類)とb類といわれる主要削離面から直角な調整打面を作り、それを基点として斜角な彫刻刀面を作る彫刻器がある。かつて「上ヶ屋型彫刻器をめぐって」(『信濃』)という小論を書いたとき、この技法の系譜についてふれ、神山型彫刻器→上ヶ屋型彫刻器→荒屋型彫刻器という流れを提案したことがあるが、そのメルクマールとなったのはその打面調整の技法・彫刻刀面の作出技法・その使用痕についての所見であった。その系譜における一つのポイントとなる杉久保II群の彫刻器の例とも同通する内容を持つものであることは注意される。いずれこのIII期には、彫刻器の増加が、現象することは注目される一つのあり方であろう。

神子柴型石斧についてふれたい。神子柴型石斧は2例であるが、第1図の27は先に上げたようにI・A・bであるが、その報告によれば、研磨は表面刃部のほんの小部分であるらしく、その平面形は縄文中期の打製石斧を思わせるものがある。調整はきわめて荒っぽく一部に石材の節理面を利用されている。26はII・A・bでその刃部はアヒルの口ばしのように上反りしている。表面の研磨は継ぎにかなり入念に行われている様

子である。II期に比べかなり小形化しており、第2表でみると3.0及び3.6となり平均3.3で、その最大幅に対する長さの比はなお一層狭長になる傾向を示していることがわかる。

28は長野県猪ノ平遺跡の採集品で長者久保例の27とプロポーションや石器の所見に著しい共通点がある。29・30は野尻湖立ヶ鼻である。大形石刃を伴って採集されており、I・A・aである。平面形に若干くびれ部をみることができる。29はどちらかと言えば26例を共通する丸のみであろうか。31・32は藤森栄一氏がかつて「歷青賀石器」としてその報告を戦前に行なった中右器の様相としての把握をした一群であるが、ここには神子柴型石斧が2点出土しており、大形石刃と胡瓜磨石を伴っている。新潟県北蒲原郡笛岡村杉遺跡の採集品である。大木金平氏旧蔵と書かれた古いが極めて適確な実測図と拓本を藤森栄一氏の御好意でお借りしたものである。I・A・a (31) と I・A・b (32) であるが32はやや丸みの状に刃部は反るようである。31は平面形がややくびれる様相が観察される。長者久保をのぞいては採集資料であるので、明確なことは言えないが、一応石器セットそのプロポーションから考えてこの期として大過ないものと思われる。付表3・4をみると神子柴型石斧の最大幅に対する長さの比が2.7から4.0まで平均は3.25である。II期からみて更にその神子柴型石斧の狭長性への方向は強く現象していると思ってよいのではないだろうか。

III期をまとめてみると、次のことが明らかである。

①大形の石器からだいに小形化の傾向を著しく認めることができる。②神子柴型石斧は小形化して来て、更に狭長性3.25がはっきりして来る。③丸のみは角形から丸形に変化しているが存在する。④刃部平面形は丸形が基本形となっている。⑤27・28はほんのわずか研磨痕を残すのみであるが、他は全部研磨が行なわれたものである。⑥石器組成のなかに、彫刻器がかなりの量入ってくる。⑦土器は伴っていない。

II期とIII期の間にはもう一期の存在があるかもしれない。神子柴型石斧の小形化があまりにも著しいからである。土器を伴わないのはこのIII期までである。I → II → IIIにしたがって石器組成の中心は、神子柴型石斧、神子柴型尖頭器から量的にも質的にもなれ、彫

刻器や他の尖頭器・石刃などにその中心がずれて行く傾向を認めざるを得ない。大形の神子柴型尖頭器も小形化の傾向を認めることができるが、このことについてはかつて、昭和42年の4月『信濃』に、「……上利沢の尖頭器」を書いて一つの展望を求めておいた。それは偏平長大の神子柴型尖頭器が、そのプロポーションのため儀器や、副葬品として使用されないことを目的として製作されたものであるごとき理解によって、遺跡の性格まで考えを指向するような傾向をみたときに、それは、いわばその偏平長大の尖頭器も、確実な使用を目的とした、機能を目的とした利器であるはずであるとの考え方から、その着柄について一案を出したものであった。それは柄部によるはさみこみとアスファルトによる接着であった。そこから当然でてくると思われる技法の系譜として一つの仮説を提出しておいたのである。①はさみこみによる器体の保持→②先端部の折れの補修による有舌尖頭器の発生(組み合わせ石器の発生)→大形器体の製作から小形化し、やがて両面加工の植刃の並列と有舌尖頭器の組み合せによる利器の発生、以上がそれであった。現段階でもその基本的な考えには変更がない。III期からIV期への発展はそうした利器の製作技法上の変革が内在していると考えてよいのではないか。それはもう一つの変革と対応する事件であろうか。それはIII期までは土器の共伴がなく、IV期に入ると土器の共伴があるということである。

[IV期]

野尻湖畔・狐久保遺跡、新潟県・田沢遺跡などがこの期の代表的な遺跡である。IV期のメルクマールとなるものは、神子柴系石器組成に有舌尖頭器が加わることと、もう一つの大きな変革は現時点で最古の土器と考えられている隆線文系土器が文化組成の一員として加わることである。

狐久保遺跡の組成についてみてみたい。第1図に所載した33の半次の神子柴型石斧の他に、ごく小形の定型の神子柴型石斧があり、更に基部破片が2点あるので計4点である。かなりしっかりした安山岩製の神子柴型尖頭器があり、木葉形のラフな尖頭器が少量と有舌尖頭器がある。小形の彫刻器があり、先刃彫器があ

り、表探資料には側刃搔器もある。更に中形の石刃がある。この他に直方柱状の穂器がある。伴出した土器はいわゆる隆線文土器である。すべて破片であるが、①口縁部に横走する粘土紐のはりつけによる隆線の上をジグザグな笠状工具による刻み目を有するもの、②口縁部に横走する粘土紐のはりつけによる隆線状を並列的な刻み目をつけたもの、③細いみみずばれ状の隆線をもつもの、④無文のもの。この4種の土器片は、もとより4種の土器の存在を指しているのではなく、①②③の組み合わせの一體の土器、④⑤の組み合わせの一體の土器、あるいは①②③④を組み合わせた一體の土器との認識が正しいことは言うまでもない。

有舌尖頭器は第一次・第二次調査を合わせるとかなりの量の検出がある。詳細な分類を行なっていないがすくなくとも二形態あり、芹沢編年でいう第II群の21に近い例と、23に近い例が認められる。北海道の立川遺跡例になるもので、若干問題があとに残りそうである。神子柴型石斧はI・A・bにあたるもののが刃部のわかっているもの2点であるが、いわゆる丸のみのII式に属するものは検出されていない。

田沢遺跡についてその詳報のない現在多くの誤りをおかすやもしれないが、若干その組成についてふれてみたい。それは第1表を見るようなものであるが、神子柴型石斧は4点でI・Bのaとbに属するものであるらしい。神子柴型尖頭器は確実な資料は明らかでないが、木葉状尖頭器とされているものの中にこれがあるものと考えている。また木葉状尖頭器について、有舌尖頭器がある。側刃が歯齒状になるもので柄状あるいは舌状に張り出す舌部がある。芹沢編年ではこのかえしのない有舌尖頭器は所属する所がないがIII群の小瀬ヶ沢期にもっとも近いであろうか。三角柱状の石錐はないが、つまみのある石錐がある。他によく整った先刃搔器がある。以上が速報にふれられている石器組成である。土器は①口縁部に横走する粘土紐のはりつけによる隆線上を、笠状工具による刻み目をほどこしたもの、②ほそい隆線がジグザク状になるもの、③無文のものである。④⑤の組み合わせ、⑥⑦の組み合わせの考えられる土器である。田沢遺跡の隆線文土器は、孤久保遺跡のそれとも最も近い関係にあるようである。

この二つの調査が行なわれた遺跡の他に、表探ではあるが、かなりその組成のはっきりしている遺跡に野尻湖底の砂間遺跡がある。第1図の35に示したのが神子柴型石斧であるが、それはI・A・bに属するものである。他に神子柴型尖頭器・木葉形尖頭器・有舌尖頭器・先刃搔器・側面刃搔器がある。おそらく湖底の表探という条件のもとでは土器片は採集できなかつたと思われるが、このIV期に属する隆線文土器がセットしていたと考えてよいのではないだろうか。有舌尖頭器は芹沢編年の中期の上黒岩・柳又などに検出される柳又尖頭器がそれである。この他に野尻湖に近い小丸山遺跡から検出されたという神子柴型石斧(36)もあるが、これはI・A・aである。菅平高原の小島沖遺跡は2点の神子柴型石斧(34)があるが、1点はI・A・aでもう1点はI・A・bである。この遺跡からも有舌尖頭器が出土していると言われている。土器や他の石器はまだ検出されていないが一応この期と考えてよいものと思われる。

神子柴型石斧についてみたい。この期の資料は確実な全容について知れる資料は少ないのでおよそそのあり方を知るのみである。しかし、一応第2表を見るように、最大幅に対する長さの比は3.2から4.2に分布し、その平均は3.6である。田沢例を速報の写真から比を出すとおよそ3.9である。III期の比が3.25であることからみると更にその狭長性は進められていると言えよう。孤久保・田沢側に見るように石器の小形化は更に行なわれ、石斧の石器組成内にしめる割合は、同様に落ちて来ている。有舌尖頭器の出現による量の変化であろうか。

遺跡の立地についてふれてみたい。I・II・III期とも丘陵上が多く、かなりかたくなにそれを守っているようである。III期の立ヶ鼻例のように湖底ではあるが、湖底にしづんでいる丘陵上地形の上に遺跡が立地していることを考えると、先に見たように、かなりその立地はIII期までは丘陵上といふ保守的な立地であることができるが、IV期の孤久保は山ふところの斜面のテラスで、田沢は段丘上、砂間は岩陰状のところで、小島沖は丘陵上と、その立地にかなりのヴァラエティを見ることができる。それは何に原因するのであろうか。

IV期を総括すると、①石器は更に小形化する。②神

子柴型石斧は更に小形化し狭長性をみることができ、その比は3.61である。③確実な丸のみと分類できるものはなくなるのではないだろうか。④刃部は丸形が基本形である。⑤すべて研磨するのが基本である。⑥石器組成の中に有舌尖頭器が入ってくる。彫刻器の量は限少し、わずかに残る。⑦土器（隆線文系土器）が伴う。⑧石鐵・矢柄研磨器は組成しない。

有舌尖頭器の組成について若干考えてみたい。荒屋細石刃文化に伴うエンドブレードがやがて立川遺跡における有舌尖頭器に変化するものと考えることは、両遺跡における荒屋型彫刻器の存在からその密着度を考慮し可能であろうが、神子柴系文化に属する狐久保遺跡の有舌尖頭器が立川例に近いことを考えると、有舌尖頭器と言う刺激が、細石刃文化からのものであるのか、あるいは、神子柴系文化からのものであるのか、あるいはまだ異なる系列を容認すべきであるのか、重要な課題であるように思うのである。土器を伴うことのない立川と、土器を伴う狐久保との違いは、各系間における発展段階をおさえることになるのかは、この両者が並列的であるか、あるいはその並列に多少の前後関係があるかによって明らかになるものがあろう。今回はこの段階でふみとどまり、その問題を今後に期したいと思うが、有舌尖頭器における芹沢編年のI群にあたる鳴鹿遺跡・本ノ木遺跡などの立川以前の有舌尖頭器としたものについての処遇はいかがなものであろうか。

III期とIV期の間に土器を伴わない有舌尖頭器を組成しているという時期があるであろうか。今後の研究にまつところが大きい。

隆線文系土器の側からこれをのぞいておくのも今後の方向の為には有効である。隆線文系の土器はどうやらかなり息の長かった土器であるように思われ、そのこまかに編年も若干試みられている。それらが更に精密になった上で、考えて見るのが最も間違うことがないが、たとえば福井洞窟遺跡の細石刃文化に伴った隆線文土器、いわゆる神子柴系文化に伴った隆線文土器、神子柴系の石器組成を伴わずに有舌尖頭器と隆線文土器という標識で存在するもの（これは問題が残るが）など、その時間的・空間的関係について、石器組成の内容の変容から、またその様式的変容から、あるいは

その土器自体の変容やその組成から、そしてもちろん層位学的所見から明らかにすべきものであろう。

〔V期〕

V期の標的な事件は、石鐵の出現である。その基底には、どうやら力弱った神子柴型石斧や、神子柴型尖頭器があり、有舌尖頭器はむしろ主要な役割りを果すことになったかもしれない。石鐵の出現と対応する矢柄研磨器も組成し注目されるのがこの期である。この期の遺跡にはすでに調査されたものが多い。小瀬ヶ沢洞窟、木曾・西又、同・小馬背遺跡、高知・不動岩洞窟などである。

小瀬ヶ沢洞窟はその出土資料を検討してみると第3層と第4層にわたって神子柴系文化に属する遺物群が出土しているのであるが、その間にはかなり不明な点も多い。洞窟遺跡調査の先がけとなったこの調査には、調査方法上の問題もあったかもしれないが、このおびただしい遺物群はあるいはもっと細分化して把握できるものであったかもしれない。ここでは一応4層の資料を抽出してみた。遺物群はもっともヴァラエティに富んでいる。神子柴型石斧・神子柴型尖頭器・半月型石器・木葉型尖頭器・有舌尖頭器植刃・三角柱状石筆・つまみのある石錐・彫刻器・先刃・側刃・周刃・抉入抉搔器・中形石刃・両面石器・石鐵・そして隆線文土器などである。この石器組成をみるとV期よりも前の期に分離できる内容のものがふくまれていそうに思われるのであるが、ここでは一様にあつかっておきたい。しかし、洞窟遺跡は長時間の滞在と集中性が高いことから考えれば、これがある限定した一時期であるとすることもあり得るかもしれない。

有舌尖頭器は芹沢編年というIII群に属するものである。とかく問題の定着しない植刃があり、三角柱状の石錐は植刃と共に大陸と強く関連するものであるとの指摘が山内学派から行なわれた。多様な搔器と石鐵が出現するのである。土器は隆線文土器の他に多彩な土器が検出されているが、このことについては現段階では理解の及ばないことであり、小瀬ヶ沢洞窟が一人孤立の状態から考えれば、層位の搅乱によるものであるかもしれない。小瀬ヶ沢洞窟の神子柴型石斧は総数100点内外であるらしい。そのすべてにはもちろんふれる

ことはできないが報告書に図示されたうち4層のものに限定して第1図へは所収した。I・A・b、I・B・a、I・B・bで、圧倒的に打製の丸形が多い。丸のみは一点あって39に示したものである。

小馬背・西又は木曾開田高原で同じ段丘上に遺跡は立地している。この遺跡は、昭和43年及び44年に調査されたもので、有舌尖頭器の柳又尖頭器を採集できていた遺跡であった。柳又遺跡が調査されてからすでに10年の歳月が流れようとしているが、この両遺跡はその柳又期におけるいわば有舌尖頭器を主体とする文化の文化組成を明らかにしようとするものであった。それはすでに柳又遺跡では有舌尖頭器に隆線文土器がセットして注目されていたが、シャチノミ・ジュリンナではその柳又尖頭器に、神子柴型石斧を更にセットしていることが明らかになったので、この両遺跡はその問題点を一挙に明らかにしようとしたのである。この両遺跡は有舌尖頭器と非常にラフにはなって来ているが神子柴型尖頭器そして基部丸形の横倉尖頭器などを主体としており、小馬背では1点、西又では3点の神子柴型石斧を検出したのである。柳又尖頭器を組成する遺跡は神子柴系列に属する遺跡ではないかと多年考えていたことはやはり事実のように思えて来たのである。柳又遺跡を4年間にわたる調査のちたびたび訪れては、神子柴型石斧の存在をたしかめる資料を採集できないかと注意して來たが、柳又遺跡では検出することができなかつたのはどうしてであろうか。それは①時間的なずれがどちらかにあり、すでに神子柴型石斧を石器組成から失ってしまったからであるか、②当然組成するが、未検出であるかのいずれかであろう。小馬背・西又両遺跡からは隆線文土器が出土しているが、口縁に横走するかなり太めの隆縁がはられている。刻み目は明確にならない。小馬背では縦走するものもあるようである。西又例で見るのは、隆線の粘土紐ははげ落ちて明らかでなく、口唇部にななめの刻み目の行なわれるものである。禾本科系のスサが入る特殊は柳又をはじめとする、上黒岩など柳又尖頭器を特徴的に出す遺跡の隆線文土器の通常性であるように思われる。

小馬背・西又とも少量の石鐵を組成している。これは柳又遺跡においても同様であったが、この期の大き

な特徴である。剥片鐵のようなものからかなり入念な製作になるものや、ノン・シンメトリカルなものまである。柳又・小馬背・西又ではかなり精査したが、矢柄研磨器は検出できなかった。

ラフな尖頭器状のこぶし大の両面調整の石器があるが、これは握斧状の石器で折れたものが多く、接合するところの形態になるのは、柳又イングストリーとして特徴的であろう。

神子柴型石斧はI・A・b、I・B・aなどで、再び角形を復活する。神子柴型石斧はIV期のものと比べて更に小型化する。こうした小形化した神子柴型石斧がI・II期の優大な神子柴型石斧との間に、どのような機能の変革があり、その文化の保守性をまがりなりにも保持しているといったあり方に達していることも関連して、重要な課題であろう。今はそのあり型にふれてのみおきたい。

高知・不動岩屋洞窟の報告が『考古学雑誌』4ノ3(岡本健児・片岡鷹介)に所載されている。その組成をみると神子柴石斧・神子柴型尖頭器と思われるものの、柳又型尖頭器・小形の撃器類・小形石刃・石鐵・矢柄研磨器・隆線文土器がそれである。④隆線文土器⑤スサ入りの無文土器が個体として把握されるものであるらしく、また⑥⑦は木曾・柳又、同じ西又、同じ小馬背のそれと一連のものと思われる様相を呈しており、その有舌尖頭器は、柳又尖頭器そのものである。神子柴型石斧は刃部破片で全容は明らかでないが、I・A・bである。石鐵は矢柄研磨器と共にしている。

この他表探資料として埼玉・市場坂遺跡(48)があるが、I・A・bの神子柴石斧に、神子柴型尖頭器と剥片鐵が採集されているようである。一応この期の組成をもつものとして把握しておきたい。

神子柴型石斧について総括してみると、この期はかなりヴァラエティに富んでいる。小瀬ヶ沢について若干不安もあるが、小形化の推進と、特殊化の現象と観察することができる。角形・丸形相半ばし、IV期と同様な大きさの神子柴型石斧もある。平面形もかなり多様である。研磨の行なわれたものは若干くなり、打製のものが多くなる。器体の多様化は、機能の多様化であることは言うまでもない。

①石器は小形化する傾向のなかで把握されるが、や

やヴァラエティが出て来て、大形になるものもある。②神子柴型石斧は小形化と特殊化現象をみることができ、狹長性はあるもので推進され、あるものではブレーキがかけられる。その比3.20とⅢ期より下降する。③丸のみ刃部をもつものが若干増加の傾向にある。④角形・丸形刃部が相半ばする。⑤打製のものと研磨するものと相半ばする。⑥石器製作の中に更に石錐と矢柄研磨器が加わる。⑦土器は隆線文系の土器のみである。⑧隆線文系土器以外の土器は組成しない。以上がV期の總括である。

[VI期]

V期とVI期との差は、石器の側面からすれば、極小化現象と、特殊化現象がますます明確になり、土器の側面からすれば隆線文系土器以外の土器の組成がますます一般的となるのがこの期である。いわば神子柴系文化の拡散現象であり、末期現象であると考えてよいのではないだろうか。

VI期の標式的な遺跡として上げられるのは山形・日向洞窟遺跡と愛知・シャチノミジュリンナ遺跡である。

シャチノミジュリンナの石器組成は、神子柴型石斧・神子柴型尖頭器・木葉状尖頭器・柳又尖頭器・彫刻器・先刃・側刃・抉入状搔器・両面石器・礪器・石錐・矢柄研磨器で、これに更に隆線文系の上器に爪形文土器が加えられている。神子柴型石斧は第1図の47に示したI・A・bと他にI・B・bの繩文中期の打製石斧とみまごうばかりのものが1点ある。石器は概して小形であるが、破片ではあるが神子柴尖頭器などは10cm以上になるものがある。有舌尖頭器は柳又尖頭器そのものであり、その出土例も多い。石錐は剝片錐からなり整ったものがある。いわゆる矢柄研磨器が1点出土している。隆線文系土器は口縁部に横走する細隆線文土器で、この種の土器の終末に位置するものであろう。爪形文土器は小瀬ヶ沢例に併行するようなもので、これが明らかなセットであろうと報告されている。

山形・日向洞窟遺跡も同様な所見を提出するものと考えてよい遺跡である。その組成は神子柴型石斧・神子柴型尖頭器・木葉状尖頭器・有舌尖頭器・三角柱状石錐・石錐・搔器類・石錐・矢柄研磨器がこれに加わ

り、土器は、第4層の微隆起線文土器・無文土器・爪形文土器・押圧繩文土器の出土との報告をそれにあてよいかどうか。報告者の加藤松氏によれば、他の洞穴等との対比の上で、これらを更に細分する時期を限定しているが、押圧繩文までが一つのセットであるかもしれない。

ジュリンナと日向洞窟との差は、三角柱状石錐の存在と彫刻器の存在が石器の側であり、土器の側では、押圧繩文土器の存在にかかっていると言えるのである。押圧繩文土器が爪形文土器より後出するとの所見が、火箱岩洞窟などで得られているならば、ジュリンナが、先行し日向洞窟がそれに続くものと把握してよいだろうか。日向洞窟の有舌尖頭器も有舌尖頭器としては最終末期のプロポーションであると理解したい。

この期の神子柴型石斧についてみると、ジュリンナ例は小形化・狹長性が推進された中でみられ、日向例は特殊化現象の中で把握され得るものである。この期はV期のあとを受けてVI期にその胎動があった小形化と特殊化が一層推進され、神子柴系文化の拡散に結果するものと考えられる。その狹長性は更に末期的となり、その石器製作技法も一層低次限のものとなり、より繩文的な技法になる。第1図の50~55は長野・宮ノ入遺跡の採集資料であるが、神子柴型石斧の極小化・狹長化、そして特殊化は狹長などつもない大形の例も現象するのである。55の柏崎例も、そして56の長野仁礼遺跡出土の例も同様にしてその概念のなかで把握され得るものであろう。第2図、第2表で見るよう、最大幅に対する長さの比が4.04との数を示すのでも明らかのように、特殊化と狹長性は更に著しい。

VI期を総括してみると、①石器は小形化の中で把握されるが、特殊化も著しい。②狹長性は更に著しく4.04の比を示す。③丸のみ刃部を持つものも若干ふくまれる。④はじて丸形刃部である。⑤すべて研磨されたものである。⑥石器組成はV期とかわらない。⑦土器は隆線文系土器に、爪形文土器、あるいは押圧繩文土器までのセットが認められる。

矢柄研磨器については、山内学派からの提案が相づいで行なわれている。大陸の出土例を上げ前2500年以上に存在することはあり得ないとの比較考古学的論理によって、それの伴う隆線文系土器の草創期は、それ

に近いものであろうとの結論を導いているのである。神子柴系文化のV期には出現するのである。ここには四国・上黒岩第9層が入るものであるが、C¹⁴測定ではおよそ12000年前との数値が出されているのである。この数値をただちに取り入れるかについては問題が残るとしても、この神子柴文化のIII・IV期を一応、洪積世から沖積世への時点に比定することは妥当であろう。そうした観点に立ってみれば、この期の前後を前一万年内外とすることには、周辺科学、いわば第四紀学総合の一致点であるように思われるのである。

4

神子柴系文化を神子柴型石斧を中心としながらその組成にできるだけふれながらI期からVI期まで一応その軌跡を追ってみた。II期とIII期の間、III期とIV期の間には、もう1ステージずつがあるかもしれない予想を持つに至るものであったが、一応現時点における資料を見るに6期を設定し、なおその各期の内部には若干の時間のずれが内容しているようにもみられるところもあった。I期からVI期までの神子柴系文化の変容は、一種劇的な変容であるように思われる。圧倒的な神子柴型石斧のあり方が、神子柴型尖頭器の変容に対応しながら変容し、有舌尖頭器の登場、土器の登場、そして石器、矢柄研磨器の登場、それが石器の極小化、特殊化現象のなかで現象したものであって、新石器化現象とも縄文文化現象とも概念化することのできるものであろう。第2図に相関するように、その神子柴型石斧はしだいに狭長性し、小形化の指向の内で特殊化することは機能と対応しながら、その当初の目的性からはなれて行き機能の分化と限定がやがて、文化の拡

散現象となって、縄文文化のなかにというより、縄文文化の自らの担手となって埋没するのは、あくまで海洋にへだてられた列島での隔絶による現象であったのかもしれない。VI期のあとに確実な1期を画し得るかどうかをたしかめていない。たしかめることができないと現段階では言い切ることには問題が残るのであるが、VI期の直後こそが、日本列島における系列の消滅による縄文文化そのものの成立の時点ではないかと考えるのである。

本小論はできる限り図式化につとめたために、より重要な問題点を明らかにすることができなかったことのあることを恐れている。しかし、本小論が明らかにすることことができたその神子柴系文化の系譜は、実は、この小論に登場できなかっただ跡を含めたときにまた数歩を前進させることができるものと信じている。有舌尖頭器に注目し、その軌跡を追求して神子柴系文化に至り、その系譜を明らかにすることによって、その石器をめぐる文化のあり方を明らかにできることができると考え、自分を投じてすでに一昔を過ぎる。本稿で神子柴石斧をめぐっての再論を果したので、今度は、神子柴系型尖頭器と、有舌尖頭器からの再論を準備し、神子柴系文化の系譜に更に一つの前進をもたらしたいと思って用意している。先学の御指導を得たいと思う。また本小論を契機としていくつかの論争が起こればこれに過ぐるものはない。

なお本小論は一志茂樹先生の喜寿祝賀に参加のため、とりいそぎ稿を起したものである。先生の増々の御活躍と長寿を祈念するものである。(1970・8・10)

(長野県小諸市 坂の上小学校教諭)

使用破壊痕のある神子柴型石斧III b型をめぐって

——最近における課題のひろがり——

森 嶋 稔

1

神子柴系文化の標式的な石器の一つである神子柴型石斧について、岡本東三氏の論考（1979）が出てからすぐ、私は小文を草した（1979）。岩本義雄氏の論考（1979）に注目していたところへ、岡本氏の論考は壮大な反論であったので、その問題点について指摘するためであった。

それに対する積極的な再指摘がないままこの小文を書くのは、いささか時宜を得たとは言いたいが、岡本氏の言う神子柴型石斧のIII b型の二例にことよせて、その問題点について再びふれてみたいと思う。

それから、今日までの間に行われた二、三の論考が注目されるので、それらもからめて神子柴系文化の研究に対する最近における課題のひろがりについてみるのを、本小文の目的としたい。その一つは横田義章氏によるもの（1981）であり、その二是田中英司氏によるもの（1982）などである。

神子柴型石斧の分類について、私も古く試みた（1970）ものがあるが、完全なものではなかったので、ここでは岡本氏の分類に従うこととした。しかし、片刃とされた多くは、巨視的な範疇での事であって、微視的には、円盤状刃部を持つもののみがその範疇に属するのであるが、そうした問題については後日ふれることとして、本稿の資料は岡本氏のIII b型「小形で、切断したような刃部調整を行なう扁平なもの」二例である。岡本氏は「先土器文化終末期の石斧の系統は、バイカル縦年のイサコヴォ期（B.C. 4000～3000年）・セロヴォ期（B.C. 3000～2500年）に対比するのが妥当である。」「先土器時代終末期にはすでに局部磨製石斧があり、その年代観は新しくしなければならない」とし、このIII b型の神子柴型石斧と①ウクライナのジエスニスク文化（B.C. 2500～2000年）の石斧、②エジプトのファーム文化（B.C. 4500年）、カルツーム文化

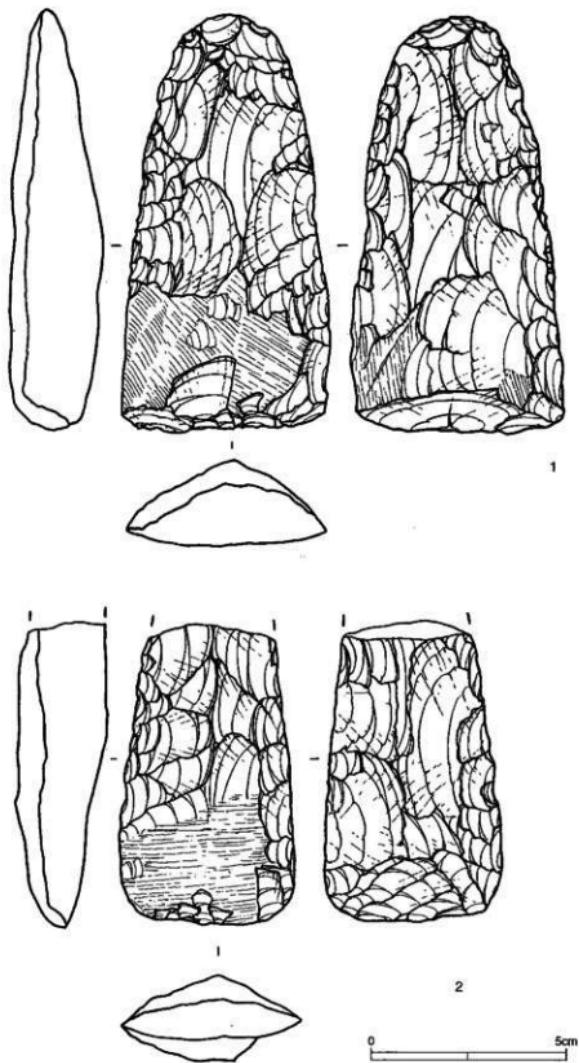
（B.C. 4000年）の石斧と関連させて、いずれも新石器文化の森林地帯の文化との予察を強調している。更に神子柴型石斧の中におけるヴァラエティをシベリア系統のみでなく、中国、蒙古方面との系統を指摘して、「このように石斧の系統をみても、先土器時代終末期は、一系統の文化とはいえない複雑な様相を呈している。」としている。

それに対して、岩本義雄氏は、ウスチチムブトンIV a期（9000±100年）に求めている。土器を伴わないで円筒形の細石核から剥取した細石刃と彫刻器、先刃器に刃部磨製の神子柴型石斧、①方形の刃部をもち、両側——基部（森嶋補注）——の肩に——突起の（森嶋補注）——ある十字形の——断面はかまぼこ状の（森嶋補注）——両面加工された手斧（1点）、②弧状の刃部をもつ両面加工された打製石斧（1点）と、③弧状の刃部を研磨した刃部磨製石斧（1点）などが、その石器組成である。中石器時代に位置している。

神子柴系文化の「系統論」の中で、極めて注目すべき諸問題であることは言うまでもない。しかし、私の前掲の小文でもふれたように、それらが起源であるとの認識は早計であると思うのである。日本列島で確認された同系の遺跡は100をはるかに超え、大陸ではまだそれ以下であるという状況の中では、系統の予察はできても、起源の予察はむずかしいと思うのである。ウスチチムブトンIV aより古い同系文化の資料が、まだ日の目を見ないでいる可能性が大きいと思われる中で、まず、日本列島内資料では、ここまで理解できるといいうものを把握することが極要である。そうした把握を短絡的に起源論として結びつけてはならないと思うのである。

2

ここに図示した二例の石器は、ともに長野県小県郡



第1図 使用破壊痕のある神子柴型石斧IIIb二例（4/5） 1. 屋敷畠出土 2. 菅平採集

Fig.1 -Mikoshiba-type axes (Type IIIb) with use-breakage.
1: Yashikihata site, 2: Sugadaira (surface material)

真田町菅平高原で採集されたものである。1はその菅平高原の東組1223~1265番地口号地籍から小林八郎氏によって採集保管されていたもので、この石器を手がかりとして発掘調査を1968年に行ったことがある。その詳細についてはまだ未整理であるので後日にゆずり、今回はこの石器のみについて見ておきたいと思う。遺跡は舌状の台地で、神子柴遺跡例からはじまって、同系列の遺跡に強く共通性のある地形上に位置している。通称、屋敷畠といわれている地点であって、それを遺跡名としている。2は真田町長（おさ）小学校資料室蔵品中に見出したもので、ラベルには「菅平出土」とのみあって、出土地点は特定できない。

1は全長10.6cm、最大幅5.3cmで、厚さ2.1cmである。頁岩製。基部は丸くなり、刃部に向って扇状に開いて行き、最大幅で刃部となることを平面範型としているらしい。表・裏面ともに剥離がゆきとどいており、裏面はできる限り平滑になるような剥離、表面はかまぼこ状になるよう中央稜が高く弧をなすように剥離されている。刃部の作出は、岡本氏のIII b型そのものであり、ほぼ直線状のきわめてゆるやかな弧をなすように意図されていたものと思われるが、表面のかまぼこ状弧の頂点へ、ほぼ50°の角度で加撃が行われ、一撃で剥取し刃部刃線を構成したものと思われる状況である。刃線は丸鑿状である。刃部の研磨は器体の中央線に直行する90°~50°程の斜行するよう行われている。神子柴、唐沢B例のように棒状砥石によって行われたものと思われる。表面刃部すみに新しい欠損がかかるが、内部は黒色で、現面は風化が進み灰白色を呈している。

2は全長7.5cm、最大幅4.5cm、厚さ1.5cmである。頁岩製。基部は新しい欠損で、内部は灰黒色を呈している。器体表面は風化し、灰白色である。この器体も1同様に基部は丸く、最大幅が刃部となるよう平面範型をとっているものと見てよい。また1よりはその調整剥離は荒いけれど表・裏面ともきれいに行きとどいている。表面及び裏面の意図する形状は、1とまったく同様である。そして刃部の作出も、いわゆるIII b型に属するもので、同様にして刃線もゆるい弧状となるよう調整剥離がなされている。しかし、2が1と異なるのは、1では1回の剥離によったものを、2では数回の棒状剥離によってなされているということである。

刃線は丸鑿状である。刃部の研磨は、器体の中心線に対してほとんど直行するもので、斜行するものはない。しかし、その研磨は1同様に凹みにまで行われていることからすれば、同様の棒状砥石でなくてはできないよう思われる。

1・2に共通する刃こぼれについて見ておきたい。刃こぼれは、使用による破壊痕であるから、その観察は、この石器の機能の理解につながるものと言えよう。刃こぼれが使用による破壊痕でない、アクシデントによる破壊痕の場合は、きわめてアトランダムである。この2点の器体にその共通するものがあるとすれば、それは共通の使用目的のための使用による破壊痕であるとすることができるからである。

神子柴例も、唐沢B例も使用による破壊痕を認めることができなかったが、本2例は明らかにその破壊痕に共通性が認められ、それが刃こぼれであることと認めうるものと思われる。III b型は、“hollow-Cut”と呼ばれる切削したような刃部に特徴があると岡本氏が指摘するように、直線に近い弧状刃部が、破壊によって減り刃線の後退を現象していることがわかる。1では中央部で3mm内外、2では2mm内外であろうか。しかもその破壊痕はすべて器体の表面に集中していることが注意される。これは岡本氏が「両刃I型はヨコ斧の可能性が大きい。」と言うのとは合わせずに、III b型はヨコ斧（手斧）であることを示している。しかもその着柄は表面を向うにし、裏面を柄方向の手前にするものであり、断面形における丸鑿状刃部刃線による機能は、例えば木質の素材に凹みを作るためのものと考えられる内容をもっている。刃部は使用による破壊によって切れなくなると再生をする。そうして次第に短小となり重量も減じてしまい、使用に耐えなくなると遺棄されてしまうのである。III b型はヨコ斧であるが、片刃の石斧はほとんどヨコ斧である可能性が強く、刃部構成が始刃となるものはタテ斧である可能性が強い。しかし、すでに述べたように、巨視的に見て片刃であるが、微視的には始刃であるという石斧については、問題は単純ではないので後日にゆずりたいと思っている。だがしかし、更に微視的には、單なる片刃の刃部というものは存在しないのかもしれないであって、こうした面からの追求をすでに用意しているところで

あるが、後稿としたい。

3

福岡県春日市門田（もんでん）遺跡では、二地点で半舟底型細石核・細石刃に神子柴型石斧が伴っている（木下修、1976年、横田義章 1981年）。先にふれたウスチムブトンIVa・IVb期の石器群を思い出す。細石核の形態が異なることが気にかかるが、しかし蒙古・シベリア中部にかけての円筒・円錐形細石核に対して、シベリア東・中国東北にかけてのくさび形細石核の分布の中で、同様の生産形態の関連があったときに、同様の機能をもつ石器群を作ったと考える方が適切であろう。とりわけ、工作用の工具と思われる石器群は、系統を越えても関連的であり、また保守的であるように思われるのあって、同一技法を後代まで尾を引くように若干の変化をもたらしながら残っているもののように思われる。

門田遺跡の資料中、資料6にあげられた神子柴型石斧はまさにIIIb型に属するものであって、その形態は、屋敷畠遺跡例の1にその製作技法、とりわけ刃部の作出は同様な方法によって、丸鑿状に整えている。表面の研磨の方法は明確でないが、偏平かまぼこ状を呈するようになされていることに注意される。他にもう1点、ずんぐり形のものがある。なお門田遺跡の谷地区では、細石刃と半舟底型細石核、そして長野県長野市大室・宮ノ入遺跡の資料と瓜二つの神子柴型石斧が検出されているが、ここから爪形文土器が得られているので、横田氏は同「石斧が細石器・爪形文土器と同一インダストリーに属するものと判断しておきたい。」としている。当然門田遺跡では、南台地→谷地区という変遷が理解されるのであろう。この所見は極めて重要なように思われる。九州における神子柴系文化の存在については明らかにならないでいたが、にわかに明らかになって来た。本州・四国等では、神子柴型石斧に土器が伴出するときは有舌尖頭器、植刀を伴っているのであって、まだ、九州の門田型の石器組成を示すものはない。大きなへだたりであり、極めて興味ある事実である。それらは福井洞穴・泉福寺洞穴などの所見とあわせ、細石器と土器（豆粒文・隆線文・爪形文）との組成と関連するものであることは言うま

でもないところであろう。私案による神子柴型石斧の編年（森嶋 1970年）の第VI期に相当するもので、山形県日向洞穴・愛知県酒呑ジュリンナ、長野市大室・宮ノ入などの遺跡との関連を考えられるように思う。それは、おそらくは全遺物の組成が明らかにならない現段階では、明らかになった部分のみの関連性からみれば、まず極めて狭長な神子柴型石斧の段階であること、組成する土器群には明確に爪形文土器が入るということである。そうした観点からすれば、この福岡県門田の谷地区は、神子柴系文化の第VI期、いわば最終末期に相当するようと思われる。しかし、この第VI期、九州以東においては、狭長な神子柴型石斧、同尖頭器、木葉形尖頭器、有舌尖頭器、石鐵、彫刻器、先刃、側刃、抉入搔器、擦器、有溝砥石などの石器群に、隆線文土器に爪形文土器が加えられるというような組成を内容としているのに対して、いわゆる尖頭器群におきかえて、細石器群というあり方をしているのが九州の地域性であると、同一ステージ上で考えるべきであるのであろうか。それともウスチムブトンIVa・IVb期の資料群との関連を優先させて、その中国東北地区及び韓半島経由の石器文化と考えるべきであろうか。その通過によって、円錐・円筒形細石核が、楔形細石核へと転換が可能であり、結果したと理解すべきであろうか。しかし、仮りにも付会的な結論を引き出してはならない。今は、その事實を正しく認識すべき段階であって、門田遺跡例のような、細石器群+神子柴型石斧+土器群という組成を示す遺跡の増加を見守るべきであろうと考えるのである。

青森県大平山元I遺跡では有舌尖頭器の組成を見ないで、原始的な石鐵をもち、土器を組成しているのを見れば、第III期と第IV期との間に介在する時間的位置にあるもののように思われ、土器を持つという点からすれば、第IVa期あたり、従来の第IV期を第IVb期とすべきかとも思われるが、この土器が注意される。無文で器壁に植物纖維を混入し、角底の土器であるらしいのである。この種の土器は、旧津井の乙名丘（otonaoka）遺跡出土の土器を標式とするものであって、乙名丘I石器文化とされるものが注意される。モサンル例に近い神子柴型石斧と有舌尖頭器、木葉形尖頭器、基部の丸い尖頭器、彫刻器、搔器などが組成し

ているが、そこには前記した土器が加わっている。この種の土器は、最古形式の土器として、石刃・鐵文化内にも組成しているらしく、北方に偏在しているとみてよい。

サハリン・北海道まわりの有舌尖頭器、土器へとその組成をひろげるものと、中国・東北区・韓半島まわりの細石器+土器へと組成をひろげるものとが、旧石器時代終末期から縄文時代の最初頃の位置に展開していたかは、極めて興味ある課題である。かなり明らかになった部分と、その緒についた部分とがあつて今後の調査研究の進展に期待するところである。

4

遺跡・遺構の性格論とも言える田中氏の「神子柴遺跡は収蔵遺跡という呼び名にふさわしい出土状況である。」という「交易関係の品物」のデボ址であるとの認識は注意される。石器製作址としての性格を指摘する神奈川県寺尾の第I文化層のものや、東京都前田耕地区のものなどの出土状況を検証しながら、神子柴や唐沢B遺跡などを、交易関係の品物のデボ址と分析したのである。その内には「石器が定型的であり完形であり、規則的に配列・集積されている」からというもののを受けての延長線上での展開である。本、屋敷畠資料などのように、いわゆる使用による破壊痕を持つ石器が、どういうわけか出土例のすくないことに注意しなければならない。しかし、確実にあるのである。その上、使用破壊痕なり、使用痕なりがまったくないと言われて来た多くの石器が、顕微鏡的な調査研究を経ていない今日、まだ結論は一種の予断になる恐れがあ

るようと思われる。——生活時の一セットが揃っているのはむしろ生活的ではないだろうか——という考えはまだ私の中で変ってはいない。ある特殊な、あるいは一定の機能を果たすよう意図されたと思われる遺跡は、その機能点のみを満足させる遺物群のみを持っているものではないだろうか。世帯道具全体を持つというあたり方は生活的であると見ているのである。本資料のような類例もなお多くの集積が期待され、通常の生活の中の、生産労働の直接の息吹きを更に再構築してみたいと思っているのである。

神子柴系文化の研究にとっての最近の課題のひろがりについて見て來たが、大方の、御教示を受たいと思っている。興味ある課題は山積しているように思える。

引用文献

- 森嶋 稔「神子柴型石斧をめぐっての再論」「信濃」22
-10 1970
- 岡本東三「神子柴・長者久保文化について」奈良国立文化財研究所「研究論集」V 1979
- 岩本義雄「シベリア・極東との関係からみた大平山元遺跡」青森県立郷土館「大平山元I遺跡発掘調査報告書」1979
- 森嶋 稔「神子柴型石斧をめぐる最近の動向」「考古学ジャーナル」No.167 1979
- 横田義章「いわゆる神子柴型石斧の資料」九州歴史資料館「研究論集」7 1981
- 田中英司「神子柴遺跡におけるデボの認識」「考古学研究」29-3No.115 1982

長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器

—その神子柴系文化の系譜試論(予報)—

森 島 稔

1

上和沢は Kamiwasa と発音する。上和沢は旧更級郡信田村にあって、長野市篠ノ井堀の内で千曲川に合流する支流聖川の中流にそそぐ和沢の作る西面する小テラス状地形上に位置する。遺跡はすでに近年の開田工事によって破壊されてしまっている。ここに図示した尖頭器(第1図)は、その開田工事以前、普通石であったときに採集されたもので、昭和28年より行われた「信濃史料」第一巻調査の際にはすでに認められ、その地名表には、

673 田野口上和沢 山麓 (縄) 石槍 単独出土
(藏) 信田小学校

と記載されている。その後、前述した開田工事には、8 cmに及ぶ石刀と黒耀石の原塊(石核か)が採集されたが、石刃一点のみ残されて、更埴市桑原小学校資料室の所蔵となっている。

遺跡点の山側に見られる地層の断面を見ると、黒石腐植表土が30cmでその下層に褐色上層10cm、以下、黄褐色火山灰質ローム層となっている。もとより、そのうちの石器産出層位を知ることは不可能である。

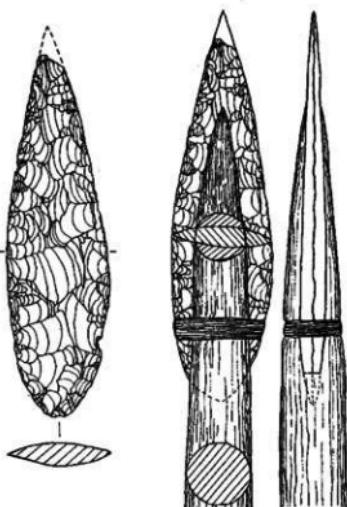
2

上和沢出土の尖頭器は最大長11.2cm、最大幅3.1cm、最大厚0.7cmで、石材は黒耀石である。尖端と基部とを若干欠失しており、それを復原すれば最大長12.1cmを計るかなり大型の尖頭器である。

調整は入念な押圧剝離法によりなされ、第一次剝離痕を残さない完全な両面加工品である。器体はほぼシンメトリーであるが、右側縁はやや曲線が乱れ、左側縁は流れるように基部へ至っている。器体の最大幅は中央より基部寄りにあって、その位置と基部端との中間には、器体側縁がやややせるように抉入部が作出される特徴をもち、基部はごくわずか欠失しているが、

著しく尖るようなものではなく、丸みを帯びるものと思われる。器体調整の技法はかなり洗練されており、大きくてうすい剝片を交互に、あるいは連続してとっているその剝離面は器体の中央部を越えて行われているものすらも見られる美麗な一例である。

石刀は図示しなかったが、打面より約1 cmほどのところで折れており、現在最大長7.5cm、最大幅2.4cm、最大厚0.7cmで、主要剝離面に内曲している。打面と反対側の先端には、背面及び主要剝離面に若干の調整打痕がある。黒耀石製である。



第1図 上和沢遺跡出土尖頭器(左)とその装着例
Fig.1 Point from Kamiwasa and is its possible way of halting

この種の尖頭器は長大、扁平、基部寄りに最大幅をもつ特徴から「神子柴型尖頭器」といえよう。神子柴型尖頭器は儀器的（あるいは副葬的）なものか、あるいは短剣（fish-knife）様のものかと考えられてきたが、後者には半月形石器その他のがこれにあたり、前者には資料の増加もあって、一様のものとは考えられなくなってきた。

儀器的なものとの理解の根柢には、長大、偏平、基部寄りの最大幅の特徴の観察によって、それは実用的なものとするにためられたこと、あるいはその器体の使用痕の欠除、またはその特殊な出土状況に対する理解が横たわっているのである。

しかし、神子柴型尖頭器のすべては儀器的なものではないし、また、短剣様のものではない。それが文字通り石槍としての機能をもつものとは考えられないであろうか。第1図（右）に示したものは、石槍としての「神子柴型尖頭器」の装着の際に考えられる一例である。本上和沢出土の尖頭器に想定復原をしてみたが、こうした器体のはさみこみ、基部の緊縛、天然アスファルト等による固定によって、長さ25.5cm、幅5cm、厚さ1.2cmの神子柴遺跡出土の尖頭器をも、充分その石槍としての実用的な機能を果すことができるものと考えられよう。基部の緊縛は天然アスファルト等による固定が、この時期にも考慮されるとすれば、必要なものになるものと理解してよいものではなかろうか。

はさみこみによる器体の保持は格段の前身と思われ、これが大形器体の発生にもつながるものであったかもしれない。その損傷度は基部のみの固定としたときのものとは比べものにならないものであろう。しかし、それは一度損傷すると、補修されたかどうか、それが全器体のつけかえになったかどうか。こうした装着の技法はその去就のなかで、やがて有舌尖頭器を、そして組み合わせ石器—植刃の技法を発生させてゆくものと理解される。

「神子柴型尖頭器」は強く、長大、三面調整、断面三角の（時には刃部に特徴のある丸のみ状を呈し、刃部周辺のみに磨製の技法をほどこした）石斧「神子柴型石斧」を伴なっているのが通常的である。それは、神子柴型石斧を伴なっている、というよりは、神子柴型石斧に伴なっている、というべきである。神子柴型石斧に伴なう石器群は、昭和33年、神子柴遺跡発掘以来、様々な議論が試みられ、そのうち比較考古学まと方法によって問題を克服しようとする試みも行われた。それによって核心にふれたかのように思われた。しかし、それはむしろ解決点ではなく、出発点であったということができよう。青森県の長者久保、長野県の神子柴などの石器セットは、当時の概念を超えていたからである。

この上和沢においても見ることのできる所謂神子柴型尖頭器は、もちろんひとり尖頭のみを追いかけても意味はない。その共存する石器セットを、あるいは土器の所在を、様式学的あるいは層位学的関係諸科学を動員してこそ、その全容を明らかにできるものと思われる。

近時、この「神子柴型石斧」に伴う一群の石器文化はかなり明確になってきた部分が多い。分布の範囲も日本列島北半に濃厚であることもその一つで、そうしたなかで、神子柴型石斧が次第に形態変化をとげながら、神子柴型尖頭器を伴ないつつ、更に①大形石刃などを伴う一群、②彫刻器などを伴なう一群、③尖頭器を多量に伴なう一群、④有舌尖頭器を伴なう一群、⑤植刃などを伴なう一群、⑥土器を伴なう一群など、仮にまとめるこができる群（それは時間的ステージをも意味する）が把握できるものと理解される。

この「神子柴系文化」ともいわれるべき石器文化は、從来から論じられてきたような、先土器文化終末期の縦につながるべきである一時限に限った事情でないことは、最早や明らかであると認められる状況になりつつある。

この試論についての用意は漸次ととのってきているので、詳論は後日にゆずり、本稿では、上和沢の尖頭器を中心に「神子柴系文化」の去就とその系譜の試論のための予報としたい。

神子柴型尖頭器とその周辺の二、三の課題

森 嶋 稔

1

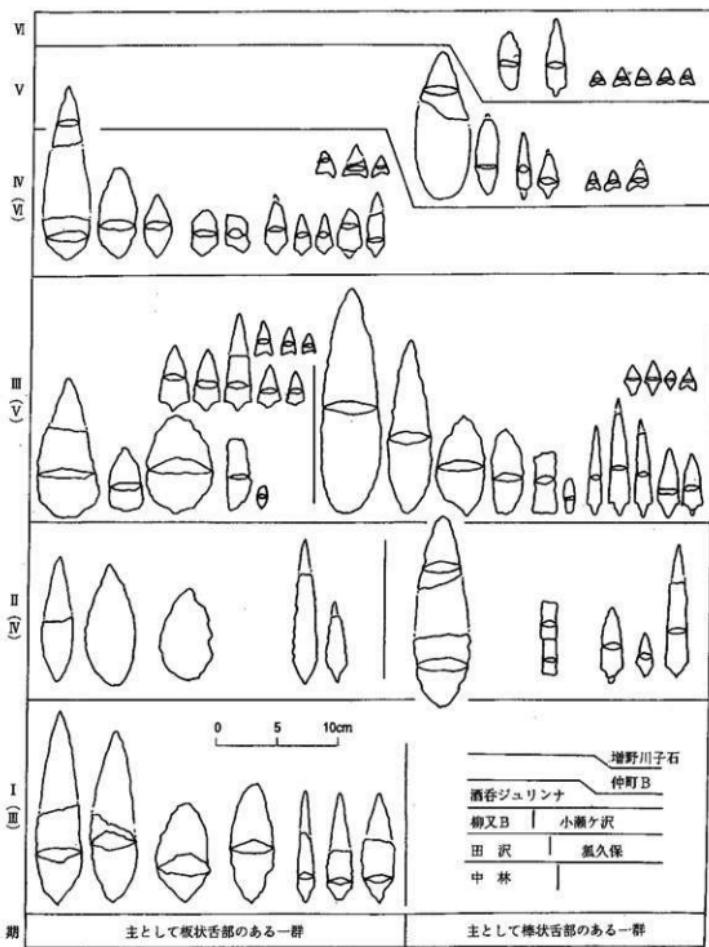
神子柴型石器組成が、いつ、どこで発生したものかは極めて重大な課題であるが、今この問題についての答えは可能ではない。しかし、すでに指摘した（森嶋1985）ように、「日本列島で確認された同系の遺跡は100をはるかに超え、大陸ではまだそれ以下であるという状況の中では、系統の予察はできても、起源の予察はむずかしい」と思っているのである。それは現段階において、起源論は可能でなくとも、系統論は可能であるということである。その大きな手がかりは、神子柴型石器組成の中の、神子柴型石斧と神子柴型尖頭器の型式学的な形態変化を把握することと、それに伴う他の石器組成および文化組成の変遷展開を加えて把握することにあるものと思われる。神子柴型石器組成中の神子柴型石斧と神子柴型尖頭器は、この特徴のある石器組成をきわだたせている大きなカルチュアル・メントである。そのカルチュアル・メントの変遷展開に理解を与えることができるということは、その成立の要因、その繁栄の要因、そしてその解体の要因の理解に近づくというものであるはずである。多く生産用具としての石器は、その中に生産様態の対応としての意志表現を内在している。したがって神子柴型石器組成をもつ石器文化に、いくつかの変遷展開の階梯を把握できるとすれば、ある生産様態を維持継承した部族集団の文化とも呼ぶことのできるものと考え、それを神子柴型系文化としてきたのである。土器をその文化組成の中に持たない時期と、土器を文化組成の中に持つ時期とにまたがる一系の文化とのあり方は、極めて重要な課題であるが、現段階において資料批判の不可能な調査資料以外の資料を除外してもなお、カルチュアル・メントである神子柴型石斧と神子柴型尖頭器は、極めて保守的に確実に継承伝達されていることがわかる。

まず神子柴型尖頭器の側から、この文化の変遷を見ようとした（森嶋1967）。そして神子柴型石斧の側から3回（森嶋1968、1970、1984）、そしてやがて神子柴型石器組成の中に明確に加わってくる有舌尖頭器の側からも、理解を加える試みを行った（森嶋1986）。これらによって、系統論的課題にはさやかながらアプローチができたとを考えている。しかし、このアプローチによって、成立の要因、繁栄の要因、解体の要因が読み取れて来たかというと、必ずしも近づいたとは言えない。やはり起源論と接する成立の要因が最も明確でないというのが、正直なところである。しかし、繁栄のファクターはやや明らかとなり、解体のファクターはほぼ明らかになって来たのではないかと思うのである。

2

図示したものは、拙稿（1986）に用いたものの一部に加筆したものである。この変遷図は、有舌尖頭器が組成してくる時期からのものとして、意識的に編成したものであって、（ ）の中に示したように、拙稿（1970）に編成した神子柴型系文化の編年表と対応するとI（III）→II（IV）→III（V）→IV（VI）期となるものである。

I（III）期までは土器の伴出は見られない。（I）（II）までは有舌尖頭器は見られない。したがって（I）（II）期は神子柴型石斧・神子柴型尖頭器の繁盛期であり、その石器組成の中でしめる割合は最も多い。だがI（III）期になると有舌尖頭器が出現すると、にわかに神子柴型石斧や神子柴型尖頭器は、その石器組成の割合を減少する。いわば有舌尖頭器に多くの機能をゆずり渡した気配さえ感ぜられる。そこで注目しておきたいのは半月形の尖頭器である。平面形がシンメトリカルでないもので、比較的長手のものや半折されたものが多いのも注意される。これらが短柄に装着されたかど



第1図 有舌尖頭器を持つ一群の変遷
(()) は神子柴型石斧の編年

Fig.1 Chronological change of tanged points morphology

うかは今のところ定かではないにしても、単に他のシンメトリカルな神子柴型尖頭器と当然その機能に違いがあったものと見てよい。したがって、フィッシュ・ナイフか、あるいはどちらかを何等かのものに植え込み、片側の刃部のみを機能とする石器であったかもしれないものと思われる。神子柴型尖頭器は、偏平、長太、基部寄りに最大幅をもつシンメトリカルな尖頭器を概念とするが、当然この半月形の尖頭器は、その概念の中に入らない。どうやら両面加工の尖頭器状の石器に、その機能による形態変化があったことをしめしていると見ることができる。木葉状の尖頭器と共に、生産用具としての石器は生産様態と対応する意志表現と見るべきであるから、当然形態のバラエティは機能のバラエティであるということを教えているものと思う。

II(IV)、III(V)期は、神子柴型石器組成は更にその割合を減らす。その時期、最も大きい割合をしめすものが有舌尖頭器である。しかし、神子柴型石器組成は、明らかにその残影をとどめていることに注意されるべきである。更にしかし、神子柴型石器組成は有舌尖頭器の加入によって、明確にその解体を始めたと理解さ

れる。解体の要因であると認められる。もう一つ解体の要因は石鎌である。II(IV)期に伴出しなかった石鎌が、III(V)期になると少量ながら検出されはじめる。神子柴型石器組成は更にその割合を減ずるばかりか、とりわけ神子柴型石斧の形態は末期現象を呈して、その終焉を表現する。II(IV) III(V)期にかけて半月尖頭器も残影となり、かわりに細長い両面加工の尖頭状器体を切断した植刃と思われるものが登場する。石鎌はその後を追いかけて出現するのである。IV(VI)期は最後のほてりであろうか。すでに極小化へと向かうのも注意される現象である。

V・VI期は、明確な神子柴型石器組成を認ることはできない。唯、尖頭器の一部と、とりわけ北まわりの棒状舌部のある有舌尖頭器が、ごく少量組成するのみで残影的存在である。神子柴型石器組成、神子柴型系文化のほぼ完全な解体である。そればかりではない。おそらくは旧石器的生産様態のほぼ完全な解体と理解することができよう。

古い文化の解体の仮定は、新しい文化の成立の過程でもある。もう一つの課題が隠されている。

系列編年への試み

—技術的系譜へのアプローチ—

森 嶋 稔

旧石器文化の編年は、古くは杉原莊介氏や芹沢長介氏によるものがあり、これは今日においてもなお古典的評価を与えられている。しかしその後日本列島においては、多くの調査が進行するに及び、幾つかの注目すべき研究が結実しつつあるということができる。そうしたなかで、私は1972年『イワン・ショウコブリヤス氏との対話』の小冊子や、1975『日本の旧石器文化』(雄山閣)において、「石器群の系列による編年」の考え方を提出して来たが、それは大まかにまとめるところのような考えを基底としたものである。

①石器の型式及び分布は、単に形態やローカルカラーとみるべきでなく、その石器文化の根底には、極めて伝統的で保守的な道具づくりの技術的な継承が、内在している。②その道具づくり技術の保守性は、時には集団のタブーに守られて、集団の規制として、次代に受けつがれたものである。道具はその集団の生産のための労働用具である。集団の生産は、單一的なものではなく、季節の周期に合わせて、複雑かつ動的なものであったとみることができる。そうした集団の生産は、第四紀の自然環境の変動や、ヒトビトによるよりよい生産の仕方の工夫などの要素によってもまた動的

であったにちがいない。こうしたさまざまな生産の動的要素をふまえた、集団の歴史展開としての生産のありさまを、その集団の生活様態と呼ぶこととする。すると、ある歴史的位置における道具群やその道具づくりの技術は、その集団の生産様態に対応しているとみることができる。③したがって、日本列島旧石器文化の、その文化遺物における製作技術論を基底とする型式学の確定、分布学の展開こそがより人間の動的把握を可能にするものと考えている。こうした上に立って、系列編年の試みは行われたものである。④系列の存在は、人間集団の存在を物語るものである。それによつて、どこの、どんな部族集団が、何時頃、ユーラシア大陸の東のはざれに侵入してきて、どんな歴史的展開をとげて、やがて列島に閉じこめられることにより、日本列島ナイス、縄文ナイスをとげていったかを、知ることができるよう思うのである。

近年、広域火山灰を鍵層とする、各エリアにおける同時性が明らかになりつつあることは、重要なことである。より細密な系列編年の可能性が高められていくものと期待している。

		縄文文化ナイス					
縄 文 創 文 化 期	10,000	室谷洞窟 火箱岩洞窟 一の浜洞窟				柳又B II 田沢 狐久保上層	
晚 旧 期	12,700 ±500	立川 月岡 中土荒屋				V ・ ② (矢出川)	狭山B 井島II 井島I
石 後	15,000	狐久保下層 上ヶ屋c 小坂 弁天島	杉久保A III 上ヶ屋a				V ・ ① 仙川III 前原IV上 (男女倉B) (男女倉J) 茂呂砂川
器 期	18,500 ±450	山屋I	金谷原				IV 前原IV中2 野川IV3a 鈴木V上
文 化 前	20,700 ±250	新横堤前 + 東山成	横道 杉久保A II 神山 杉久保A I (石子原)				II ・ 後 野川V 鈴木VI上 (茶臼山) II ・ 前 高井戸東X 鈴木X (西之台X) I (中山谷X)
期	22,000 始良Tn	東山系	杉久保系				茂呂系 国府系 神子柴系
	30,000						

第1表 旧石器文化の編年
Table 1 Chronology of the Palaeolithic cultures of Japan

要旨



Side-scraper from Karasawa B (1/1)

唐沢B遺跡

後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての移行期の石器群

1 遺跡

唐沢B遺跡は、中部日本の長野県小県郡（ちいさがたぐん）真田町大字長（おさき）字菅平に所在する。遺跡周辺は菅平高原と通称される高冷地で、唐沢B遺跡は高原の東端を流れる唐沢川の右岸の平坦面の微高地に立地している。標高1260m、東経138度20分・北緯36度31分を測る。菅平高原には、後期旧石器時代後半から縄文時代草創期にかけての数多くの遺跡が存在しており、唐沢B遺跡はその代表例のひとつとして著名である。

唐沢B遺跡の発掘調査は、森鶴穂を調査担当者とする唐沢B遺跡発掘調査団によって、1968年8月15日から8月18日の4日間にわたり実施された。遺跡は140m²の面積の調査によって完掘された。

2 遺物と遺構

唐沢B遺跡からは36点の石器が出土している。うち26点が発掘資料、10点が表面採集資料である。石器の内訳は、尖頭器5点・搔器1点・削器4点・石刃1点・剥片11点・局部磨製石斧5点・打製石斧6点・砥石2点・疊1点の計36点である。これらの石器のうち石斧は「神子柴型石斧」と通称されるもので、11点ある石斧のうち8点が20cm以上の大型品で、しかも精巧に仕上げられた優品として特徴的な存在である。

唐沢B遺跡の石器については、金属顯微鏡を用いた使用痕分析をおこなった。そのなかで風化が激しく観察不能なものを除くと、使用痕が観察されたのは小形の石斧1点のみで、他の石器からは使用痕が観察されなかった。小形の石斧にみられた使用痕は縁状痕で、被加工物の判定を可能とする光沢は検出できなかつた。

神子柴型石斧の機能については、一般に木材の伐採・加工用と推定されるほか、完形品が多いことから破損のしにくい用途（たとえば動物の解体や皮なめし

など軟らかいものの加工）を想定する場合、威信財として実用品でないとする見方などがある。唐沢B遺跡の神子柴型石斧の多くは、大形の精巧な完形品でリダクション・プロセスを経ていないものとみられ、しかも使用痕が検出されないことから、未使用状態のものと考えてみた。ただしその用途については、皮なめしの機能や威信財としての存在性を想定するより、木材の伐採・加工用としてみておくことが妥当だと考えられる。

唐沢Bの石器に使われていた石材は、剝片石器類には主に硬質頁岩や珪質凝灰岩が用いられ、石斧類には黒色頁岩が特徴的に用いられている。硬質頁岩は唐沢B遺跡より200km以上離れた山形県などの東北地方に産出する遠隔地石材と考えられ、黒色頁岩や珪質凝灰岩は遺跡から50km以内の距離の新潟県から群馬県にかけての地域で産出する石材と考えられる。この他黒曜石の小剝片2点もみられている。

唐沢B遺跡から検出された遺構は、石器の集中区1か所・焼跡炉1基・土坑6基・ピット4基である。

石器集中1は、径3m前後の弧状の分布を形成し、その北半分には石斧が、南半分には尖頭器・搔器・削器・石刃など石斧以外の石器がみられ、対置的な分布を形成する。この集中区にみられるのは、いずれも完成品の石器ばかりで、石器製作によって生じた剝片や碎片は認められない。言い換えればこの石器集中は、石器製作によって形成されたものではなく、完成品を配したいわゆるデボ的な性格を有している。

この石器集中からやや離れた位置には、焼跡炉と土坑が存在する。焼跡炉は赤化廻8点と焼土が分布するもので、掘込みは頗著でない。6基の土坑は貯蔵穴などの可能性があり、そのうちD-2・D-3号土坑は比較的深い掘込みをもっている。

3 石器群の性格とその成立背景

唐沢B石器群のように大形石斧や木葉形尖頭器に特徴付けられる石器群は、日本では長野県神子柴遺跡において最初に確認されたことから、神子柴系石器群と呼称されている。神子柴系石器群は、第四紀編年では最終氷期末に位置付けられ、考古学編年においては細石刃石器群が消滅した後、つまり後期旧石器時代最終末から縄文時代草創期の移行期にみられる特徴的な石器群である。年代的には15000 Y.B.P.程度のものと考えられる。また、本遺跡においては認められなかつたが、神子柴系石器群はしばしば最古の土器を伴う場合がある。現在、日本列島における神子柴系石器群は、東日本を中心に100か所以上が確認されている。また、ロシア沿海州のウスチノフカ3遺跡をはじめ、極東のいくつかの遺跡でも同様な石器群が検出されており、周辺の大陸との系統関係もうかがえる。

神子柴系石器群は、本唐沢B遺跡の例にみられるように、石器製作にともなう剝片類が存在せず、破損のみられない完形品で未使用とみられる石器ばかりが配置されたかのように出土するが多いことから、その遺跡の性格が問題とされてきた。その性格をめぐっては、①石器の保管や交換のためのデボ、②石器の遺棄された住居、③石器を副葬した墓、④石器を用いた祭祀行為の場所、などの説が出されてきた。

こうした遺構の性格に関する諸説のうち、唐沢Bについては、石器の保管や交換のためのデボ的機能と炉を備えた生活址という機能の二面性を備えているもの

と考えた。神子柴系石器群に普遍的にみられる特徴的なその出土状況のすべてを墓や祭祀といふれば非日常的な行為として解釈することは困難であり、むしろそれが日常生活を伴うなかで、物資交換をめぐるデボとして機能し、移行期の社会・経済システムを凝縮している、とみることがより重要と考えられるからである。

後期旧石器社会においては、完成した石器そのものが集団間の交換をつうじて供給されるあり方は発達せず、石器石材が集団ごとの直接採取あるいは集団間の交換によって必要量供給されたが、概して交換システムは発展途上にあったと考えられる。これが後期旧石器時代最終末の神子柴系石器群の段階になると、石材原産地において、石斧あるいは尖頭器といった主要石器が、それぞれの原産地を活動領域とする集団によって多量に製作され、その完成品が集団を通じて供給されるという交換システムへとシフトされる。完成品の供給は、製作時の破損リスクの回避と運搬重量の軽減化にもつながっていた。また、こうした交換システム整備の背景には、旧石器の遊動生活から縄文的定住生活への移行に伴って集団ごとの資源開発領域の固定化・専有化がはかられ、自らの領域外の資源獲得については交換によらざるを得なかった事情も想定されよう。このように唐沢B遺跡をはじめとして列島内各地でみられる神子柴系石器群のデボ的な石器出土状況は、移行期社会の交換システムを物語る象徴的現象としてきわめて重要であると考えられる。

Karasawa B

A transitional lithic industry of the Late Palaeolithic to the Incipient Jomon

1 The site

The prehistoric site of Karasawa B is situated in Osa, Sanada-machi, Chisagata-gun, the Nagano prefecture, the central Japan. It is located on a flat terrace of the right bank of the Karasawa river, running through the east edge of the Sugadaira Plateau, about 1260 m above the sea level. The longitude of the site is 138° 20' east, and the latitude is 36° 31' north. The site represents one of the major Late Palaeolithic to Incipient Jomon occupations densely distributed on the plateau. The excavation at Karasawa B was carried out on 15 to 18 August 1968 by the late Minoru Morishima under the auspices of the Karasawa B Excavation team, and an area of 140 m² was wholly uncovered to the bedrock.

2 The artifacts and features

A total of 36 lithic artifacts were discovered ; 26 through the excavation and 10 from the surface survey. They consisted of five points, one end-scraper, four side-scrapers, one unretouched blade, five unretouched flakes, five edge-ground axes, six flaked axes, two grinding stones, and one pebble with use traces. The most characteristic were the edge-ground and flaked axes of the Mikoshiba-type, manufactured with an extremely high workmanship. Their size was often large ; eight out of the eleven specimens exceeded over 20 cm in length.

A micro-wear analysis of the lithic assemblage except a piece too heavily weathered was attempted with a binocular microscope. The results indicate that the lithic artifacts but one small axe retained no visible use-wears. The wear detected on the small axe was composed of simple striations, without a characteristic use polish that would enable us to specify the worked material. The current literature proposes several functional interpretations for the Mikoshiba-type axe ; the most accepted one refers to it as a wood working tool, while others consider its possible use for light duty work such as animal butchering and hide scraping, or for symbolic activities as elite tools. The latter interpretations are derived from an observation that most of the known Mikoshiba-type axes are complete pieces, without showing major breakage due to use. The axes from Karasawa B, dominated by large finely manufactured pieces, also exhibit no visible use-wears or no trace of heavy resharpening flaking, suggesting that they experienced no heavy uses. It seems more reasonable, however, to relate their function to wood working rather than hide scraping or symbolic uses.

Examination of the raw material for lithic artifacts from Karasawa B reveals the common use of

Table 1 Stone artifacts from Karasawa B

	Point	End-scraper	Side-scraper	Blade	Flake	Edge-ground axe	Flaked axe	Grinding stone	Pebble	Total number	Weight(g)
Hard shale		1	2	1		1				8	574.4
Obsidian					2					2	Unknown.
Glassy andesite	1									1	5.1
Siliceous tuff	1			2	5					8	345.9
Tuffaceous shale					2					2	44
Shale					2					2	66.1
Black shale						2	5			7	4425.8
Andesite							1		1	2	1829.4
Hornfels						1				1	977.4
Sandstone						1				1	653.8
Arkose sandstone								2		2	2082.8
Total number	5	1	4	1	11	5	6	2	1	36	11004.7

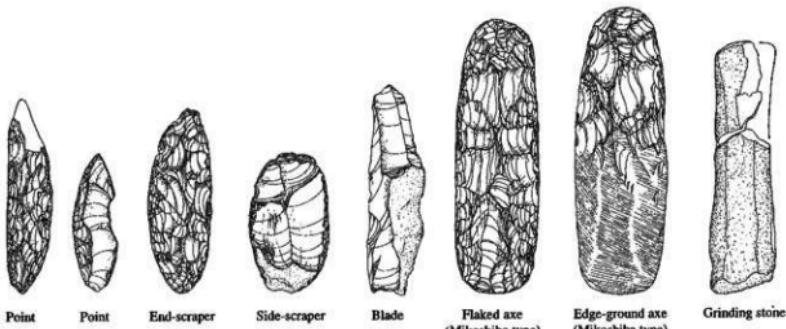


Fig.1 Stone artifacts from Karasawa B site (1/4)

hard shale and siliceous tuff for flake tools and the exclusive use of black shale for axes. The hard shale, probably originated from the Tohoku region including the Yamagata province about 200 km northeast of Karasawa B, can be considered exotic materials. The black shale and the siliceous tuff are, on the other hand, more likely to have been local ones available from an area within 50 km from the site such as in the Niigata and the Gumi provinces.

The features characterizing the human occupation at Karasawa B consisted of a concentration of lithic artifacts, a hearth containing burnt pebbles, and six relatively large and four smaller pits. The lithic concentration displayed a fan-shaped distribution with a diameter of around 3 m; in the northern half were located axes while in the southern half other tools like points, end-scrapers, side-scrapers, and an unretouched blade were discovered. The distribution of these two groups of tools accordingly showed a marked contrast to each other. These artifacts were all finished tools, including no manufacturing debris. This raises a possibility that the concentration does not represent a knapping spot but a kind of depot for finished tools. The hearth and the pits were located apart from the lithic concentration. The hearth, a rather flat one with the burnt soil inside, is represented by a concentration of eight pebbles with traces of thermal alteration. The relatively large pits, especially the deeper ones of D-2 and D-3, could have been used for storage.



Fig.2 Stone artifact Concentration 1 from Karasawa B

3 The nature of the lithic assemblage and its archaeological background

Lithic assemblages characterized by the large axes and the leaf-shaped points, as the one from Karasawa B, have been assigned to the Mikoshiba-type industry after the synonymous site of Mikoshiba, the Nagano prefecture. The industry is dated from the final stage of the Upper Pleistocene, about 15000 BP, according to the established quaternary chronology. Archaeologically, the industry came into use after the disappearance of the microlithic industry in the transitional period of the Late Palaeolithic to the Incipient Jomon. It is not uncommon that the Mikoshiba-type industry is discovered with the earliest pottery, although this was not the case at Karasawa B. More than 100 sites with the Mikoshiba-type assemblages have been known so far mainly from the eastern Japan. Comparative assemblages have been recently reported from Ustinovka 3 and others, the eastern Russia, however, demonstrating a connection to the mainland Asia.

There has been a debate on the nature of the Mikoshiba-type industry, for it is unique in some ways as typically noted at Karasawa B ; the industry usually consists of finished tools only, and the distribution of the lithic artifacts often exhibits small concentrations in the site. These features led many authors to suggest that sites producing the Mikoshiba-type industry represent either 1) a depot of tools for future use and exchange, 2) an abandoned dwelling with a storage, 3) a tomb with stone tools as burial goods, or 4) a ritual place with the use of stone tools. The present author suggests that the

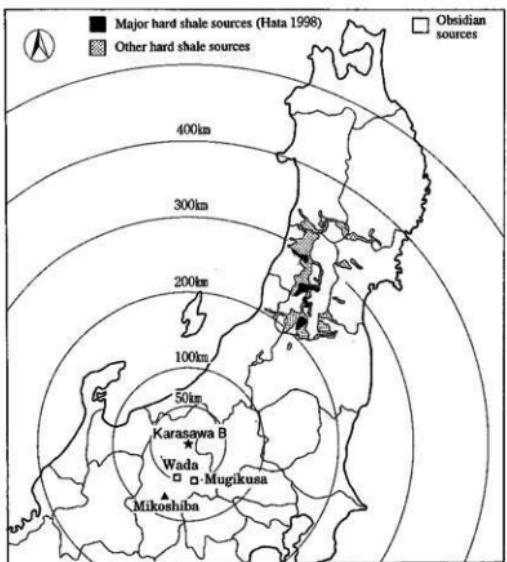


Fig.3 Karasawa B and the distribution of raw material sources

first and the second interpretations are applicable to the case of Karasawa B, while the last two, regarding the sites be related to a non daily activity, would not explain the rather ubiquitous occurrence of the Mikoshiba-type sites in a wide region. The possibility that the industry is a manifestation of a strategic depot within a dwelling, functioning in the socio-economic system of the transitional period, is proposed here. The evidence shows that the system for material exchange in the Late Palaeolithic was comparatively simple in a sense that most of the goods were obtained through direct procurement or exchange of raw materials themselves. Instead, in the new system of the Mikoshiba stage of the final Late Palaeolithic, major tools such as axes and points were procured through exchange in the form of finished products that were manufactured by the inhabitants whose exploitation territory included the raw material sources. Exchange in the form of finished products must have enjoyed advantages, for instance, to avoid risks of raw material waste during the subsequent manufacturing as well as to reduce the transportation cost.

The period when the new ways of exchange became popular corresponds to a period of transition from the Palaeolithic to the Jomon, in which the mobile settlement systems were gradually replaced by the more sedentary ones. Under the increasing sedentism the exploitation territory of a particular human group was probably reduced, which would have created circumstances that the development of a more extensive exchange network was inevitable to maintain the secure procurement of materials



Fig.4 Distribution of Mikoshiba-type industries

unavailable within their territory. The common occurrence of depots in the Mikoshiba stage of the Late Palaeolithic is thus considered to reflect an ongoing significant change in the exchange system, its fine example being the evidence documented at Karasawa B.

写真図版



End-scraper from Karasawa B (1/1)

PLATE 1



1 唐沢B遺跡

1 View of the Karasawa B site



2 発掘調査地點

2 View of the Excavation area

PLATE 2



3 発掘調査風景

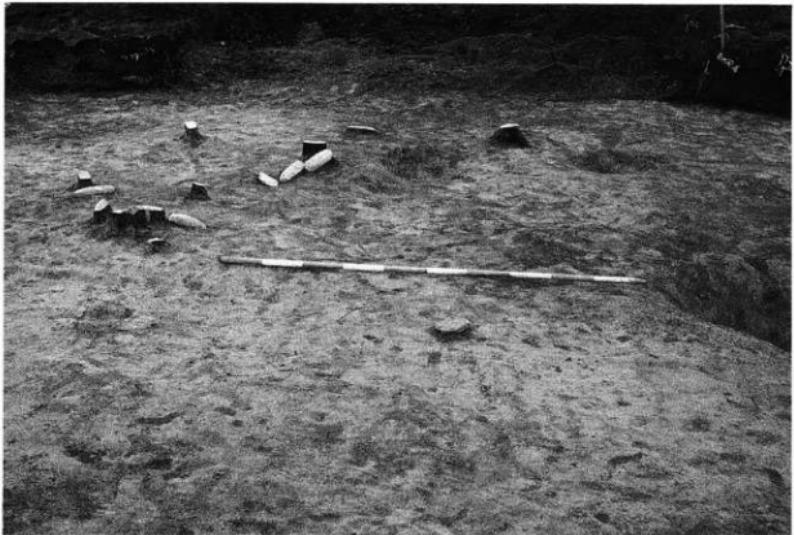
3 Excavation in progress at the site



4 ブロック 1 の石器分布

4 Distribution of stone artifacts in Concentration 1

PLATE 3



5 ブロック 1 の石器分布

5 Distribution of stone artifacts in Concentration 1



6 スポット d の石器分布 (No. 16.22.30.32.28)

6 Distribution of stone artifacts (Nos. 16.22.30.32.28) in Spot d

PLATE 4



7 スポット f の石器分布 (No. 6.17, 34.3.1, 35.13)

7 Distribution of stone artifacts (Nos. 6.17, 34.3.1, 35.13) in Spot f



8 スポット f の石器分布

8 Distribution of stone artifacts in Spot f



9 土坑と焼砾炉

9 Pits and fireplace with a cluster of burnt pebbles



10 土坑と焼礫炉
10 Pits and fireplace with a cluster of burnt pebbles



11 焼礫炉
11 Fireplace with a cluster of burnt pebbles

PLATE 6



12 ピット
12 Pits



13 ピット1
13 Pit 1



14 石器分布
14 Distribution of stone artifacts



15 石器分布 (No. 25.24.29)
15 Distribution of stone artifacts (Nos. 25.24.29)



16 石器出土状態 (No. 26.7)
16 Stone artifacts (Nos. 26.7)



17 石器出土状態 (No. 4)
17 Stone artifact (No. 4)



18 石器出土状態 (No. 25)
18 Stone artifact (No. 25)



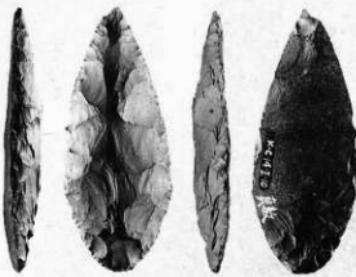
19 石器出土状態 (No. 24)
19 Stone artifact (No. 24)

PLATE 7

* 註記「真教」は真田町教育委員会の略



1 尖頭器 Point
珪質凝灰岩 Siliceous tuff



3 尖頭器 Point
硬質頁岩 Hard shale



2 尖頭器 Point
硬質頁岩 Hard shale



4 尖頭器 Point
硬質頁岩 Hard shale

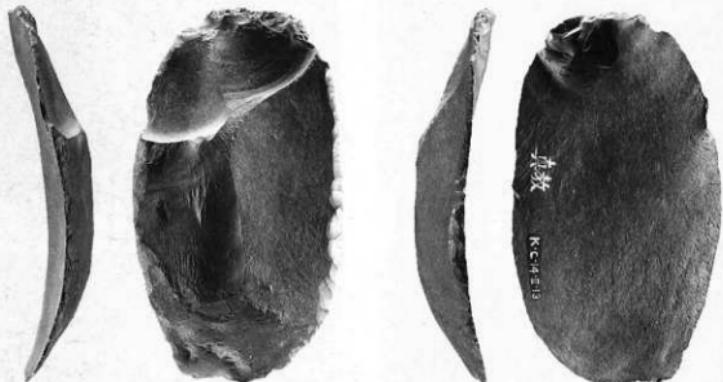


5 尖頭器（基部）Point
ガラス質黑色安山岩 Glassy andesite

PLATE 8



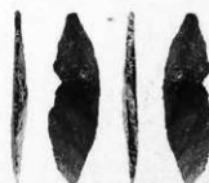
6 搓器 End-scraper
硬質頁岩 Hard shale



7 削器 Side-scraper
硬質頁岩 Hard shale



8 刨器 Side-scraper
珪質凝灰岩 Siliceous tuff



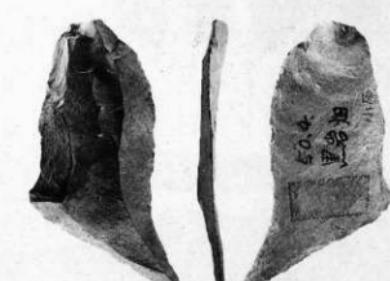
10 刨器(断片) Side-scraper
硬質頁岩 Hard shale



9 刨器 Side-scraper
珪質凝灰岩 Siliceous tuff

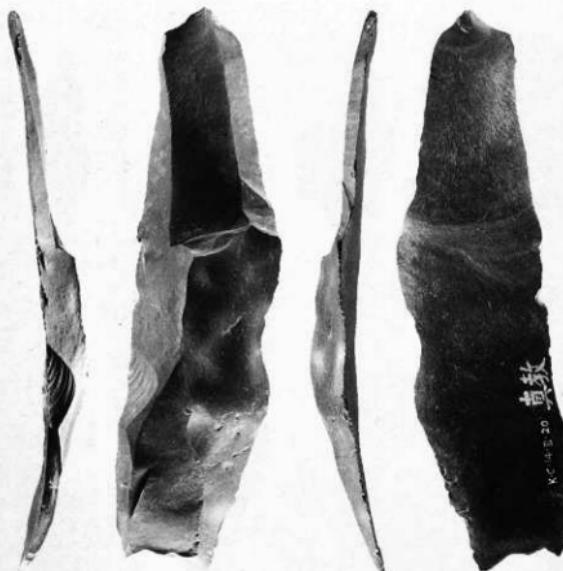


11 刺片(両面調整石器断片) Flake
凝灰質頁岩 Tuffaceous shale



12 刺片 Flake
凝灰質頁岩 Tuffaceous shale

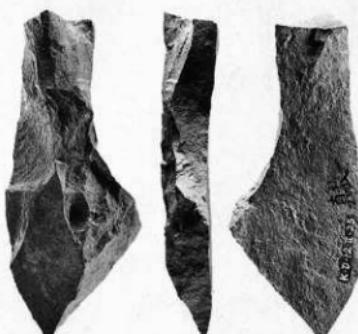
PLATE 10



13 石刃 Blade
硬質頁岩 Hard shale



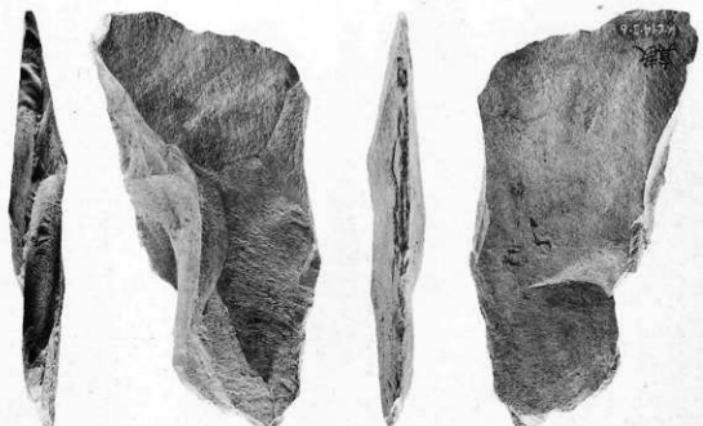
14 刺片 Flake
頁岩 Shale



15 刺片 Flake
頁岩 Shale



16 刺片 Flake
珪質凝灰岩 Siliceous tuff



17 刻片 Flake
珪質凝灰岩 Siliceous tuff



18 刻片 Flake
珪質凝灰岩 ?
Siliceous tuff ?



21 刻片 Flake
黑曜石 Obsidian

19 刻片 Flake
珪質凝灰岩 ? Siliceous tuff ?

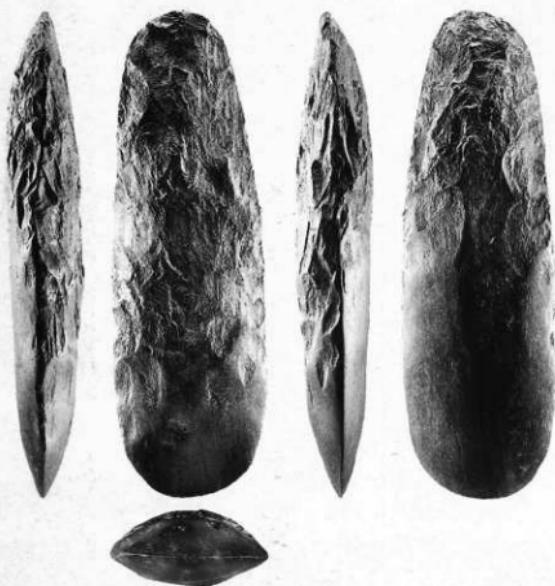


22 刻片 Flake
珪質凝灰岩 ? Siliceous tuff ?

PLATE 12



23 局部磨製石斧 Edge-ground axe
硬質頁岩 Hard shale



24 局部磨製石斧 Edge-ground axe
黑色頁岩 Black shale



25 局部磨製石斧

黑色頁岩

Edge-ground axe

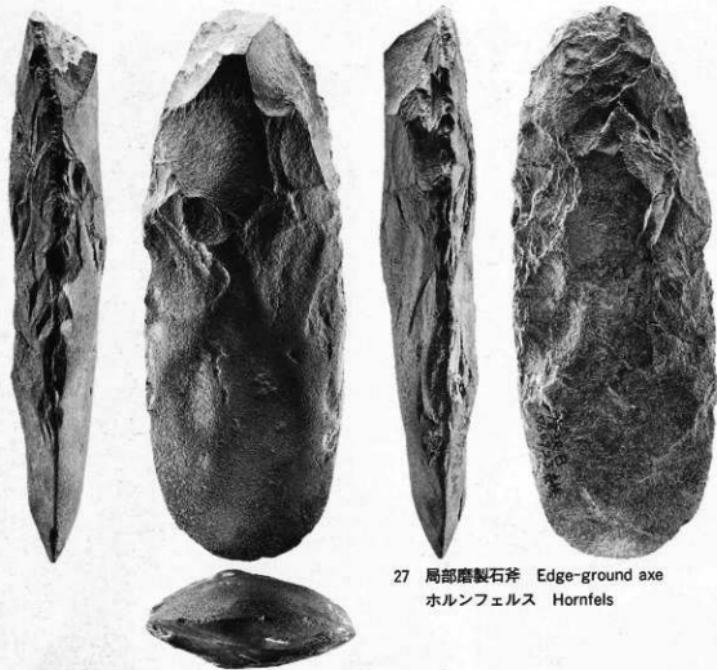
Black shale



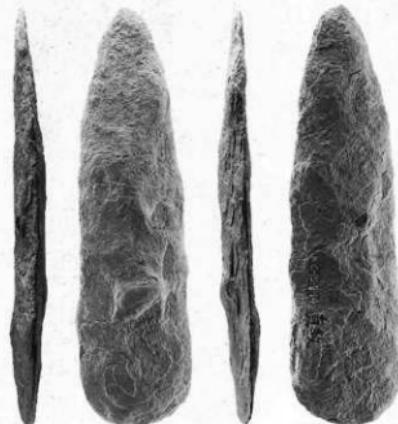
26 局部磨製石斧 Edge-ground axe

砂岩 Sandstone

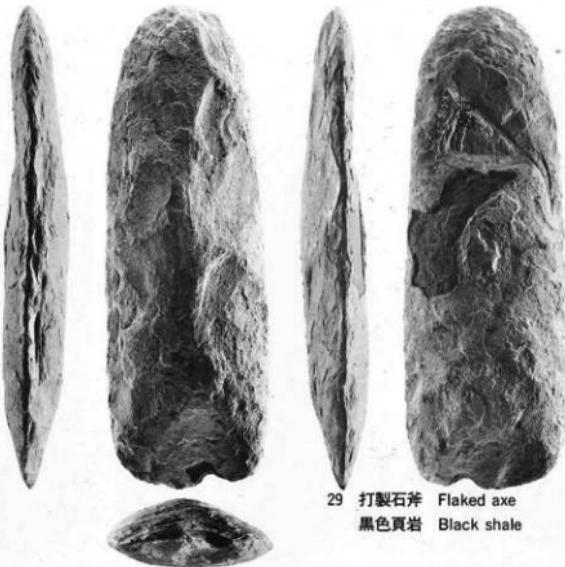
PLATE 14



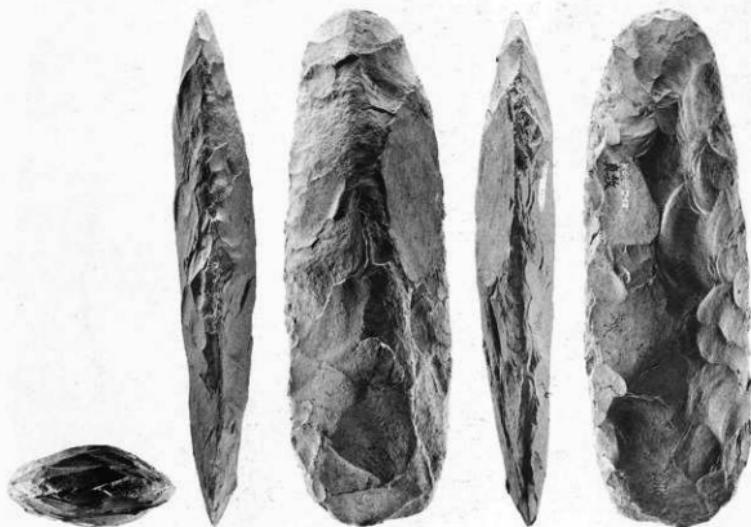
27 局部磨製石斧 Edge-ground axe
ホルンフェルス Hornfels



28 打製石斧 Flaked axe
黑色頁岩 Black shale



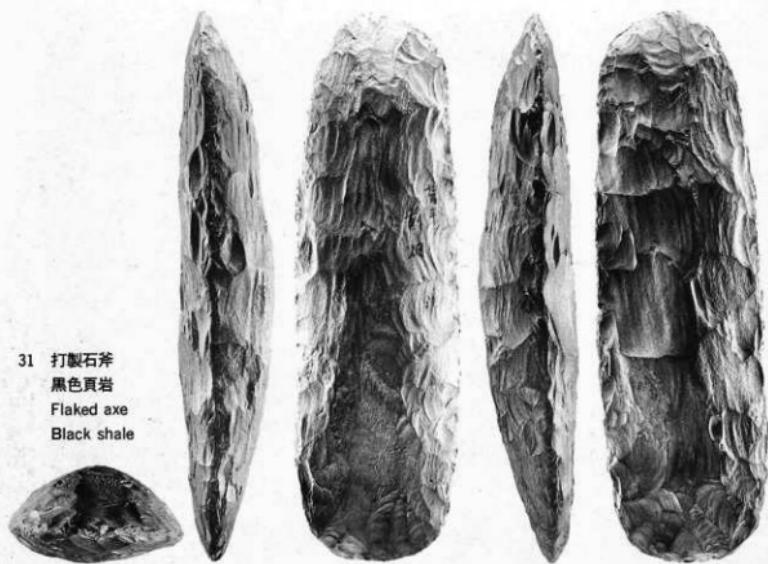
29 打製石斧 Flaked axe
黑色頁岩 Black shale



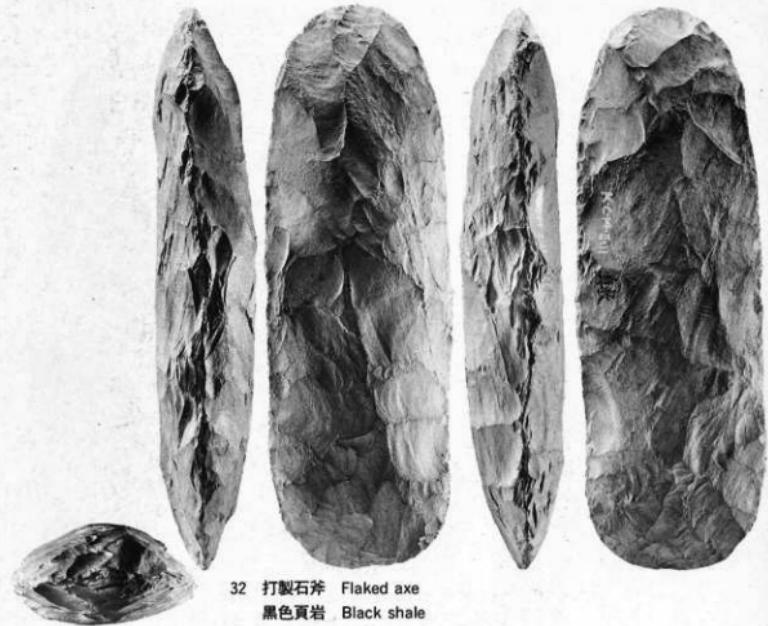
30 打製石斧 Flaked axe
黑色頁岩 Black shale

PLATE 16

31 打製石斧
黑色頁岩
Flaked axe
Black shale



32 打製石斧 Flaked axe
黑色頁岩 Black shale

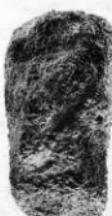
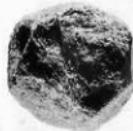
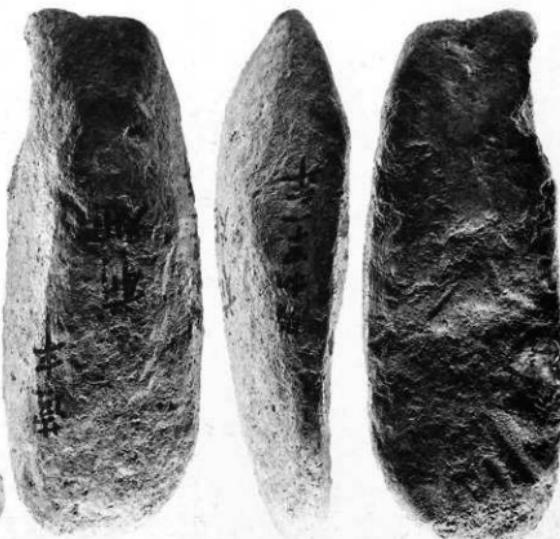


33 打製石斧？

安山岩

Flaked axe ?

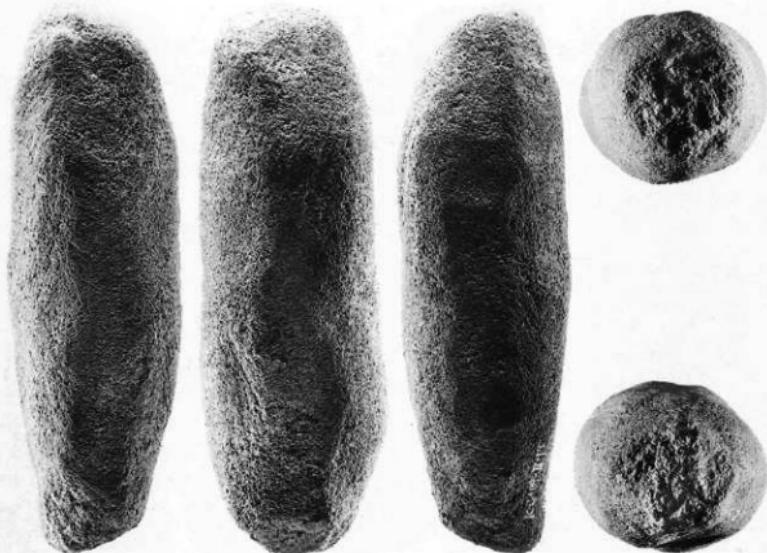
Andesite



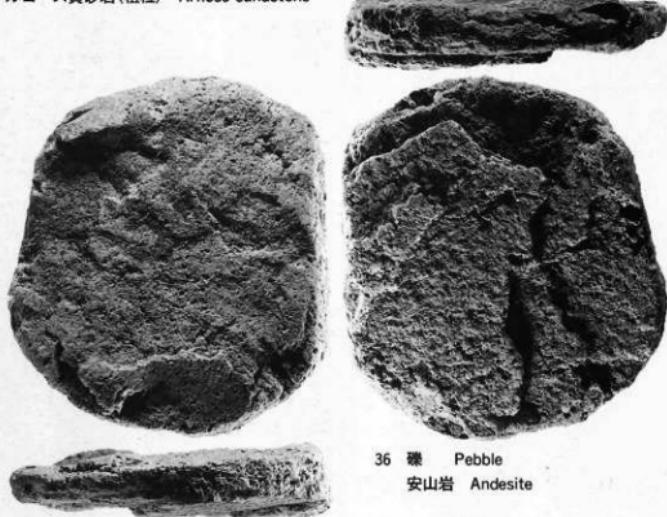
34 磨石 Grinding stone

アルコース質砂岩(極粗粒) Arkose sandstone

PLATE 18



35 磨石 Grinding stone
アルコース質砂岩(粗粒) Arkose sandstone



36 磨石 Pebble
安山岩 Andesite

後記

森嶋 稔先生が発掘調査をおこない、自ら石器の実測をし報告書作成の準備を始めた
真田町唐沢B遺跡発掘調査報告書を、先生にご指導いただき「千曲川水系古代文化研究所」に集まつた有志が、この度森嶋先生に代わってまとめるにいたしました。

この発掘調査は1968年、森嶋先生37歳の時にわずか4日間行われた学術調査で、後期
旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての移行期の標識的な石器群が出土したもので
す。既に、石器については一部発表されておりますが、正式な報告書としてここにまと
めました。

本書を刊行するにあたっては、笹澤 浩を代表として『唐沢B遺跡』刊行会を組織
し、当時発掘調査に参加した川上元、矢口忠良はじめ、矢島宏雄・佐藤信之・堤 隆が
協力して本書をまとめ、加えて森嶋先生ご自身の見解の表明として先生の関係論文を再
掲載いたしました。

今後、森嶋 稔先生の残された仕事につきましては、有志によりまとめ少しづつ刊行
してゆく予定ですので、みなさまのご協力をお願い申しあげます。

最後にご遺族森嶋和子夫人はじめ真田町教育委員会、信濃史学会、長野県考古学会、
また本書の印刷を快くお引き受けくださった信毎書籍印刷株式会社に対して、厚く感謝
を申し上げるしだいです。

『唐沢B遺跡』刊行会

代表 笹澤 浩

有志 川上 元 矢口忠良 堤 隆

佐藤信之 矢島宏雄

■発行
連絡先 千曲川水系古代文化研究所
〒387-0007 長野県更埴市屋代1893
矢島宏雄方 TEL・FAX026-272-5828

■発行日 1998年11月26日

■印刷 信毎書籍印刷株式会社
TEL 026-243-2105

抄 錄

ふりがな	からさわ びい いせき						
書名	唐沢B遺跡						
副書名	後期旧石器時代から縄文時代への移行期の石器群						
シリーズ番号							
編集者名	森嶋 稔・笹澤 浩・川上 元・矢口忠良・矢島宏雄・佐藤信之・堤 隆						
編集機関	千曲川水系古代文化研究所						
連絡先	〒387-0007 長野県更埴市屋代1893 矢島宏雄方 TEL・FAX 026 (272) 5828						
発行年月日	1998年11月26日						
ふりがな所取遺跡	ふりがな所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
唐沢B遺跡	長野県 小県郡真田町大字長字脣平 1223-31	市町村 20345	36° 31'	138° 20'	1968年 (昭和43年) 8月15日 ～ 8月18日 (4日間)	140m ²	学術調査
種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
デボ、または キャッシュ	後期旧石器時 代末～縄文時 代草創期	石器集中1、 焼跡炉1、 土坑6、 ピット4	尖頭器5、搔器1、 削器4、石刃1、 剝片11、局部磨製石 斧5、打製石斧6、 砾石2、礫1		縄文草創期の神子柴 系文化を代表する優 美な石斧類や尖頭器 が、デボあるいはキ ャッシュ的な状況で 出土した。		

Abstract

Book title	Karasawa B site						
Subtitle	A transitional lithic industry of the Late Palaeolithic to the Incipient Jomon						
Volume	Vol.1						
Editors	M.Morishima, H.Sasazawa, T.Kawakami, T.Yaguchi, H.Yajima and T.Tsutsumi						
Editorial organization	Institute for Cultural Studies of Ancient Chikuma Valley						
Address	c/o Yajima Hiroo, 1893 Yashiro, Koshoku-city, Nagano prefecture, Japan Tel・Fax +81-26 272-5828						
Date of issue	26th November 1998						
Site name	Location	Town Code	North latitude	East longitude	Investigated term	Investigated area m ²	
Karasawa B site	Sugadaira plateau, 1223-31 Osa, Sanada-town, Chisagata-district, Nagano- prefecture, Japan	20345	36° 31'	138° 20'	15 August 1968 ～ 18 August 1968 (4days)	140m ²	
Site kind	Period	Main features	Main stone artifacts		Remarks		
Depot or Cache	Late Palaeolithic to Incipient Jomon Period	1 stone artifacts concentration, 1 fireplace, 4 small pits, and 6 pits	Points, End-scraper, Side-scrapers, Edge-ground axes, Flaked axes, Blade, Flakes, and Grinding stones		Elaborate stone axes and points, derived from the Mikoshiba-type industry of the Incipient Jomon, were excavated <i>in situ</i> from a depot or cache.		



唐沢B遺跡から検出された遺構は、石器の集中区1か所・焼碳炉1基・土坑6基・ピット4基である。石器集中1は、径3m前後の弧状の分布を形成し、その北半分には石斧が、南半分には尖頭器・搔器・削器・石刃など石斧以外の石器がみられ、対置的な分布を形成する。

この集中区にみられるのは、ほとんどが完成品の石器ばかりで、石器製作によって生じた剥片や碎片は認められない。つまりこの石器集中は、石器製作によって形成されたものではなく、完成品で構成されるいわゆるデボ的な性格を有している。

唐沢B遺跡をはじめとして列島内各地でみられる神子柴系石器群におけるデボ的な石器出土状況は、後期旧石器時代から縄文時代への移行期社会の交換システムを物語る象徴的現象としてきわめて重要であると考えられる。

The artifacts

A total of 36 lithic artifacts were discovered: 26 through the excavation and 10 from the surface survey. They consisted of five points, one end-scaper, four side-scrappers, one unretouched blade, five unretouched flakes, five edge-ground axes, six flaked axes, two grinding stones, and one pebble with use traces. The most characteristic were the edge-ground and flaked axes of the Mikoshiba-type, manufactured with an extremely high workmanship. Their size was often large; eight out of the eleven specimens exceeded over 20 cm in length.

E Examination of the raw material for lithic artifacts from Karasawa B reveals the common use of hard shale and siliceous tuff for flake tools and the exclusive use of black shale for axes. The hard shale, probably originated from the Tohoku region including the Yamagata Province about 200 km northeast of Karasawa B, can be considered exotic materials. The black shale and the siliceous tuff are, on the other hand, more likely to have been local ones available from an area within 50 km from the site such as in the Niigata and the Gunma provinces.

Lithic assemblages characterized by the large axes and the leaf-shaped points, as the one from Karasawa B, have been assigned to the Mikoshiba-type industry after the synonymous site of Mikoshiba, the Nagano prefecture. The industry is dated from the final stage of the Upper Pleistocene, about 15000 BP, according to the established quaternary chronology. Archaeologically, the industry came into use after the disappearance of the microlithic industry in the transitional period of the Late Palaeolithic to the Incipient Jomon. It is not uncommon that the Mikoshiba-type industry is discovered with the earliest pottery, although this was not the case at Karasawa B. More than 100 sites with the Mikoshiba-type assemblages have been known so far mainly from the eastern Japan. Comparative assemblages have been recently reported from Ust'Inovka 3 and others, the eastern Russia, however, demonstrating a connection to the mainland Asia.



Main Editor : MORISHIMA Minoru
Cover Photo : OGAWA Tadahiro
Book Design : TSUTSUMI Takashi

Printed in Japan

Copyright : Institute for Cultural Studies of Ancient Chikuma Valley